

暁の大地
4

成
尾

陽

目次

七、神の大道◆ 9

いざ聖地へ ◇ 9

修行の心得 ◇ 18

あいさつ ◇ 27

朝の聖地 ◇ 36

朝拝と巡拝 ◇ 44

のりと奏上の心得 ◇ 53

「大本の出現」から ◇ 63

お水のご恩 ◇ 72

報恩の生活 ◇ 81

神の守護と祈り ◇ 89

天国に上り易く、地獄に落ち難し ◇ 98

食作法	◇	106
季節食・国土食	◇	115
霊界の実在	◇	124
幽体離脱	◇	133
感性を磨く	◇	142
四大綱領	◇	152
祭政一致	◇	161
教：天授の真理	◇	170
慣と造	◇	179
四つが関連して	◇	188
霊山・高熊山	◇	197
冬の熊	◇	206
神の化身	◇	216
瑞泉苑	◇	226

舌の剣 ◇ 236

ご神徳 ◇ 247

神さまの御心のまにまに ◇ 255

ありがたい修行 ◇ 264

無我の境 ◇ 274

断食 ◇ 284

まごころ ◇ 294

下駄箱談義 ◇ 303

天命を知って人事を尽くす ◇ 313

月日の駒に神ならう ◇ 322

中心はひとつ ◇ 332

昆虫の災い ◇ 341

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年から二十七年までの機関誌「おほもと」と、平成二十八年以降の「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地 4

七、神の大道

いざ聖地へ

J R名古屋駅に着いた大地は、中央本線から新幹線・のぞみ号に乗り換え、三十五分でJ R京都駅に着いた。在来線への中央乗り換え口を通り、こせんきょう跨線橋を渡って、嵯峨野山陰線のホームへ向かった。

途中の二階西口周辺は、夏休み期間中であって、多くの利用客でごったがえしていた。……人が多い、さすが京都だなあ。

日本人の集団かと思うと、どうも違う。すれ違いざまに話している言葉を聞くと、中国か韓国、あるいは台湾からの団体のようだ。

大地が新幹線の中で手にした雑誌にも、外国人観光客に関わる記事が掲載されていた。それによると、日本各地の観光地で、外国人観光客が年々増えているという。特に平成二十七年の今年は、七月までの累計訪日外国人旅行者数は、前年比四六・九%の大幅増らしい（日本政府観光局調べ）。都道府県別の宿泊者数を見ると、一位が東京、

二位が大阪とやはり二大都市が多い。続いての三位が北海道で、ここ京都は四位に入っていた。

……去年より五割近くも増えているっていうんだから、外国人が多いはずだよなあ。

大地は周囲を見渡しながら、そう思った。

先の記事によると、外国人観光客の人気度は、京都が、東京・大阪に次いで三位らしい。そうなると観光都市でもある京都にとっては経済的な恩恵は大きい。

ただ反面、対外国人のトラブルも増えているという。特にトイレの使い方では、文化や風習が違うために、日本人がビックリするような事例もあるようだ。

そこで外国人観光客向けに、ホテルや観光案内所で配られているのが、「京都のあきまへん」AKIMAHEN of Kyoto」という外国人向けのマナー本。例えば、土足で畳に上がる、帽子やサンダースをしたまま参拝するなどの「あきまへん」を、いけない程度を数字で示す「あきまへんレート」とともに紹介している。

ほかに「外国人に人気の日本の観光スポットランキング二〇一五」という記事も気になった。

ランキングの一位が京都の伏見稲荷大社とあったが、大地はまだ行ったことがなかった。二位が「広島平和記念資料館」。三位が「厳島神社」。

二位と三位が広島だったのが、大地には驚きだった。

四位が奈良の「東大寺」、五位が京都の「永観堂」ということで、ベストファイブまでの中で大地が行ったことがあるのは、高校の修学旅行で訪れた東大寺だけだった。

ランキングには、写真が掲載されていたが、次の六位の写真が気になった。長野の「地獄谷野猿公苑」だった。野生の親子猿が雪の中、露天風呂に入っている写真だ。口コミ欄には、「こんなに近くでスノーモンキーが見られるなんてすごいです」とあった。……あの猿たちか？ 確かに面白いけど、長野には、ほかにいいところがあるのになあ。

そう思いながらも、大地が住む長野市近辺での観光地を問われたら、すぐに答えられるのは、「善光寺」と「松代」、「小布施」くらいかなあ〜と考えてしまった。

長野でも近年、外国人の観光客が多くなっている。大地が今年の冬、スキーに行つた白馬村がそうである。

白馬に着いて大地がまず驚いたのは、外国人客がものすごく多いことだった。極端

な言い方をすれば、すれ違う人はほとんど外国人という感じだった。十年ほど前から、時差のないオーストラリアに絞った白馬村のスキー客誘致が大成し、今や「HAKUBA」は、北海道のニセコと並び、世界の人気スキーリゾートになっているという。白馬村では、昨年十一月二十二日に長野県北部で発生した震度五強の長野県神城断層地震の風評被害で、一時客足が鈍ったものの、行政、観光関係者、事業者が一体となった迅速な対策が功を奏し、それも回復しつつあるという。

……京都も、あの白馬村のゲレンデみたいだなあ。

そんなことを思いながら、大地は嵯峨野山陰線のホームへ降りた。

エスカレーターで降りながら、左手のホームの方へ目をやった。そこは0番ホームである。

いつだったか、祖父の松太郎から、京都駅の0番ホームのことを聞いたことがあった。

……確かー。

大地は松太郎から教えてもらったことを思い出していた。

京都駅の0番ホームは、端から端までの距離が五五八メートルで日本一長いホームとして有名であること。厳密にいうと山陰線が嵯峨野山陰線となったところから、0番ホーム

単独ではなく、ほぼ一直線上に地続きでつながっている関西空港線の30番ホームも含めての長さである。また、京都駅には34番ホームまであるが、これも日本の駅の中で最も数字の大きいホーム番号となっている。ただし、決して京都駅に三十四もの乗り場があるわけではなく、実際の乗り場は十九。関西空港線と嵯峨野山陰線のホームを、山陰線の「さん」にちなんで、30番台の数字にしているということだった。

……京都駅は0番から始まっているのに1番ホームがないのは、確か駅ビルの工事が関係していたってことだったよな。それに駅に0番ホームがあるのは、京都駅だけじゃなくって、全国に四十くらいあるんだって、おじいちゃんが言ってたなあ……と、大地は松太郎の話を思い出していた。

33番ホームまで進むと、園部行きの快速電車が停車していた。

……これだな。

大地は電車に乗り込み、発車を待った。夕方とあって、仕事を終えた通勤客が多いように感じた。

やがて電車はホームを離れた。

……快速だと亀岡まで二十分くらいか？ 速いな。

電車は、二条、円町、嵯峨嵐山と過ぎ、亀岡に着いた。大地にとっては、昨年五月の教主生誕祭以来である。あの時は、綾部から祖父母と母を乗せて車で来たが、今回は大地一人での亀岡入りだ。

駅を出ると、正面にこんもりとした杜^もが見える。

……あそこが天恩郷だな。

大地は、キャリーバッグを引きながら、聖地を目指した。南郷公園の横を通りながら、数日前に電話で松太郎から聞いた話を思い出した。

松太郎は、大地が大道場修行を受けることを大層喜んでいて。そして今回は電車で行くと聞いて、例の雑字を伝授してくれた。

「大地、天恩郷が昔、明智光秀の居城だったことは知っているだろうが、駅から真つすぐ天恩郷に向かうと、城のお堀があるけどな、あれは確かに亀山城の外堀だったんだけど、今は「雑水^{ぞうず}川^{がわ}」という一級河川で、京都府の管轄河川なんだぞ。

それから、天恩郷の入り口の黒門の手前には、坂の下から石垣沿いにクヌギが植えられているんだ。そう、あのドングリができるクヌギだ。で、クヌギは、漢字で書く

と木へんに楽と書いて「櫟」「櫟」、また木へんに国と書いて「梱」なんだ。クヌギは古名は「つるばみ」といって、万葉集に何首か歌われているんだ。

それから、クヌギは落葉樹なのに枯れ葉を残したままで越冬し、春、新葉が出てから古い葉を落とすんだ。正月の飾りに使う「ユズリハ」と同じで、「世代をつなぐ」、「家系が絶えない」、という縁起かつぎだな。それに、クヌギは木炭の材料にも最適で、茶道で使う池田炭は有名だぞ。

ほかにも、クヌギは苦労や苦痛を抜く「苦抜き」ということで縁起がいいから、大地も横を通るときは、そういう意識で歩いたらいいぞ」

と、いろいろと教えてくれた。

……おじいちゃんが言ってたクヌギはこれだな。

大地は、並んで立っている十本のクヌギの横を通りながら、「僕の苦も抜いてください」と心の中でつぶやいていた。そして、山陰線の中で拝読してきた『生きがいの探求』の一節を思い出した。

人間は神のいれものである。最初から計画をたててみたところで、何にもならない。神のみ計らいによって、知らず知らずさせられるのである。ただ邪魔になるのは人間

的躊躇ちゆうちよである。

こうと思ったら大胆に飛びこむべきである。

今回の大道場修行受講。大地としては、大胆に飛び込んだチャレンジであつた。

最後のクヌギの横を通り過ぎ、大地は黒門の手前に立つた。

『おほもと』

三代教主さまのお筆による扁額が目飛び込んできた。去年来た時には、車で入ったので、大地は初めて目にした三代教主さまの書跡だった。黒門に関しても、松太郎から聞いた話があつた。

聖師さまは『靈界物語』（第十四卷第八章）の中で、赤門（アカンモン）に対して、黒門を“苦勞者”と例えられている。また、“苦勞した人が通る門だから、黒門（苦勞者）なんだ”とも述べられたそうだ。

そして、黒門の扉はいつも開いている。大本はいつでも誰でも、「来る者は拒まず」の精神で、この門が閉まることはないのだ。

大地は黒門の前で二つ深呼吸して一礼し、ゆっくりと苑内に歩を進め、玉砂利を踏みしめた。

修行の心得

大地は黒門の前で一つ深呼吸して一礼し、ゆっくりと苑内に歩を進め、玉砂利を踏みしめた。

穏やかな聖地の空気が大地を包み迎え入れているような気がし、玉砂利の音が、まるで音楽を奏でているようにさえ思えた。

……黒門の外と中とは、ずいぶん雰囲気が違うんだなあ。

大地は真奈井通りをゆっくり歩いた。しばらくして、右手前方に万祥殿の^{いらいか}藪が見えた。大地は、万祥殿の方を向き、一礼した。

……去年の五月に來た時に比べると静かだなあ。

教主生誕祭、全国愛善歌奉納大会で賑わって^{にぎ}いた時とは違い、苑内は静まりかえっていた。大地は南側の東光苑広場の方へ身を直し、車いす用の歩道を進んで、みるく会館の正面玄関から入り、左手の総合受付へ向かった。

「こんにちは、ようこそお越しくださいました」

受付の女性が笑顔で迎えてくれた。名札を見ると、水田春子とあった。

「こんにちは、長野の兩宮^{あまみや}大地と申します。明日からの大道場修行をお願いしていたのですが…」

「はい、承っております。兩宮さまですね。確か、綾部の梅木松太郎さんのお孫さんですよ」

「は、はい、そうですが…。祖父をご存じなんですか？」

「それはもうよく知っていますよ。大本では有名人ですから」

水田は笑いながら言った。

「そうなんですか、まいったなあ」

大地は少し照れながら答えた。

「では、これにご記入をお願いします」

大地は、受付用紙に住所や氏名など必要事項を記入して渡し、宿泊・食事代を渡した。

一般のセミナー等で五日間も受講すれば、それ相当の受講料が必要となるだろうが、大本大道場修行では、無料である。必要なのは、宿泊代と食費、それに『修行のしおり』というテキスト代だけである。

宗教法人で収益事業でない場合は、宿泊食費代も一泊二食で一五〇〇円以内という

規定がある。大本では、宿泊代が一泊八〇〇円、朝食代二五〇円、昼・夕食代が各四〇〇円で、一泊二食の合計が一四五〇円である。ただ、初めての受講者は『修行のしおり』代・五〇〇円が、また、四日目の綾部移動で、JRを利用した場合の運賃・九七〇円が必要となる。

大地のように前日宿泊（夕食共）で、五日間の修行を全日程受講しても、全部の合計が九、七五〇円と、一万円でおつりがくるというリーズナブルな費用である。

初めて大道場修行を受講する人は、まずその低価格に驚くという。

……五日間でこれだけとは。ホテル一泊分だなあ。

大地は水田から『修行のしおり』と五日間の食券を受け取った。

「お部屋は、安生館二階の二〇二号室です」

最後に水田からルームキーを受け取った。

「場所はお分かりますか？」

「だいたい見当はつきますが……」

「じゃあ、ご案内しますね」

そう言って水田は、受付のカウンターから出て、大地を案内した。みろく会館玄関を出て右手にある安生館（修行・参拝者用宿舎）の一階西玄関から入り、エレベータ

ーを使つて二階に上がった。

東へ向かつて廊下が伸びていてその一番手前、北側の部屋が二〇二号室だった。

「こちらです。では、七時から『修行の心得』の説明がありますので、それまでに、『修行のしおり』と筆記用具を持って神教殿にお越しください。講座室がある神教殿は…」と、水田は神教殿までの行き方を丁寧に説明した。

大地は部屋に入り、荷物を置いた。北側の窓からは、神教殿前の神旗等をはじめ、駐車場の方が見渡せる。

「こんな良い部屋なんだなあ。ベッドがあつて、トイレと洗面台もついているじゃないか」

修行ということで大地なりに想像していた宿泊室とは違い、ちょっとしたビジネスホテルよりずっときれいだと思つた。

二人部屋だったが、修行の間は一人で使えるとのこと、大地は安心した気分になった。ビジネスホテルと違うのは、部屋にテレビや電気ポットなどがなく、入浴は安生館一階に隣接する大浴場『洗心亭』を使うということくらいである。

イスに腰を下ろし、無事に亀岡に着いたことを実家に報告するため、スマートフォン

ンで母・京子にメールを打った。

「無事に着けて良かったね。しつかり修行してください」
相変わらず短い返信だった。

午後七時前、大地はみろく会館の二階北側の出入り口から出て、神教殿に入った。

……木の香りが、気持ちいいなあ。

大地は靴を脱いで下足入れに納め、廊下をゆっくり進んだ。

……きれいだなあ。

講座室に入るとすでに二、三人の人が机に着いていた。「こんばんは」と挨拶^{あいさつ}をし、空いている机に向かった。

……あれ、カリモクだな。

妙なところへ目がいく。職種は違うが、大地は前の仕事の関係で備品のブランドが気になるようになっていたので、講座室で国内最大手メーカーの家具を使っていることに感心した。

イスに腰掛け、机上に『修行のしおり』と筆記用具を置いた。

……やっぱり座り心地がいいなあ。

大地は少し緊張した面持ちで時間を待った。程なく、数人の受講生が講座室に入ってきて席に着いた。

前夜の『修行の心得』の時間は、五日間の大道場修行の正式プログラムではなく任意での受講ではあるが、「できれば受けておきなさい」という松太郎の勧めで受講することにした。

午後七時、大道場の男性係員・坂口満^{みつる}が入ってきた。大地を含めた今回の修行者の亀岡での四日間をお世話してくれるとのこと。

坂口は早速、今夜の『修行の心得』を担当する竹田伝生^{つたお}講師を紹介した。

竹田講師は簡単な自己紹介の後、お礼拝の仕方の指導を行った。今回のメンバーの中には、初めて大本に來た受講者もいるようで、まずは神さまへの基本的なお参りの仕方を一通り説明した。

大地は、松太郎から教えてもらったこともあり、これまでも何度かお参りしたことがあったので、すぐに理解できたが、まったく初めての受講者は、少々ぎこちないしぐさで学んでいた。

「天津祝詞やご神号、拍手の意味は、三日目の『祝詞の意味』で詳しく説明がありま

すので、今夜は簡単な説明にさせていただきます」

と言ってから竹田講師は、

「では、万祥殿の方を向いて一緒にお礼拝いたします」と言っ、そろって礼拝を行った。

続いて、『修行のしおり』の後の方にある『修行にあたつて』のページを開くように指示した。その冒頭には、以下のお示しなどが書かれている。

〈心がまえ〉

◇両聖地での五日間は、すべてが修行です。神氣にふれ、ご神徳を十分にいただいてください。

◇信仰には、素直であること、真剣であることが大切です。このたびの修行を「一期いちご一会いちえ」と心得て、懸命に励みましよう。

天恩郷での修行は、聖師さまの高熊山のご修行にあやかった言葉で、人生の意義をうかがい、新生させていただく節として行うもので、修行は、その後の生き方の中に続いています。

実社会にあつて生きるということ、いろいろの人とつき合つて、いろいろの目に遭^あひ、課せられた仕事に専念して、自分のものとして深めてゆくことによつて、世界というものを広く深く見聞^{けんぶん}さしていただくことが、ほんとうの修行であり、身魂磨きとなるものでしょう。

（三代教主さま）

大道場修行では「修業」と書かず、「修行」としているのは、三代教主さまのお示しにあるように、日常の人との交わりの中で、自らの「行い」を「修める」ことこそが「修行」であるとしてゐること。また、単に講座を聴^きくだけでなく、五日間を通して、聖地の中で神さまの氣に触れることが大切であること。さらに、「一期一会」ということは、一生に一度の大切な「出会い」「場」という意味であり、そうした気持ちで五日間を過ごすことが大切だ、という説明がなされた。

大地は、竹田講師の例え話を交えながらの穏やかな語り口調に耳を傾けながら、「なるほど、そういうことか」と頷^{うなず}いていた。

〈受講〉

人が何気なく話していることの中に、天の声がさしはさまれているかも知れません。

そのことが、直接、私に関連のないことであっても、わたしの関係するある人に緊急を要する関連事かもしれません。そんな場合、天の声は私を仲立ちとして、そのある人に伝えられる場合もあります。いずれにしても、人は慢心さえしなければ、何かの方法で神さまのみ幸を得て、思わぬご守護をいただくものです。（三代教主さま）

竹田講師は、お示しにある“天の声”が、一般で言う直感や気づきであり、大本ではそのことを神さまからの“ご内流”であると説明した。

大地は昨年、祖父・松太郎の家で、松太郎の友人・本宮敏夫から聞いた不思議な結婚のエピソードの中で、本宮の母親の“ご内流”のこと（本誌・本年六月号参照）を思い出していた。

……いろんなことがつながっていくなあ。

そして、たった今そう思ったことも、

……やはりご内流なのかな？

そう、大地は感じていた。

あいさつ

「ご内流」をいただくためには、神さまは『赤子の心』になつてくだされ』とおっしゃっています」

竹田講師が言った。

「すると中には、赤ん坊は神さまのご用ができるのですか？」と質問された方がありましたが、このお示しは一つの例えでして、赤ん坊のように邪氣のない、素直な心になつてください、という意味があります」

……それは何となく分かるけど…。

大地はそう思っていた。

「人はこの世に生まれ出る時、神さまから魂をいただきます。それは、水晶のような濁りのない、透き通った、とてもきれいな玉のようなものなのです。ところがこの世で暮らしていく間に、いろいろな目にあつて、その玉がへこんだり、キズがついて、デコボコになつたりします。丸い玉はピカピカだと掴みにくいのですが、デコボコになると、悪いことを考える人から掴まれやすくなります。ですから、できるだけ、掴まれないように、いつもツルツルに磨いておいた方がよいのです。玉を磨く、つまり

自分の魂を磨くことを「身魂磨き^{みたま}」といいます」

竹田の説明に大地は、高村特派から聞いた取り込み詐欺のご神徳談（本年九月号〈第六十九回〉参照）を思い出していた。

……なるほど、あのことか。

大地は、高村の話と今聞いた話とがつながった感じがした。

「赤ん坊が泣いているとき、泣きやまそうとして、赤ん坊にお金を見せても、あるいは、脅したりすかしたりしても、いっこうに効き目はありませんよね。赤ん坊は心のままにただ泣くだけです。そんな無邪気な、赤ん坊のような心を、神さまは求めておられるのです。ここでの五日間の講座も、そうした素直な心でお聞きになることをおすすめします」

竹田講師は、淡々と説明を続けた。

「修行のしおり」末尾の六ページにわたる「修行にあたって」には、複数の小見出しがついている。

〈心がまえ〉に続き、〈受講〉〈鎮魂〉〈礼拝〉〈礼儀〉〈言葉づかい〉〈あいさつ〉〈食事〉〈入浴〉〈宿舎〉、加えて「八雲琴について」の項目もあり、とても盛りだくさんだ。一

時間ではすべてを詳しく解説しきれない内容だが、竹田講師は引き続いて、主立ったところをかいつまんで説明した。

〈礼儀〉の項目で、長幼の序を大切にしましょう、とあった。これに関連して竹田が説明を加えた。

「先日、テレビで見た話題ですが、タレントのタモリさんが、芸能人同士のあいさつについて、ある間違いを指摘していました。それは、仕事が終わった後などに交わすあいさつで、〃おつかれさまでした〃という言葉についてです。芸能界では、これを後輩が先輩に言うことが多いようだが、あれは間違っている、と、タモリさんが指摘していました」

……えっ、間違っているの？ それでいいんじゃないのかなあ？

大地は思った。

「この習慣は芸能界に限らず、社会でもよくあることで、上司から部下へは、〃ご苦労さま〃と言い、その逆は、〃おつかれさまでした〃が一般的になっていますね。でも、実はタモリさんが言うように、本来は、〃おつかれさま〃も目上から目下へ掛ける言葉なのです。それが現代では、〃おつかれさまでした〃は、慣用的に部下から上司へ言う言葉だと思われるようです」

……え、それ、ホント？

大地は声にこそ出さなかったが、そう言いたかった。

「実は大本では、この『おつかれさま』を使いません。私が本部に来た時、先輩からそう教えられました」

……なんで？

「その理由は、『おつかれさまでした』の『つかれ』は、悪い霊が憑依する『憑かれ』と同じ音だからということでした」

……あ、なるほど。

「ですから大本の中では、先輩からであれ、後輩からであれ、お互いに『ご苦労さまでした』、あるいは、もっといいねいに『ご苦労さまでございました』と言いなさいと教えていただきました。そして、それにはちゃんと理由があるのです」

……どんな？

「それは大本のみ教えに基づくものです。大本では、この世をお造りになられた神さまがなさるお仕事、み業わざのことを『ご神業しんぎょう』といいます。そのご神業は、この世にあつては、人を使つて遂行されます。私たち人間は、一人一人神さまからご神業遂行の

ための「ご用」を与えられています。そのご用は、一人一人違うものですが、それぞれが素直に与えられたご用に取り組んでいくことが人生を歩む上で大切なことです。ですから私たちはお互いに「神さまのご用、ご苦労さまです」、または「ご用、ご苦労さまです」、と声を掛け合い、励ましあつていかなくはないのです。この「ご用、ご苦労さまです」の「ご用」を省略して「ご苦労さまです」とあいさつします。それが大本の中での慣例になっています」

……なるほど、そんな深い理由があつての「ご苦労さま」か。

「最近はどうしたことが忘れられがちですが、私はとても大切なことだと思つています」

大地は感心しながら頷いた。
うなず

「忘れられがち……で思い出しました。私は、すぐ話が脱線するのが悪い癖なのですが、これも先輩方から伝え聞いたお話です」
と笑いながら、竹田は話題を変えた。

「神さまの道、神道では「清め」や「禊ぎ^{みそぎ}」、「祓^{はら}い」ということをとても大切にします。これを専門的な言葉に直すと「潔斎^{けつさい}」と言います。大本でも大切なことで、いちばん

大きな祭典である節分大祭は、天地人^{てんちじん}の大潔斎^{しんじ}神事です。節分大祭に限らず、祭典にお仕える祭員は、身も心も清めてお仕えしなくてはなりません。特に大勢の祭員がお仕える節分大祭では、祭典前に本部祭員はもちろん、地方機関の代表の祭員の方々も潔斎をします。そして祭典当日には、身を清めるために本部の浴場で「潔斎風呂」が準備されています。ところが浴場でよく見かける光景があります。それは、浴槽にゆつくり浸^ひかつてワイワイと世間話をしておられる姿です。これでは普通の入浴になつてしまい、本来の目的と違つてしまいます」

……へ、どう違うんだろう？

「本当なら、井戸端で水をかぶつて身を清めるくらいでないといけないわけですが、年配の方もおられますし、さすがに一年で最も寒い時期に、皆さんに水ごりを求めるのは難しいですね。風邪をひかれてもたいへんです。その代わりにお湯を使つていただくということなのです。ですから本来、潔斎風呂というのは、「入浴」ではなく、「湯浴み」でないといけないのです」

……なるほど、そういうことか。

「何事でも本来、どういう意味があるのか、ということを知っておくことは大切なことだと思ひます」

……そうだなあ。

大地はまた頷いた。竹田は「修行のしおり」の本文のテキストに戻り、説明を続けた。時計を見ると、終了の午後八時に近づいていた。

竹田は、最後のページの〈宿舎〉の項目にある聖師さまの道歌を読み上げた。

一善を為さざりし日は何となく

心の不快を感じるものなり

「一日の終わり、就寝前には、その日一日を振り返っていただきたいと思います。静かに省み、神さまに感謝してからお休みください。なお、ここで『省みる』というのは、悪かったことを反省することだけではありません。何か善いことがなかったかと振り返ることも大切です。善いことであれば、素直に感謝することができますね。それは自分のことに限らず、ほかの人からしてもらった善でもいいのです。『今日、いっしょに修行を受けたAさんのあのお話はとても良かった』と思いますのです。するとそこに感謝が生まれ、得をした気分になります。それは自分の徳につながり、ちいさな一善にもなるうかと思えます」

……そうだあ、物事の受け取り方によつて、気持ちはずいぶん変わってくるんだらうなあ。

大地はそう思いながら、竹田が言ったことをしおりの余白に書きとめた。

午後八時を少し過ぎ、竹田の話が終わつた。お礼拝の後、竹田と入れ替わりに担当の坂口が講座室に入つてきて、明日の日程を説明した。

「明朝の起床は五時です。洗面を済まされたら、各自のお部屋の清掃をお願いします。その後、五時半になりましたら、みろく会館のロビーにご集合ください。皆さんとご一緒に万祥殿へ向かいます。万祥殿のお掃除の仕方などをご説明しますので、引き続き、殿内やお庭の掃除をさせていただきます。そして六時から朝拝となります。

では、この後、お風呂にお入りください。お風呂は安生館の一階の西側に隣接している洗心亭せんしんていです。文字通り、体を洗つていただくと同時に、心も洗つていただければと思います」

坂口がニコニコしながら言つた。

……なるほど、それで洗心亭っていうんだ。

大地は神教殿を出て安生館に戻り、仕度をして洗心亭で一日の疲れをとつた。

「…今日の一日を感謝と共に、静かに振り返ってみましょう」

午後十時、部屋のスピーカーから就寝を告げるアナウンスがあり、八雲琴の音色と出口日出磨尊師さまの「生きがいの探求」の一節「向上への道」が流れてきた。大地が何度か拝読した箇所で、心安らぐ思いになった。

……こうして朗読で聞かせてもらうと、またいいもんだなあ。

そう思いながら、一日を振り返った。

ふだんならまだ床に着く時間ではないが、明日が早いからと、大地は横になった。緊張しているせいなのか、なかなか寝つけなかったが、いつの間にか眠りに就いていた。

朝の聖地

大地の耳に、どこからともなく能楽の小鼓と笛の音が響いてきた。

午前五時。聞き慣れないリズムが眠りを破った。ほどなく女性の声が流れてきた。

「修行、参拝の皆さま、おはようございます。すがすがしい聖地の朝がやってまいりました。洗面が終わりましたら、各自のお部屋、廊下、お手洗いの清掃をお願いします」

一瞬、どこにいるのか？　と思ったが、すぐに現実に戻った。

……そうだ、修行に来てたんだ。

大地はおもむろに起き上がり、ベッドに腰を掛け、両手を上げて背伸びをして、一つ深呼吸をした。頭はまだボーツとしていたが、立ち上がって目をこすりながら窓に近づいた。カーテンを開けると、すでに外は明るくなっていた。

洗面をすませて着替え、部屋にあったほうきで簡単に掃除をした。その後、昨夜言われていたように、みろく会館一階のロビーへ向かった。

玄関から入ると、係の坂口が待っていた。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「おはようございます。はい、たぶん眠れたと思います」

まだ、大地のほかには誰も来ていなかった。

「あの、坂口さん」

「何でしょうか？」

「起床の時に流れていたのは、何の音ですか？ 初めて聞いたんですが、結構インパクトがありますよね」

「あれは能楽のお囃子はやしの音だよ。聞き慣れない音楽で、時々、目覚ましにはきついと言う人もあるけどね」

坂口が笑いながら言った。

「能楽というと、あの万祥殿ばんしょうでんの舞台でされるものですか？」

「そう。あの起床のお囃子の音は、平成五年の綾部の長生殿能舞台びら抜きでの演目で、金剛流の『翁』おきなという曲の中の『三番三』さんばそうという、とてもおめでたい部分なんだよ。普通はお囃子の四つの楽器は、それぞれ一人なんだけど、この『翁』に限って、小鼓こつづみを三人で打つんだよ」

「あのポン、ポンと鳴る楽器ですよ」

「そうそう。能の演目が全部で約二百四十番ある中でも、『翁』というのは別格の曲で、

「翁は能にして能にあらず、といわれているんだ。ほかの能の曲のような物語はなくて、天下泰平、五穀豊穰、国土安穩を祈る、一つの神事といえるものなんだよ」

「そんな厭かなものなんですか。一度見てみたいですね」

「それが『翁』は、普段はあまり演能されなくてね。舞台披きのような祝賀のときや、お正月の初会に上演される場合が多いみたいだね。だからよくお正月のNHKの番組で放送されたりするよ」

「そうなんですか。じゃあ、来年のお正月、気をつけておきます」

そうこう話しているうちに、数人の修行者が集まってきた。坂口は修行者に向かい、あらためて朝のあいさつをした。

「みなさん、おはようございます。ではこれから万祥殿へご案内いたします。朝拝の前に、万祥殿内外のお掃除をさせていただきますので、よろしく願います。では、参りましょう」

と言つて先頭に立ち、みろく会館の玄関を出て、万祥殿へと向かった。夏の亀岡は日中蒸し暑いが、早朝の苑内はさわやかな空気に包まれていた。

大地たちは万祥橋を渡り、万祥殿の前庭に着いた。すでに誰かが殿内をほうきで掃

き、前庭では熊手目を入れている男性の姿があった。夏休みのこの時期、修行者以外に、参拝者も複数人あるようだった。

「では、私たちは上に上がって濡れ縁をお掃除しましょう」

坂口が修行者をうながした。シュロぼうきやバケツ、雑巾などの掃除用具がある場所まで案内し、それぞれに用具を渡し、誘導した。大地もバケツと雑巾を手に、濡れ縁の拭き掃除を始めた。

ふだん雑巾を使うことが少ないので、大地にとっては久しぶりの感覚だった。朝拝までのわずかな時間であつたが、体を動かし、ほんのり汗ばんできた。

ドーン！

朝拝の始まりを知らせる報鼓が鳴った。

ドーン！ ドーン！ ドン・ドン！

朝拝十分前である。報鼓が鳴り終わると、坂口が声をかけた。

「皆さん、ありがとうございます。もうすぐ朝拝が始まりますので、掃除道具を元の場所に戻して、つくばいを使って殿内に入りましょう」

大地は掃除用具を片付けながら、坂口に質問した。

「さっきの太鼓には、決まった打ち方があるんですか？」

「あれは『みろく太鼓』と言って、五回、六回、七回の合計十八回打つんだけど、ドーン、ドーン、ドーン、ドン・ドン、という具合に、それぞれ最後の二回は続けて打つんだよ。大本では五六七と書いて『みろく』と読むので、五六七太鼓だね。というより、地上天国のみろくの世、みろくの世界の『みろく』を音で表すために、五・六・七と打つだけだね」

「そうなんですか。太鼓の打ち方一つにもそんな意味があるんですね」

大地は感心しながら坂口の話聞いた。

「そうだね。じゃあ、つくばいを使って殿内に入ろうか」

「はい」

「つくばいの使い方をご存じの方は、先に使っていただいて殿内にお入りください。自信のない方には、今からご説明します」

何人かは、手慣れた様子で先につくばいを使い、殿内へ向かった。

……おじいちゃんに教えてもらって、一応知っているけど、念のために聞いておこう。大地はそう思って、坂口の近くに寄った。

「これがつくばいです。つくばいは、茶道、茶の湯では、お茶室に入る前に、這はいづくばるように身を低くして、手と口を清める場所です。つくばうことから、つくばい」といいます。また、俗世間との結界けっかいという意味の場所でもあります」

大地は頷うなずいた。

「神社などでは、参拝する前に手と口を清めるためにありますが、手水ていずと言ったりします。万祥殿には、ここともう一カ所、万祥橋を渡る手前の左手にもあります。つくばって使うと言いましたが、お茶室の庭、路地にあるのと違い、いずれも立って使うので、立ちつくばいとも言います」

……いろいろあるんだなあ。

「まず、絶対してはいけないことは、柄杓ひしゃくを口に直接つけないことです。笑っている方がありますが、柄杓に口をつけて使い回したら、力士の力水になりますからね。ちなみに、相撲の力水は清めの意味ではありませんのでね」

「へえ」

大地は坂口の豆知識に感心した。

「使い方ですが、柄杓を右手で持って水を一杯すくい、半分の水で左手をすすぎます。

柄杓を持ち替えて残りの半分の水で右手をすぎます。次に、柄杓を右手に持ち替えて水をもう一杯すくい、左手に半分の水を受けて口をすぎます。皆さん、飲んだらダメですよ」

みんながクスクスと笑った。

「最後に柄杓を立てて、水を柄杓の柄に伝わって流し清めてから、元の位置に戻します。これは茶道のときの作法を基本としていますが、一般の神社では、口をすすいだ後に、もう一度左手を清める作法が多いようですね」

……そんな違いがあるのか。

「それから、神社のつくばいで多く使われている柄杓のように、ぐ合ごう というこの円筒状の水を汲む部分が、平たく浅い場合は伏せて置くしかありません。でも万祥殿で使っている茶道で使うのと同じようなぐ合ごう の深いものは、伏せて置きません。伏せて置くのは、かわや 廁かわや、つまりトイレの手水鉢ちようすばちの場合ですので、ここでは、後の人が使いやすいように、ぐ合ごう の口を左に向け、横にして置いてください」

「いろんな決まりがあるんですね」

大地が言った。

「柄杓を戻したら、ご自分のハンカチで拭いてください。今日、持って来られなかつ

た方は、お貸ししますが、今日の夕拝からは持参してください。たまうに、ズボンで拭いている人がいますが、そんなことしたら、つくばいを使う意味がなくなりますので、ご注意ください。いいですか、雨宮君」

「えっ、僕ですか？　ちゃんとハンカチは持っていますけど…」

「それは感心」

「…はい、ありがとうございます」

側で二人の会話を聞いていた修行者全員が笑った。

「つくばいは、決して汚れた手を洗うのではなく、あくまでも手と口を清めるためのものです。精神的にはこうした動作を通して、神さまの前に進むに当たって、心を清め洗う。ような気持ちが必要です。ですから、神社の手水鉢には、よく『洗心』という言葉が彫つてありますが、そういう意味からなんです」

「なるほど、そうなのか」

大地はまた感心した。

修行者らは順番につくばいを使い、坂口の後について万祥殿内に進み、所定の位置に着座した。

朝拝と巡拝

万祥殿内には、八雲琴の音が流れている。

「ここでもいいんですか？」

大地は自分が座る位置を確認した。

「そこでもいいよ、雨宮君。畳一枚に三人、二人と横並びも縦並びも交互に並んで座るんだよ。そうすると前の人と人の間から、ご神前を拝することができでしょ。こうして交互に並ぶことを私たちは「千鳥に座る」と言ってるけど、千鳥模様や千鳥配列からきてる言葉なんだろうね。もっとも、殿内にいっぱい参拝者が入ったら、こんなにゆつたりは座れないけど、朝夕拝のときには、こうして座れるんでね」

坂口が続けて言った。

「じゃあ、祝詞袋のりとから『おほもとのりと』と讃美歌を出して、祝詞袋の上に乗せて膝の右横に置いてください」

「はい、そうですね」

と言いながら、大地は右に置いた祝詞袋を見ながら言った。

「坂口さん、この祝詞袋は、いろんな柄があるんですね」

「あ、これね。いろいろな柄があつて楽しいでしょ。実は、この袋は手作りでね。大本の婦人組織の直心会員の皆さんが作られたものなんだよ。かれこれ五、六年前になるかなあ。本部の直心会事務局へ教主さまからたくさんの方物がお下げされて、それを全国の直心会に呼びかけて、会員さんに作っていただいて、それを万祥殿に献納されたものなんだよ。確か全部で三百個くらいはあると思うんだけど、皆さんが心を込めて作られたものだから、とてもありがたい品なんだよね」

「そういう経緯があつたんですか。でも、既製品じゃなくて手作りというのは、味があつていいですね」

「ホント、いいよね。『おほもとのりと』と讃美歌が、直心会員の皆さんの“まごころ”に包まれているようで、ありがたいね」

「“まごころ”ですか…」

大地は数回うなず頷きながらも、ふと“まごころ”という言葉の意味を考えていた。

…いったい、“まごころ”って何なんだろう…、と。

そんなことは知るよしもなく、坂口が修行者の方を向いて、『おほもとのりと』と讃

美歌を手に、朝拝の説明を始めた。

「もう数分で朝拝が始まりますが、最初にお祓いを受けていただきます。その時は、皆さん頭をお下げください。その後で、先達にあわせてこの『おほもとのりと』の中の祝詞を奏上していただきます。開いた最初のところにある『天津祝詞』に関しては、『ご神号』までは先達のみが奏上します。皆さんは、『ご神号』『惟神靈幸倍ませ』を、この二重括弧の『守り給へ…』から奉唱してください。その後続いて『感謝祈願詞』をご一緒に奏上していただきます。引き続き、こちらの讃美歌を斉唱していただきますが、先達に続いて、二節目から斉唱してください。今朝は…」

と言いながら、前方の掲示板に目を向けた。

「第一〇九番ですね。よろしいでしょうか？」

「はい」

大地たち修行者が頷いた。

ほどなくして、白衣、白袴姿の先達が入殿し、参拝者の前、上座側の定位置に着いた。おおぬさ
大麻を捧持した白衣・青袴の係員が、まず先達を修祓し、続いて参拝者をお祓いした。
引き続き先達が昇殿し、朝の礼拝が行われた。

その後先達が拝殿から降り、拝読台の上にながって、二拍手し、ご神書を拝読した。

「『おほもとしんゆ』、第七卷」

大地たちは、目をつぶって拝読の声に耳を傾けた。

「明治三十一年旧三月二十四日

神は別け隔ては致さぬぞよ。皆一様に守護るのじやぞよ。神は隔ては致さぬが、人民が隔てを致すのであるぞよ。

皆和合致して神の世話致して呉れたなれば、天地の御神様は御歎びであるぞよ。

夫れに就いては、万の神々様も御歎びであるぞよ。和合の信心で無いと、真実の御神徳は無いから、皆和合致して下されよ。

辛き所を凌がぬと、真実の御蔭は貰えぬぞよ。苦勞致さぬと何も判らぬぞよ。誠の者

は一旦は苦勞もあれども、去る代わり判りて来たなれば結構であるぞよ。苦勞無しには誠は出来ぬぞよ。

慾は要らぬぞよ。慾思うから心を苦しむのじやぞよ。神に一任して仕舞うたならば、

神が守護うてやれども、其の者が無いぞよ。神心になりたならば、病氣も無し、長寿も出来るし、結構であれども、人民と云うものは真実に慾の深きものであるから、我

と我身を苦しめるのじゃぞよ。

人民と云うものは、前世の因縁が皆あるから、我身を恨めて置かねば、我身に罪科があるのじゃぞよ。天地の御神様に御託びが第一等であるぞよ。御託びが叶えば結構になるが、此の世の人民、天地の御無礼は言い尽くされぬぞよ。御託び致せば赦してやるぞよ。

何事も判る世になるぞよ。水晶の世になるぞよ。神代に復古るぞよ。」

拝読を聞き終わり、大地の記憶の中に、〃和合、神心、お託び〃の言葉が残り、そのことに意識を向けている間に、先達が復座し、参拝者の方を向いた。

「ボーナン・マテーノン！」

先達の挨拶に、大地は一瞬とまどった。

…えつ、何？

坂口を含めた参拝者からは、同じように、「ボーナン・マテーノン！」と発声する人たちがいたが、大地は頭を下げるのが精一杯だった。

先達が退殿し、参拝者が各自ご神前に一拝し、周囲の人々が互いに挨拶し始めた。

「おはようございます」

大地も、同じように挨拶した。

「修行者の皆さまには、神苑巡拝に向かいます」

そう言つて坂口が立ち上がった。すぐ後に続こうと思った大地だったが、少々足がしびれていた。

「イタタ！」

大地が小声で言つた。

「あつ、無理しないで。しばらく足を伸ばしてからゆっくり立っていいからね」
坂口がやさしく言つた。

「はい、すみません」

大地は照れ笑いになった。

万祥殿前に出た大地たちは、坂口の案内で巡拝コースに向かった。夏の神苑では、もう蝉せみの聲が響いていた。それでも、今年は例年に比べると何だか蝉の数が少ないような気がする、と坂口が話していた。大地は坂口に並んで歩きながら質問した。

「坂口さん、さっきのあいさつは、何語ですか？」

「あつ、『ボーン・マターノン』のこと？」

「はい、そうです」

「あれは、世界共通語のエスペラントで、『おはようございます』ということだよ」

「やっぱりエスペラントでしたか。以前、母に聞いたことがあったんで…」

「エスペラントに関してだと、みろく会館の横に、エスペラント碑があつてね。あそこには三つの言葉が刻んであるんだ。『Unu Dio Unu Mondo Unu Interlingvo』、一つの神、一つの世界、一つの国際共通語』という大本の精神が表されていてね、今から半世紀前の昭和三十八年に、大本がエスペラントを採用して四十周年を記念して建てられたんだよ。ちなみに、夕拝の後には、『こんばんは』の意味の『ボーン・ヴェスパーロン』ってあいさつがあるからね」

「そうですか、分かりました。『ボーン・ヴェスパーロン』ですね」

大地が念を押した。

巡拝コースにさしかかった時、坂口が歩きながら修行者に説明を加えた。

「今からの巡拝コースの説明は、今日の夕方に『神苑案内』があつて、その時に講師からそれぞれの場所で説明がありますので、今はほかの参拝者の皆さんと一緒に、順

にお参りして巡ります。よろしく願います」

坂口の説明を聞き終わると、大地は歩きながら深呼吸をした。何とも清々しい神苑の朝の空気に、体が清められていくような思いだった。

至聖所「月宮宝座」の階段下で、各自礼拝し、「大安石」に手をあててから体をさすり、朝陽館の門前では立ち止まって一礼した。そして、「月の輪台」、「宣霊社」で、白衣青袴の先達のもと、天津祝詞で礼拝を行い、中央参道の真奈井通りに出た。

威風堂々とした大本資料館を右手に見ながら歩き、神教殿南側から大本会館の二階に入って食堂へと向かった。

大地は食堂入り口で手を洗って、ポケットから朝食券を取り出し、トレイと箸を持ち、おかずプレートに乗せてテーブルに向かった。

坂口の誘導でトレイを置き、ご飯をよそい味噌汁をつけ、あらためて湯呑みにお茶を入れて席に着いた。大地の前に坂口が座り、手を合わせた。大地も坂口に合わせて手を合わせ、目の前に置かれている二代教主さまの『三首のお歌』に目をやった。

以前、祖父・松太郎の家で、この『三首のお歌』について聞いたことを思い出し、小声で拝誦した。

「いただきます」

大地は、ご飯を一口食べ、味噌汁をすすった。

「あゝ、おいしいなあ」

素直にそう思った。

「そうかい、きつと雨宮君の魂も喜んでいるんだろうね」

「そうなんですかね」

大地は笑顔になった。

「坂口さん、一つ質問してもいいですか？」

「いいよ。答えられるか、分からないけどね」

坂口が冗談^{ぼく}よく言った。

「朝拝と巡拝で奏^あげる『天津祝詞』のことですが、どうして朝拝のときには先達の人だけが奏上するんですか？」

大地が訊^きいた。

のりと奏上の心得

「ほ、それが気になったのかい？」

坂口が返した。

「細かいことが気になるのが、私の悪い癖で…」

「ん？ どこかで聞いたセリフだね」

「わかりますう？」

「私も好きな番組だからね」

「そうなんですか」

二人はお互いに笑いながら言った。

「それはともかく、実は私も以前、雨宮君と同じ疑問を持ったことがあってね」

「そうなんですか？」

「で、先輩に訊いたことがあるんだよ、どうして先達だけで『天津祝詞』あまつのりとを奏上するんですか？ ってね」

「同じですね。で、どうしてですか？」

大地がもう一度訊いた。

「聖師さま時代を知っている先輩の話なんだけど、昔の一時期、先達に合わせて全員で『天津祝詞』を奏上していたことがあったそうだよ。でも、なかなか声やリズムがそろわずバラバラになっていることがあったんだって。聖師さまが先達されているときも同じようなことがあって、それで聖師さまが怒られて、『気が散る。わしが一人で奏^あげる』とおっしゃったそうだよ。それから、朝夕拝では、先達だけで『天津祝詞』を奏上するようになったということなんだ」

「そんなことがあったんですか？」

大地が驚いた表情で言った。

「今では、朝夕拝や月次祭、大祭などでの祝詞奏上の仕方は整えられているけど、大本の草創期には、当然だけど、いろんな変遷があったようだね。そうそう、今は普通に手を合わせてお参りするけど、昔は、膝の上に手を置いてのりとを奏上していたこともあったよ」

「へえ、そうなんですか？」

大地は、また驚いた。

『天津祝詞』は、短いのりただけど、天地の運行のリズムを整え、宇宙間の一切をお

祓^{はら}いし清めるための“のりと”で、聖師さまはその“のりと”を集中して奏上できなかったから、お叱りになったんだろうね」

「なるほど」

大地が頷^{うなず}いた。

「確か昭和四十年代の機関誌には、“礼拝時ののりと奏上がバラバラで聞き苦しい”と、当時の祭祀部長が、注意を促す原稿を掲載していたことがあったなあ。その中で、聖師さまがご注意されたお言葉が書いてあったね」

「そうなんですか」

「正確には覚えてないけど、“のりと奏上は、何百何千の人々が一緒に礼拝しても、その声の一つになって、清らかな小川の流れに玉をころがすように、朗々と流れたら実にすがすがしいものだ”とね。そして、“自分勝手な音程やリズム、われよしの不統一なのりと奏上だと、かえってその言霊で宇宙のリズムをみだしているようなものだから、そんな礼拝ならば、しないほうがまし、神さまのお邪魔になってしまう”とまでおっしゃっていたそうだよ」

大地は、坂口の話聞きながら、無言で頷いた。坂口は話を続けた。

「これも先輩から聞いた話だけど、〃無我の境地に到達する祈りは、天津祝詞一回の奏上でも、汗が流れ落ちるほどだ〃ということだよ」

「そうなんですか、すごいですね。坂口さんはそういう経験があるんですか？」

「いやいや、私なんかまだまだ修行が足りないから、とてもとても…」

坂口が困った表情で言った。

「仏教でも〃お経は耳で読む〃というそうだよ」

「どういう意味ですか？」

「大勢の人と一緒にお経を読んでいるときには、ほかの人の声を耳で聞いて、自分もそれに合ったような声を出して読むということらしいね」

「なるほど」

「お坊さんは、お経を読むだけに五年間の修行をすると聞いたことがあるなあ」

「五年間も…。じゃあ、僕なんかまだまだですね」

「私もだよ。でも清らかなのりとの声は素晴らしいんだよ。昔、三代教主さまののりとお声に感動して入信した人もあったと、先輩に聞いたことがあるよ」

「そうなんですか。僕も聞いてみたかったなあ」

「雨宮君、今の教主さまのお声も同じだよ」

「あ、そうでした。以前、節分大祭と五月の教主生誕祭と一緒に奏上させていただいたことがあります。確かに、とても清らかで力強かったですね」

「だろう」

坂口と大地は、笑顔で話しながら、食事を進めた。ほかの修行者も側で二人の会話を興味深げに聞いていた。

「雨宮君、あまりゆっくり食事していると時間がなくなっちゃうよ」

「そうですね。最初から講座に遅刻しちゃうとまずいですね」

「まあ、まだ大丈夫だけど、一度部屋に戻って、開講式に間に合うようにね」

「開講式は、八時半からでしたね」

「そう、八時半からです。皆さんもそれまでに、神教殿にお越しください」

坂口が、大地をはじめ、ほかの修行者に向かって促した。

大地は早起きして掃除をしたせいか、普段よりお腹がすき、二膳いただいた。自宅ではめったにしないことであった。

……朝ご飯がおいしいなあ。

そう思った。

その後、各自食事が終わり、それぞれに安生館の部屋へ戻った。大地も少し遅れて手を合わせた。

「ごちそうさまでした」

食器を洗い場へ戻し、東側の出入り口から渡り廊下を通って、安生館の自室へ戻った。時計を見るとすでに八時近くになっていた。

大地は食後の歯磨きをし、身支度を整え、一服してから「修行のしおり」を手に神教殿へ向かった。

開講式十分前、講座室にはすでに数人の受講者がいた。その後も、続けて何人かが入室してきて、始まるころには、おおかた十人くらいになっていた。

講座室正面の床には、開祖さまの全紙の「おふでさき」が掲げられている。最前列は座り机だが、今はほとんどが椅子席になっている。年配や足の不自由な方、そして何よりも正座慣れしていない大地のような若者にとってもありがたいことだ。

午前八時半、開講式が始まった。いよいよ大道場修行のスタートである。大地も少

し緊張気味になった。

まず、平林誠一太道場次長の先達のもと、万祥殿へ向かい、一同で「天津祝詞」を奏上。平林が短いあいさつをした後、「修行のしおり」の二ページから三ページにある「修行を志す人のために」を拝読した。

これは、昭和七年、尊師・出口日出磨先生が当時の修行者に話されたものだという。

せっかく、おこしになったのですから、外では得られないものを得てお帰りにならないと無意味になります。そのつもりで、本気で修行されることを希望します。

それには、理屈を聞いたり、あるいは、肉の眼や耳を通して得ようと思っても、それは大した収穫がないかもしれません。自分の腹の底と神霊の気とが触れ合った感じを受けること、これが宗教的な獲物を得る唯一のものであります。

一口にいえば、ほんとうに生きていることが有り難くなり、周囲が、環境が、感謝をもって受け取れるようになる。それになり切ったら、その人は神さまがわかった人です。いろいろむずかしい理屈を知ったり、理論をこねまわしたところで、それは、一つの遊戯に過ぎません。

この有り難くなり切る^ゞということは、どうしたらできるか。いろいろな方法や、言い方はありましようが、一口に言えば（真剣になる）に尽きていると思います。（後略）

平林が読む尊師さまのお言葉がずつしりと響いてきて、大地は一段と気持ちが引き締まるのを感じていた。

……そうだ、真剣にならないとな！

大地はそう思い、気持ちを新たにした。

平林が退席すると、坂口から一日のスケジュールの案内があつた。大地たち修行者は、「修行のしおり」の一ページにある日程表と日課表を目で追ひ、これから始まる五日間に思いを馳^はせた。

その後、昨夜「修行の心得」を受講していない人のために、再度簡単に、お礼拝と鎮魂の仕方の説明が行われた。また、講座室入り口の南側廊下に設けてある湯茶スペースや大本の機関誌、書籍等の案内があつた。その一角には、簡易的な補聴器も備えてあり、必要な人は借りることができるという。

……いろいろな細かい心配りがしてあるんだなあ。

大地は感心しながら坂口の案内を聞いていた。

大地はあらためて「修行のしおり」をめくった。その表紙裏には、「大本教法」が記されている。十二章からなるこの教法は、「大本の憲法」のようなものだと言っていた。

亀岡での講座は、この「大本教法」に則^{のど}つて、九つの講座で構成されている。順に、

「大本の出現」

「救世の神業」

「歴代教主さまのご神業」

「神と人」

「霊界の实在」

「四大綱領（人類生活の原理）」

「祝詞の意味」

「四大主義（大道実践の原理）」

「現代の大本」

である。

午前九時から、第一講が始まった。

まず講師の先達でお礼拝。一同、畳の上に正座して、万祥殿の方を向いた。神教殿での講座の前には、必ず「ご神号奉称」と「惟神かな靈ながら幸たま倍ちませ」での礼拝が行われる。

大本では、物事を為す前後に、神さまへの礼拝を行うのは、当たり前のことだが、……世間一般のセミナーや研修講座とは、違うところだなあ

大地はそう思った。

「大本の出現」から

礼拝が終わると、正面右上に掲げてある歴代教主・教主補さまのお写真に向かって一礼した。

「よろしくお願いいたします」

講師とのあいさつの後、講座の最初には鎮魂を行う。初講前は、二弦の琴・八雲琴による鎮魂である。講師が正面に座り、その下手に八雲琴を奏する着物姿の女性が控えている。

大地は前夜の指導を思い出し、姿勢を正し、作法に則^{のつと}って手を組み、鎮魂の姿勢をとった。

「では、軽く目を閉じてください。二拍手で始め、二拍手で終わります」

大地は静かに目を閉じた。

講師の拍手が響くと、八雲琴の演奏が始まった。大地にとって八雲琴はそう遠い存在ではなかった。大地の母・京子が八雲琴の稽古をしており、子供のころにはその稽古場についていったこともあった。時に京子が自宅で弾いていることもあったので、聞き覚えのある音でもあった。

……でも、こんなに心地良い音だったかなあ？

そう思いながら、何となく気持ちが落ち着いてくるのを感じていた。

十分ほどで八雲琴の演奏が終わり、少しの間静寂の時間が流れた。八雲の調べの余韻が残り、さらに穏やかな気持ちになった。

講師の二拍手で現実に戻された。

八雲琴奏者が退室し、講師が中央の演台に立った。

「あらためまして、皆さま、おはようございます」

「おはようございます」

「私は、井元次郎と申します。今日はこれから、十一時半まで、『大本の出現』の講座をお取次ぎさせていただきます」

井元講師は、自己紹介の後、「修行のしおり」を元に講座を進めていった。二時間半の講座であったが、途中休憩をはさんで、前半は主に、開祖さまのご帰神を含めた国祖のご隠退と出現についての話であった。

その内容は大地が以前、祖父・松太郎から詳しく聞いていた話（『暁の大地』第一回（第十二回掲載））であったので、井元の話は比較的理解できた。それでも忘れていた

ことや初めて聞いた内容もあった。その中で、特に印象に残ったことがあった。それは、ご神書拝読に關してのことである。

中でも大本の二大教典である『おほもとしんゆ』と『靈界物語』を音読する意義であつた。

「ご神書は默読ではなく、声に出して読むことが大切なのです。その理由はいくつかありますが…」

“魂のご飯”という説明も、なるほどと思つた。さらに次の話が大地の心を引いた。

「国祖の大神さまが、再びこの世にご出現されたことを知らない神々さまが、まだまだ八、九分あるんです。国祖をご隠退に追いやつた神々、また国祖と共に世に落とされた神々の中で、国祖の復権を知らない神々がたくさんいる。そうした神々に、“時節がめぐり、国祖が再現されたのだ”ということを知らせるために、大本の信徒が、全国各地で音読することが大切なのです。ご神書の内容は理解できればそれに越したことはないのですが、内容が分かるうが分かるまいが、とにかく声に出して読むことが重要なんですよ」

井元のこの説明は、大地が考えたこともなかつた話であつた。

講座の後半は、開祖さまのご生涯の話が中心であった。

お生まれになった時代背景からして、激しいものだった。夏場の半年の間、わずかな降雨以外は厳しい日照りが続いたという「天保の大飢饉^{きん}」。東北で三十万人が死に追いやられたという災禍の年にお生まれになった開祖さまのその生い立ちは、考えられないような貧しく苦しい生活環境であった。現代とはあまりにもかけ離れているため、若い大地には、正直想像できない世界でもあった。

開祖さまは十九歳の時、綾部に住む叔母・出口ゆりの養女となりご結婚。夫・政五郎のもとで三男五女の八人の子供を育てられる。政五郎の放蕩^{ほうとう}、看病と死。次から次に押し寄せてくる苦難にあらがうことなく、清貧を貫かれた開祖さま。

……よくこんな人があったものだ。もし、自分なら。

そう考えてみても、実際に触れたことのない時代と状況だけに、大地なりに想像するしかなかった。

そのことは、午後からの講座「救世の神業」でも同じであった。聖師さまのご生涯の話が中心となっている講座であったが、やはり今の大地にとって、想像しがたい出来事の連続だった。ただ、開祖さまのご生涯とは趣を異にし、どこか冒険心を駆り

立て、時に滑稽さも伝わってくるエピソードもありで、興味をそそられた。

……巨人と呼ばれていた人だけあって、聖師さまは桁外れの大人物だったんだなあ。それだけは大地にも分かった。

また、大本の草創期の出来事である「出修の神事」は、興味深いものがあつた。

神さまが『どこそこへ行け』と言われる。開祖さまにとつては、そのほとんどが未知の場所である。しかし、神の命ずるままにいかなる所へも進んでいかれる。「出修の神事」は、そうした過酷な旅と修行の根源に、計り知れない霊的な事象を認めなければ理解できず、国祖とそれに連なる神々の存在を信じていなければ成立しないことである。

大地はもちろん、一連の出修の神事すべてが理解できたわけではなかったが、何かおぼろげに、「すごいことだったんだろうなあ」と思いながら、講師の話に耳を傾けていた。

講座中は時々、初めて聞く用語を難しく感じるものがあつたり、急に睡魔が襲ってくることもあつた。そんな時、松太郎が言っていたことを思い出した。

「大地のご先祖さま方も一緒に受講されるし、大地の守護神さんがしつかり聞いているからな」

松太郎のアドバイスは、大地にしてみたなら半信半疑であったが、自分が大道場修行を受講すると松太郎に話した時、松太郎が大層喜んでくれたことが、大地にとってもまたうれしいことであつた。

……しつかり聴かないとなあ。

そう思う大地だつた。

午前と午後、二講座を受け、午後四時からは「神苑案内」が行われた。受講者はみるく会館のロビーに集合した。案内役は、大迫みゆきという若い女性職員。一同がそろつたところで、万祥殿に向かつてお礼拝をし、大迫の案内で、神苑内を巡つた。

天恩郷は戦国武将・明智光秀の築城に始まる亀山城跡である。大迫の説明だと、近年の歴史ブームで城跡見学のために、天恩郷にやってくる参観者が増えてきているとのこと。大地は、そんな参観者に対してのキャッチフレーズがおもしろいと思った。

「全国でも珍しい、お参りできる城跡」

確かに全国には、小さい神社がある城や城跡は存在するだろうが、万祥殿のような大きな礼拝施設がある城跡はめずらしいことだろう。城跡というスタンスから見ると、

大地は、なるほど穿^{うが}ったコピーだと思った。

神苑案内の途中、大地は天恩郷の至聖所・月宮宝座下の石垣の説明に興味を持った。石垣の成り立ちはこれまで諸説あったようだが、最近、石垣造りの専門家が天恩郷に訪れて視察し、はつきりとした見解を述べた、という説明であった。

古来、日本のほとんどの城郭石垣は、石工集団「穴太衆^{あのを}」の手によるといわれている。しかし、江戸期に一国一城令が敷かれ、明治期以降はコンクリートが主流となったため、穴太衆は激減した。現在その伝統技術を唯一伝えるのが、穴太衆石積工匠十四代目の粟田建設・粟田純司会長とのこと。その粟田会長が実際にこの石垣を視察し、「石垣の半分近くには、安土桃山時代の穴太積みが残っている」と見立てたという。

そう思って目の前の石垣を見上げると、織田信長時代の戦国口マンがよみがえってくるようであった。

夕拝までの約一時間で、苑内の主要な場所を巡るため、少々駆け足での説明であったが、大地にとっては、なかなか楽しい時間だった。

そうこうしているうちに、夕拝の報鼓が聞こえてきた。大迫にうながされ、受講者

は万祥殿へ向かった。

つくばいの前で、大地は今朝、坂口から教えてもらった作法通りに、手と口を清めた。すると後ろにいた男性から、「雨宮君」と声を掛けられた。

「はい」

「今のつくばいの使い方は、正しい使い方だね」

笑顔でそう言われた。

「はい、今朝、教えていただいた通りにしましたので」

「そうなんだね。確かにそれが基本だね。基本をきちんと知っているようだから、あえて応用編を言うのだね…」

「応用編？」

「お水を大切に使うという応用だね」

「はあ？」

大地は首をかしげた。

「この柄杓だと、手と口を清めるのに、一杯のお水でも十分できると思うんだよ」

そう言いながら、その男性は一杯の水をていねいに使い、手と口を清めた。

「あ、なるほど」

大地は合点した。

「実は昔ね、三代さまに教えていただいたことなんだよ。お水に感謝し信仰的に使わせていただく。その心がこうした動作に現れるということだね」

大地は、考えもしないことだった。

お水のご恩

「ありがとうございます」

大地は、その男性に頭を下げた。

「いらぬお世話かとも思ったんだけど、何かの参考になればと思ってね」

「いえ、とんでもないです。実際に三代さまから聞かれたことなんです」

「昔ね、お茶席に数人でお招きいただいたことがあってね。その時に、私たちが露地でつくばいを使っている姿を、三代さまが水屋の方から見ておられたそうなんです。そして入席してから、さっき言ったように、柄杓一杯のお水でつくばいを使うことを教えていただいたんです。三代さまは、お客の中でも、一番親しく物が言いやすい方に向かつてお話しになってね。しかも、『こうしなさい』と強くおっしゃったんじゃないくて、『できるんじゃないですか』というふうに、とても優しくおっしゃいました。私はそれを側で聞かせていただきながら、そうするものなんだなあ、と思ったことだったんです」

「なるほど、間接的にお諭しになったということですね」

「そう。三代さまは、お水に感謝する心を、つくばいの使い方形で形に表すようお示し

くださったんですね。大本では、まず「天地のご恩」を知ることが信仰の基本だからね」

二人は会話をしながら、万祥殿内に入った。男性の名札には、「北海道・丸山誠吉」とあった。

「北海道からいらしてるんですね」

「年に一回は受講してるんですけどね」

「北海道から年に一回ですか。すごいですね」

「修行の後は、私の腹黒も清められるんですね（笑）。まあ、七十も過ぎると、家に帰ってしばらくしたら、またこの腹の中がクロくなるんで、白くするために年に一回は来ないとダメなんですよ。もっとも真っ白にはならなくて、灰色くらいかな。その繰り返しですよ。ハッ、ハッ、ハー」

と、丸山は冗談を言いながら高笑いした。大地は、

……おもしろい人だなあ。

と笑顔になった。

大道場修行初日の夜間は、「歴代教主さまのご神業」という講座である。二時間で、

二代教主さまから四代教主さままでの、四人の教主・教主補さま方のご生涯について受講する。たいへん幅広い内容で、大地は真剣に聴講した。

この講座は、講師も、教主・教主補さま方それぞれの波乱のご生涯を短時間で取り次ぐため、話の組み立てに工夫を要するようだ。また、講師の体験によって、どの方にウエイトがおかれるか違うようだが、この日は二代教主さまのお話の時間が多かった。

大地は、夕拝前に、受講者の丸山から、天地のご恩について聞いていたせいか、特に二代教主さまのエピソードが心に残った。

一つは、三首のお歌についてである。

天の恩土のめぐみに生れたる

菜乃葉一枚むだに捨てまじ

一つぶの米のなかにも三体の

神ぬますことを夢な忘れそ

火のご恩水のおめぐみ土の恩

これが天地の神のみすがた

みろく会館の食堂のテーブル上にも置いてあるこの三首のお歌に、大地が初めて接したのは、綾部の祖父・松太郎の家で食事をした時だった。松太郎からは、「三体の神」についての説明を聞いた記憶があった。

大地は、このお歌は大本本部や、信徒の家だけで拝誦はいしよされているものだと思っていた。ところが、この講座で、別の場所でも日常的に拝誦されていることを知って驚いた。

その場所は、亀岡市内にある亀岡保育園だった。当初、今大地がいる天恩郷の敷地内にあつた亀岡保育園は、二十八年前に現在の場所に移転し、大本の教えに基づいた愛善保育理念のもと、日々子供たちの保育が行われているという。

この園は、もともと二代教主さまのお声掛けにより、農繁期の農家の子供たちを預かる託児所として始められたものだったが、開園六十五年を過ぎた現在、0歳児から五歳児まで、約三百五十人の子供たちが在園する京都府屈指のマンモス園であるということも驚きだった。

大地は、この保育園で昼食の前に、三首のお歌が園児たちによって拝誦されていることを知った。

……何だか、うれしいなあ。

講座中にその話題を聞き、そう思った。

もともと亀岡保育園では、愛善保育を実施するために、ご神前やお茶室が設けてあり、幼児クラスではお茶室体験をはじめ、園の月次祭に参拝したり、月に一回は、万祥殿に参拝して、神さまのお話などを聞く機会があるという。さらに、七年ほど前から、二代さまが繰り返しお示しになった「天地のご恩に感謝する心を園児に伝える目的で、三首のお歌の拝誦が始まったのである。

……小さな子供たちが、そろって三首のお歌を拝誦している姿を想像すると、何だか楽しいなあ。

大地はそう思いながら話を聞いていた。

当初、年長クラスで試験的に取り組まれたことだったが、とても良い試みだということ、しばらくして園全体に広がりをもせた。

亀岡保育園の職員のほとんどは、大本の信徒ではないようだが、この取り組みにはみんなが賛同し、三首のお歌に続いて、「ぼくたち、わたしたちは、すききらいなく、

のこさずたべます」というフレーズも付け加えて拝誦するようになったのだという。

また、保護者からは、「お茶碗ちやわんに残っているご飯粒を見て、お父さん、この中には、三体の神さまがいるんだよ！」と子供に注意されました」という話も伝わってきて、家庭においても良い反響が出てきたのだ。

……三体の神さまのことがそうして伝わっていくなんて、すごいな〜！

大地は感心していた。そして大地が何より驚いたのは、三首のお歌を拝誦するようになってから、目に見えて残飯が少なくなったということだった。

……きつと、愛善保育を提唱された二代さまは、お喜びになっているんだろうなあ。大地は講座を聞きながらそう思った。

二代教主さまは、七歳、今の小学一年生くらいから母である開祖さまの元を離れられ、奉公に出られた。想像すらできない過酷すぎる幼少期を過ごされた二代さまのご生涯。その中で、大地の心に残ったのは、お水のご恩についてのエピソードだった。

昭和十年の第二次大本事件解決後、亀岡の中矢田農園で、聖師さま、二代さまをはじめ、出口家の人々が身を寄せ合って生活していた。孫たちに対しては、いつも優しいおばあちゃんだった二代さま。しかし、ちよつとでもお水を粗末にしているような

ことがあると、たとえ孫であつても容赦なく『お水を大切にせい!』と、厳しいお叱りの言葉が飛んできたという。そして、

『お水をタダやと思うとるやろう。だがな、そのうちに水を買^うて飲む時代が来るんやで!』

と諭されたというのである。しかし孫たちは、「水を買^うて飲むなんて、そんなことがあるかいな」と思っていたという。昭和二十年代当時である。そう思うのは至極当然だった。

講座の中での講師の話である。

「二十年ほど前、アメリカに行った時、水道の水は飲料水として不適だからと、買って飲んだことがありました。その時に、〃日本はどこでも水が飲めるから、ありがたいなあ〃と感じたことでした。しかし皆さん、今どうですか? 水が豊富で、どこへ行つても水道の水が飲めるこの日本でも、多くの日本人が、ペットボトルの水を買^つて飲んでいるじゃありませんか。しかも、自動販売機で買^つたら、五百mlで百円以上するでしょ。そうすると一^しだと、二百円以上ですよ。よく考えたらガソリンの約二倍の値段なんですね。そんなお金を払^つて水を買^つて飲んでいるんですからね。皆さん、どう思います。二代さまがおっしゃった通りの世の中になっているんじゃないや

りませんか？」

……ホントだ。まさに二代さまの予言通りだ。

水とガソリンを対比して考えたことがなかった大地は、この話を聞いて、軽いショックを受けた。『水を買って飲む時代が来るんやで！』という二代さまのお言葉が、大地の心にズッシリと響いた。

大地は、夕拝の前に丸山が、「〃天地のご恩〃を知ることが信仰の基本だから」と言っていたことが、夜間の講座を聞いて、おぼろげながら分かったような気がした。

そして大地は、初日の三講座で歴代の教主・教主補さま方のご生涯やエピソードを聞きながら、そこに流れている一貫した柱の一つに〃天地のご恩に感謝する心〃があることを感じていた。

夜間の講座の後、神教殿の講座室を出た大地は、安生館へ向かう途中、丸山と一緒に歩きながら、感じたことを話した。

「雨宮君は、吸収力があるね。もうそんなことを感じられたんだね」

「いやあ、丸山さんにつくばいの使い方から、〃天地のご恩に感謝する心〃ということ

を教えていただいたからだと思います」

「そうか、お役に立ててよかった」

そう言った丸山は、一呼吸置いて言葉を継いだ。

「でもね、感謝するだけじゃだめなんだよね」

「えっ、どういうことですか？」

大地は不思議そうに尋ねた。

報恩の生活

「感謝というのは、人が『ありがたい』と感じたことに対して、その謝意を表すことだよ」

丸山が言った。

「はい。謝意を表すことです」

大地が確認するように答えた。すると丸山が、大地の顔を覗き込むように言葉を継いだ。

「雨宮君、細かいことを言うようだけど、『感謝』の謝意だよ」

「えっ？」

大地が首をかしげた。

「というのもね、謝意には二つの意味があつて、一つは感謝の気持ち。もう一つは謝罪、お詫びの気持ちという意味があるんだよ」

「えっ、そうなんですか？ まったく反対の意味があるんですね。知らなかったなあ」
大地が驚いたように言った。

「でも、普通は謝意というと、誰もが感謝の気持ちと思うよね。その謝意を言葉で表

すのが感謝だけど、その思いを具体的な形に表す場合もあるよね」

「そうですね、品物や金一封を御礼としてお渡ししたりすることがありますね」

大地が答えた。

「そう。受けた恩が大きければ大きいほど、何か御礼をしないといけない、あるいは、お返しをしたい、御礼をしたい、と思うのが人情だよ。または、今はできないけど、将来その相手に困ったことが起こった場合に、今度は恩返しをしたい、と願うこともあるだろうね」

「そうですね」

「受けた恩に報いること…、それを『謝恩』とか『報恩』と言うんだよ」

「『謝恩』という言葉は時々耳にします。学校などでは、謝恩会なんてありますね。でも、『報恩』という言葉もあるんですね」

大地が確かめるように言った。

「大本では、よく『報恩感謝』という言葉を使うけど、一般的に言うと思返しのことだね。報恩というのは、仏教では、『法要などを営んで仏恩に報じること』だそうだよ。だから、神さまだと、さしずめ『祭典などを執行して、神さまのご恩に報じること』だと思うんだ」

「なるほど。ということは、神さまから頂く『天地のご恩に報いる』ということなんですね」

「雨宮君、その通り！」

丸山はうれしそうに大きな声で言った。

「大本では、『天地のご恩に報いる生活の実践』が大切だと教えられているんだよ……。あつ！」

安生館に向かい、並んで歩きながら話していた二人だったが、部屋の近くまで来た時、丸山が急に口ごもった。

「どうしたんですか？」

「いやね、雨宮君は初めて大道場修行を受けに来たのに、講座の中で聞くかもしれない話を、私が先にべらべらしゃべってしまっちゃいけないと思つてね」

丸山は反省したような表情で言った。

「えー、丸山さん、そこまで言われたんですから、もう少し聞かせてくださいよ」

「いいのかねえ〜？」

丸山は妙にうれしそうに、少し広い額を撫なでながら、「じゃあもう少し」と言いながら、

大地を自分の部屋に案内した。大地をイスに座るよう促しながら、向かい合つて腰掛け、話を続けた。

「つまりは、天地のご恩というものを自覚し、そのご恩に報いるための実践をなおざりにしないということが、信仰生活の基本だということなんだよ。逆に言うと、天地のご恩を忘れてしまった信仰生活は、砂上の楼閣のようなものだということだね」

「例えば、どういうことですか？」

「そうだね、例えばこれは私自身の反省も含めてのことだけど、口では“ありがたい、ありがたい”と言いつつ、神さまに対しては、お願い事ばかりをしたり、時には不平を言っているようなものだね」

「不平ですか？」

大地は首をかしげながら言った。

「三首のお歌があるだろう」

「はい、食事の前に唱える二代さまのあのお歌ですよ」

「食事の前には神妙に手を合わせて、『…菜乃葉一枚むだに捨てまじ』と言いつつ、やれまずいの、やれぬるいのと文句を並べたて、食べ残しをしたり、ご飯粒が茶碗わに

付いたままだったりする人もあるわけだよ」

「あるかもしれませんね」

「それでは、何のために三首のお歌を唱えているのか分からないよね」

「それはそうですね」

「つまり、心言行が一致していないということだね」

「はい、理屈では分かりますが、心と言葉と行いが一致するって、なかなか難しいことですね」

大地は自分自身を納得させるような口調で言った。

「確かにそうですね」

そう言うってから、丸山は思い出したように話を続けた。

「……そう言えば、天地の大恩について、聖師さまのご文章の中で、実話を元に書かれている話があるんだけどね……」

「どんなお話ですか？」

「ずいぶん昔の話で、兵庫県にあったある紡績工場での出来事なんだよ」

そう切り出して、丸山はご教書の中（『月鏡』）で読んだ一節をかみ砕きながら、大地に分かりやすく伝えた。

「ある時、その紡績工場の近くで火災が発生したんだ。工場の倉庫には、原料の綿花がたくさん保管してあったので、従業員の人たちは、万一倉庫に燃え移って綿花が焼けてしまったら大変だと思って、みんなで協力して安全な場所まで運び出していたんだね」

「なるほど、すばやい対応だったわけですね」

「ところがそこへ、会社の幹部役員がやって来て、その状況を見るなり、がんばっている従業員を烈火のごとく叱りつけたんだ」

「えっ、どうしてですか？　むしろほめてあげないといけないことですよね」

「普通はそうだよ。役員の言い分はこうだよ。『この綿花には、多額の保険をかけてあるから、運び出す必要はない！　もし焼けても、その原価に相応するだけの保険金がおとるんだ。運搬すればそれだけの手間と費用がいるんだから、いらぬ世話を焼くな！』とね」

「ひどい奴ですね！」

「まったくその通りだね。この役員は、どのように綿花ができたかという天地の冥加を知らないんだ。汗水垂らして綿花を栽培した農家の人たち、加工した人、工場まで

運送してきた人など、大勢の労力に対する感恩の思いがないんだね。天地の恵みによって生育した綿花なのに、その恩なんかまったく眼中になく、代償の金さえあればそれでいいと思っているんだ。まさに社会の損失を知らない、利己主義の人間ということだ」「ホントそうですね」

「さらに言うと、時代も時代だったから、もし目の前の綿花を焼失したなら、それを原料として作られるはずの服ができなくなる。すると多くの人々が困ることになるでしょ。聖師さまは、こうした行為は、社会の人の幸福を度外視したる悪魔の所為であると断言されているんだ。そして、これに類する人間が多い世の中は、大いに嘆くべきことで、天地の大神を知らない宗教心のない人間は、総じてこうしたものだ、ともおっしゃっているんだね」

「なるほど、そんな人は、報恩ということとは無縁なんでしょうね」

大地は丸山の話聞きながら、うなず頷くように言った。

「まさにそういうことだね。雨宮君、報恩の『報』の字を二つに分けると、『幸』が『及ぶ』と書くでしょ」

「幸が及ぶ？ …あつ、なるほど、ホントですね」

大地は感心して言った。そして、しばらく考えて口を開いた。

「ということは、天地のご恩、神さまのご恩に報いる生活を送ることによって、おのずと神さまのおかげを頂き、幸せにならせていただけるといふことなのですね。すごいですね、丸山さん」

「その通り！ 雨宮君は飲み込みが早いなあ。あとはあくまで実践あるのみだよ。アツ、ハッハッハ」

丸山は高笑いした後、気づいたように腕時計を見た。

「おつ、いかんいかん。またしゃべり過ぎてしまった。明日も早いから、今のうちに風呂へ行って休まないとね」

「そうですね。丸山さん、いろいろと楽しいお話を聞かせていただき、ありがとうございます」

大地は頭を下げ、丸山の部屋を出た。自室に戻って入浴の準備をし、洗心亭でゆったりとお湯に浸かり疲れを癒やした。

一晩ぐっすり休んだ大地は、翌日もすがすがしい朝を迎えた。

神の守護と祈り

大道場修行二日目。

大地は洗面の後、初日と同じようにまず宿泊部屋の清掃を行った。一人部屋なので、掃除をしなくても、誰からも文句は言われない。一瞬「まっ、いいか」と、掃除をさぼろうかとも思ったが、ふと、昨夜の丸山の話の中で聞いた言葉を思い出した。

「私が若かりしころは、北海道から聖地へ参拝することは、時間的にも経済的にも、今より大変だったんだよ。でもね、聖地へ行けるという喜びの方が大きかったね。当時は誰もが、聖地でおかげをいっぱいいたきたくて、参拝者も修行者も、われ先にとお掃除をさせていただいたものなんだよ。朝、ゆつくり寝ていたら、もう掃除する場所がないというくらいだったから、ほかの人より少しでも早く起きて、掃除の場所を取り合ったなあ。特にトイレ掃除は競争だったね。『おかげは取り徳』と言ってね。だから大祭が終わって参拝者が帰った後の聖地は、大祭前よりもきれいになっていったさうだけど、そういうことが当たり前だったんだね。でも最近は残念ながら……」

大地は、「昔の人は偉いよなあ」と思いながら、トイレの便器をブラシで磨いた。

部屋の掃除を済ませ、大地は昨日より五分早く万祥殿へ向かった。

……ちよつと早かったかな？

そう思いながら勇んで殿内に入ると、丸山に先を越されていた。

「おはようございます。遅くなりました」

大地は丸山に頭を下げた。

「おつ、おはようございます。がんばって早く起きたんだね」

「はい、昨夜はありがとうございました」

「いや、こちらこそ。さあ、今日もはりきって！」

「はい。えーつと？」

大地があたりを見回した。

「雨宮君、縁側の拭き掃除をしてもらおうかな。ほら、そのバケツに雑巾が入っているから、それ、使って」

と、丸山が縁側に置いたバケツを指さした。

「はい、分かりました」

大地は雑巾を固く絞り、濡れ縁を拭いた。

……これって、けっこういい運動になるなあ！

そう思いながら時間まで、大地はさわやかな汗を流した。

おなががすいたせいか、朝拝・巡拝が終わり、食堂へ向かう時には、「早く朝ご飯を食べたい！」と、足どりも軽くなった。

眠い目をこすりながらの自宅での朝食と違い、聖地ではご飯もみそ汁もおいしくて、体中の細胞に吸収されていくような感じさえする、と大地は思った。

いったん部屋に戻って少憩後、大地は早めに神教殿に向かった。すると大道場係員の坂口が、講座の準備をしていた。大地に気づいた坂口が大地に声をかけた。

「雨宮君、早いね。じゃあ、掃除機をかけてもらおうかな」

「はい、分かりました」

大地が、そばに置いてあった掃除機を手にとると、ほかの受講者も順次神教殿に入ってきた。受講者らは手分けして、神教殿内外の掃除を行った後、講座に臨んだ。

二日目は、午前中が講座「神と人」。「食作法」の実習をはさみ、午後から「霊界の実在」の講座があり、夕拝までの時間、みろく会館二階の「ギャラリーおほもと」で、お作

品を拝観。そして夜は講座「四大綱領（人類生活の原理）」というスケジュールである。「神と人」は、午前九時から、八雲琴による鎮魂に続いて始まった。

神の実在

天地万物は関連し統一されている。しかも、絶えず動いている。

いかに動き、いかに変化しても、やはり相関連あい連しており、渾然こんぜんとして統一されている。複雑微妙なる統一体が、偶然に出来あがるものではない。これ、絶大なる統一意志がはたらきかけているからである。

この絶大なる意志の所主者しよしゅしやを「神」という。



時計でも、ただちよつと見ておれば、いかにも、それ自身自然に動いているようであるが、よく考えれば、そう動くように人間が造っており、油をさしており、ネジをかけているからである。

天地でも、見かけは、自然に動いているようであり、偶然に関連し、統一されているようであるが、それは表面だけの観であつて、実は一切を、そう仕組み、保護し育てている絶大なる意志があるからである。

意志なしに、複雑微妙なる相関統一世界が渾成こんせいされ、保長されるものではない。

〔信仰覚書〕第七卷

「修行のしおり」はこのご教示から始まり、続いて、

三大学則

靈力体の大原靈

真神の神格

人生の目的

精靈とは

一靈四魂と五情の戒律

と幅広い項目が並び、〃神さまと人との関係〃が示されている。

午後からの「靈界の实在」の話も、講師の体験談を交えての語り口調がおもしろく、大地は講座に引き込まれた。

以前、綾部で祖父・松太郎から、神さまのことや靈界の話を聞いていたこと（「暁の大地」第一回〜第二十四回参照）が幸いし、二つの講座で、大本の教えをより深く理解できたような気がした。

特に午前の「神と人」では、加藤光晴講師が説明した二つのことが心に残った。

その一つは、「大本讃美歌」の一節を引用した「神さまのご守護と祈り」についてだった。

そもそも「大本讃美歌」は、出口王仁三郎聖師の口述による『霊界物語』の第六十巻・六十一巻・六十二巻の三冊から抄出したものであることを、大地は初めて知った。

加藤講師は、「大本讃美歌」の第三章 讃美（短歌）の第二一一の五首を、プロジェクトでスクリーンに映し出した。

大本讃美歌 第二一一

- 一 現世もまた霊界も皇神の
二 何事も神にまかせて身の幸を
三 わが負へる罪の重荷をとりてよと
四 さりながら祈りにまさる宝なし
五 わが神は麻柱まつる魂を

清き御旨にまかしまつらむ
賜へかしとは祈りまつらじ
祈らずとても守らせ給へる
夢なまよひそ祈りの道を
花咲く道にすすませたまふ

加藤は、

「私は、朝拝で斉唱するこの讃美歌が、とても好きなんです」

と前置きをして、説明を続けた。

「一番と二番は、まさに『かん惟神なかつたま靈ち幸倍ませ』の心ですね。この世のことも靈界のことも、すべてを神さまの御心にお任せし、幸せをくださいという個人的なお願いはしませんと宣言している内容です」

……そうか、『かん惟神なかつたま靈ち幸倍ませ』を、この二首の短歌で説明することができるんだなあ！
大地はそう思いながら加藤の話に耳を傾けた。

「とはいえ、人は誰でも、少なからず悩みを持っているものです。まったく悩みがないという人は希まれではないでしょうか。軽重はあるものの、人がかかえる悩みは、自分で招いた苦悩であったり、または、いろいろな因縁から及んでいる場合もあると思います。人はそうした各々が背負っている『罪の重荷』を、はやくスッキリ取ってほしいと願いたくなるものです。苦しければ苦しいほど、つらければつらいほど、神仏にすがる気持ち、祈る心は強くなります。しかし、この讃美歌の三番にあるように、祈る対象である神さまにとって、『人は神の子、神の宮』なのですから、神さまは、人が祈らなくとも常にご守護くださっているのです。これを親子の關係に例えたと、わが子に危難きなんがあれば、親は頼まれなくても自ら手を差し伸べるのと同じようなものでは

ないでしょうか」

……なるほど。

「黙っていても親は子を助けたくなるのですが、やはりわが子が頼ってくれば、親はうれしいものです。これは、人の親である神さまも同じです。そのように人が神さまに向かって真つすぐに願ひ、祈りを捧^{ささ}げることとはとても尊いことで、お歌では、これにまさる“宝”はないと示されています。そのことを示されているのが四番の讃美歌です。そうして、神さまをあなう、つまり神さまを慕い信仰する人の魂を、神さまは“花咲く道”、つまり“みろくの世”に導いてくださるのです。このように、この第一一番の讃美歌には、神さまの偉大なご守護と祈りの尊さ、大切さが詠^{うた}われているのだと思います」

……なんと深いなあ。

「これはある青年信徒から聞いたことなのですが……」

と言つて、加藤は実例を語り出した。

「その青年は仕事をやめて、念願だった小学校の先生をめざし、通信教育で小学校教師の教員免許を取得しました。そして、三年目にしてやっと採用試験に合格し、晴れ

て小学校の先生になれたのです。実家から離れた任地への赴任が決まり、生まれて初めて一人暮らしをすることになりました。実家を出る時のこと、青年はご神前でお礼拝をして、神さまに御礼を申し上げ、この先のご守護をお願いしていました。その時です。自分でも予想していなかった感情がこみ上げてきたそうです。それは、ご守護してください、とお願いすることは誠に畏れ多いことだ。自分は神さまにこれまでずっと、ご守護していただいていたのだ、という感謝の思いでした。と、同時に胸がいつぱいになり、涙があふれてきたというのです。……私はこの話を本人から聞いた時、すぐに今ご紹介した讃美歌を思い出しました。まさにこのお歌の通りではないでしょうか」

大地は、自分と同じような進路を歩み始めた青年の、信仰的な受け取り方に感心させられた。

加藤は続けた。

「聖師さまは、『信仰は神さまとの恋愛である』と示されています。皆さんもしつかり、どっふり、神さまを恋い慕ってください。そうすれば、自然と神さまからのおかげをいただける、私は確信しています」

加藤の淡々とした呼びかけに、大地は自然と頷うなずいていた。

天国は上り易く、地獄は落し難し

そしてもう一つ、大地の心に残った話も、聖師さまのお示しからの内容だった。講師は同じように、聖師さまの書と、その読み下しをスクリーンに映し出した。

主神以一霊四魂造心賦之活物

地主以三元八力造體与之萬有

故守其靈者其體守其体者其靈

有他神非守之也

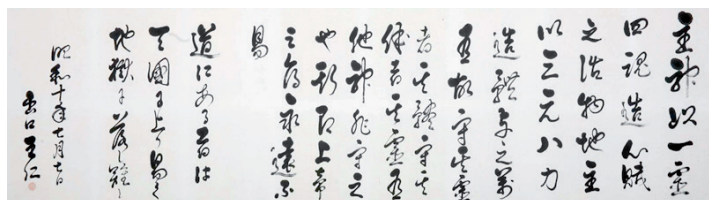
斯即上帝之命永遠不易

道にある者は

天國に上り易く 地獄に落し難し

昭和十年七月七日

出口王仁



「どうです皆さん、素晴らしい書でしょう。これは、天恩郷に参拝された方なら、拝見された方が多いと思います」

……僕は見たことあるかなあ？ パツと読めないし、何だか難しいし…。

大地はそう思ったが、横に座っている丸山を見ると、うれしそうに頷^{うなづ}いている。

……やっぱ丸山さんは知っているんだ。

加藤は講座を続けた。

「このお作品は、天恩郷・朝陽館のご神前、左手の鴨^{かも}居^いの上に掲げられてゐます。ご記憶の方はありますか？」

誘うように右手を挙げながら、加藤がそう尋ねると、一、三人の受講者が頷きながら手を挙げた。大地の予想通り、丸山も手を挙げていた。

「はい、ありがとうございます。まだ拝見されていない方は、ぜひ修行期間中に朝陽館に参拝して拝見なさってください」

そう促して、話を続けた。

「この聖師さまの書は、日付から分かるように、昭和十年七月七日に書かれたものです。第二次大本事件勃発が昭和十年十二月八日ですから、ちょうど事件の五カ月前の七夕の日にご揮毫きごうになっています。実は、この書は、平成十八年に発刊された『書で見る日本人物史事典』（柏書房）で紹介されたことがあります。この事典には、日本の歴史上の人物の中で、特に著名な百二十三人の書が選出されていました。聖師さまのほかには、聖徳太子、空海、源頼朝、千利休、徳川家康、福沢諭吉、坂本龍馬、夏目漱石、芥川龍之介など、そうそうたる人物の書が紹介されています」

……へえ、そんな有名人たちと一緒に紹介されているなんてスゴイな！
大地は驚いた。

「そして、聖師さまの書に関しては、『祈りのこもった粘り強い線と文字』という見出しで、次のように書かれていました」

そう言いながら、加藤は手元のメモを読み上げた。

「この書は、一九三五年の弾圧直前のもので、ねばりのある独特の表情を見せます。それは、たび重なる弾圧にも屈しない意志の力を感じさせますが、丸みをおびた文字は親しみのもてるものです。印の代わりに拇印ぼいんを押した落款らくかん（署名）には、気取りの

ない王仁三郎の素顔が見えます」と、このように紹介されている素晴らしい書なのです」
加藤は身を乗り出すようにして力強く言った。

「さて、どのように読むかというと、こうなります」

と、レーザーポインターで、聖師さまの書をなぞりながら、ゆつくりと読み上げていった。

「主神、一霊四魂を以て、心を造り、之を活物に賦与し、地主、三元八力を以て体を造り、之を万有に与えた。故にその霊を守るものはその体であり、その体を守るものはその霊である。他神があつて之を守るにあらず。即ち上帝の命、永遠不易……というのがここまでです」

と、十二行目を指しながら言った。

「どういう教えかと言いますと、大宇宙を創造された主の大神さまは、一霊四魂をもつて心を造られ、活物に与えられました。また、大地の創造主神は、三元・八力をもつて体を造られ、これを万有に与えられました。ですから、それぞれの霊を守るのはその体であり、それぞれの体を守るのは、その霊なのです。ほかの神があつてそれら

を守るのではないのです。すなわち、この神さまのおぼしめしは永遠に変わることはない……ということです」

……はつきり理解できないけど、なんだか神さまの威厳を感じさせる言葉だなあ。

大地はそう感じながら加藤の話に耳を傾けた。

「これを人間に関して大まかにまとめると、人は大宇宙を創造された主の大神さまから靈魂と肉体をいただいています。ですから靈魂と肉体はそれぞれに守り合っていて、決してほかの神が靈魂と肉体を守るのではないのです。この天命は永遠に変わることはありませんよ。……という、神さまと人との関係を端的に説かれたみ教えです。おわかりいただけますか？」

大地は頷いた。

「そして、最後の三行です。『道にある者は天国に上りやすく、地獄に落とし難し』、……と読めます。世の中にたくさんある宗教の中には、“天国には上り難く、地獄には落ちやすい”と説くところもあるようですが、大本の教えでは反対ですね。神と人の関係を心得た上で、神さまのお道を歩む人は、“天国に上りやすい、本来は誰でも天国へ行けるんですよ、ということですよ”

……そうか、普通の人はみんな天国へ行けるんだ。

大地はそう思った。

「さらに最後がいいですよね。『地獄に落とし難し』です。『地獄に落ち難し』、ではないのですよ。どちらにしても、普通の人は地獄には行きにくいというのですが、私は、このお言葉に、神さまの大きな愛を感じます。地獄には、*“落ちにくい”*のではなく、神さまは、*“落としにくい”*とおっしゃっているんです。このお示しがあることによつて、道に外れていない普通の人は、まず地獄に落ちることはないということです。裏を返せば、よつぽどの悪い行為をしない限りは、めったに地獄に行くことはないという大きな救いの言葉だと思います。皆さん、ありがたいですね。これを聞いて、ホッと安心された方はありませんか？」

加藤は身を乗り出して、受講者に呼びかけるように問い掛けた。

「はい、安心しました！」

と、丸山が手を挙げながら、大きな声で答え、他の受講者の笑いを誘った。講座室の雰囲気が和み、大地も笑顔になった。

雰囲気につられてか、加藤の話が定刻の十一時を五分オーバーした。

講座終了のお礼拝が終わると、担当の坂口が入室し、次の講座の案内を行った。

「皆さま、ご苦勞さまでございました。この後のご案内をします。今日の昼食は、『食作法』の実習の時間になります。あまり時間がないのですが、十一時二十分までに、それぞれに食券をお持ちいただき、皆さまがお泊まりになっている安生館の五階へお越しください。では、ご移動をお願いします」

受講者は、それぞれに講座室を出て安生館へ向かった。

大地も丸山と一緒に神教殿を出た。

「雨宮君、講座は理解できたかい？」

丸山が訊いた。

「難しいところもありましたけど、何とかついていけたかなと思います」

「どのお話が良かったかい？」

「そうですね。あの『大本讃美歌』第一一からのお話と、最後の方であった朝陽館の聖師さまの書を教えていただいたことですね」

「なるほど、そうかい」

丸山が頷きながら言った。

「そうだ、天恩郷にいる間に、一度一緒に朝陽館にお参りに行こうかねえ？」

「ぜひお願いします」

「じゃあ、そうしよう」

二人はいったん安生館の自室に戻り、あらためて五階へ向かった。大地は二階からエレベーターに乗った。五階で扉が開くと、坂口が待ち構えていた。

大地は坂口に食券を渡した。

「これを持って入席してください。中にガーゼが入っていて、お席で最後に使いますからね」

と、坂口から草色の小さな袋のようなものを渡された。

「どうぞ、あちらへ」

という坂口の言葉に、廊下の奥に進むと、和服姿の男性が笑顔で立っていた。

食作法

「こんにちは。こちらで履き物を脱いで、中へお入りください」

大地は、講師に促されるままに待合に入った。すでに数人の受講生が、イスに腰掛けて待っていた。

「すみません、遅くなりました」

大地がそう言っているところへ、丸山が入ってきた。

「お待たせいたしました。おや、私が最後みたいです」

丸山が笑いながら言った。

「大丈夫ですよ、ちょうど予定の時間です」

講師は笑顔で答え、あらためて受講者の方へ向き直ってあいさつした。

「皆さま、こんにちは」

「こんにちは」

「これからの時間をご一緒させていただきます、橋口伸二と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

「お願いいたします」

全員が答えた。橋口は、簡単な自己紹介をした後、食作法の説明を行った。

「今日の昼食は、食作法の実習になります。皆さまとご一緒に、一汁一菜の食事を、天地のご恩に感謝しながら、作法に従っておいしくいただきたいと思います。

食作法でお出しする料理の食材は、本部の神饌田しんせんでんで作ったお米や、神苑の教主さまの畑で採れた野菜など、できるだけ自然のものを使っております。食堂とは別メニューで、食の原点となるようなお料理を、この奥の厨房で特別に作っていただいております。調味料も、本部の前にあります自然食品の店“ドーモ”で扱っている安心な製品を使用しております。それから…」

と言いながら、橋口の前に置いてある塗りの器などについて説明した。

食作法で使う器はすべて本漆塗りで、開教百二十年以降に食作法が再スタートした時、教主さまから五十客お下げいただいたものだという。

『修行者の皆さまには、本物のお料理を本物の器で味わっていただきたい』という教主さまの願いがあったと承っています。ありがたいことです」

飯椀わん、汁椀むじやうけ、向付むきつけ、利休箸…。四角いお膳おしき（盆）のことを折敷おしきということなど、器

などの呼び名を、大地は初めて耳にした。

ただ、利休箸のことは、以前、祖父・松太郎から聞いていたので、ちよつとうれしくなった。

……確かおじいちゃんが「しんじんきやう神人共食」の意味があるって言ってたなあ。(第27回 神人共食)

大地は松太郎の話を思い出していた。

「お席の準備が整いましたので、どうぞご入席ください」

坂口が入り口の外に座って手をつき、案内した。

「ありがとうございます」

橋口が坂口の方へ向き答礼した。

「では、これから本席へ入席させていただきますが、お荷物はここに置いていただいて、先ほどお配りした布巾だけを持ってご入席ください。それからできれば、腕時計や指輪などの貴金属を外してください。これは、塗りの器や陶器を傷つけないようにするための心得であり、普段身に付けている物を外すことで、心を改めるという意味もあります」

橋口が丁寧に説明した。

「いやだ、外れないわ」

一人の婦人が指輪を外そうとしているが、なかなか取れないようである。

「無理をしないようにしてくださいね」

「ちよつと太つちやつたかしら」

「外した指輪は小さくないようにね。私の家内は、お茶室の水屋で二回もなくして、それ以来指輪をしなくなつたんですよ」

丸山がそう言うのと笑いが起こり、少し緊張した雰囲気が和んだ。

隣室が食作法の本席である。手がかりの開いた障子を開け、にじつて順次入席した。入席の仕方と床の間の拝見は、茶室への入席の仕方に準じての指導だった。

受講者の中には、茶道の心得のある婦人もいて、初心者をサポートしていた。

一同が席に着いたところを見計らって、お膳が運ばれてきた。まず橋口が実際に受け取り、動作に合わせて受け方を説明した。

全員の前にお膳が並び、坂口が入り口に座り、あいさつをした。

「どうぞ、お箸をお取り上げください」

「頂戴いたします」

坂口のあいさつに橋口が応え、一礼した。大地たちもお辞儀をした。

続いて、あらかじめ机の上に置かれていた「三首のお歌」のしおりを手に取り、橋口の先達に合わせて拝誦^{はいしゅう}した。

「しおりを元に戻して、手を合わせてください。では…、いただきます」

「いただきます」

全員で二拍手した。

「この三首のお歌のしおりは、今日の記念にお持ち帰りください。では、最初に、器と箸の扱いについてご説明します」

一通りの説明を聞き、大地が戸惑ったのは、その扱いの順番だった。

ご飯をいただくとき、右利きの場合、最初に両手で飯碗を取り、左掌^{てのひら}にのせる。碗を持ったまま右手で箸を上から持ち、左手の人差し指と中指の先であしらって、通常使うように持ち替える、という動作だった。次に汁碗に移る場合は、逆の順番となり、まず箸をあしらって右手で置き、飯碗を両手で折敷に戻してから汁碗を両手で持ち、同じように箸をあしらって汁をいただく。

箸に関しては、お膳を受け取った時には、折敷の右縁に掛けてあるが、一度使ったら、置くときには折敷の左縁に掛けておく。

「ちょうど左縁が箸置き of 代わりになります。椀と箸の扱いは、初めての方にはちょっと面倒くさいかもしれませんが、このリズムでいただくのは、胃に優しく体にも良いそうですよ。聞くところによるとダイエットにも良いとか（笑）。とにかく、せつかくの手作り料理ですから、おいしくいただいでください」

大地は教わったように実際にやってみるが、普段の食事の仕方と違うため、何だかぎこちなくもたついてしまう。

「くれぐれも、扱いが気になって何を食べたか分からなかった、ということにならないようにしてくださいね」

…ですよね。

そう思いながら大地は箸を進めた。

橋口が順次献立を説明してくれたが、ご飯も玄米に五穀を混ぜて圧力鍋で食べやすく炊いてあって、とてもおいしい。汁の味も上品で、向付に盛られたおかずはどれも良い味である。

お代わり用の飯器や取り回し鉢も出され、作り手の「まごころ」、おもてなしの心が伝わってきた。

「皆さん、なぜ、食事の作法が必要だと思いますか？」

そう聞かれ、大地はとっさに答えが見つからなかった。

「一つは、気持ち良くおいしく食べるためです。所作を整えることで、味わいながらゆつくりいただけ、そうすると心にも余裕が生まれて、^{おの}自ずとおいしくいただけるものだと思います」

…なるほどな。

「もう一つは、相手や周りの人に不快感を与えないためです」

そう言つて橋口は、レストランや居酒屋での不作法な人を例にあげて説明した。それを聞きながら、ふと向かいに座っているお茶の心得のある婦人を見ると、その所作が違和感なく自然に流れ、品があつて美しい。見ていて気持ちがよかった。

…こういうことなんだろうな。

大地は妙に納得した。そして時々隣の人に「お先に頂戴します」と声を掛けることは、日本の良き慣わしだと思つた。

食事をいただきながら、橋口は大本が正食を提唱していることを説明した。

「本来『たべもの』は『賜^{たま}べもの』の意味があり、神さまからの『賜^{たま}わり物』『いただき物』ということなのです。聖師さまのご著書には、『清潔主義の食生活』をつづめて『清食』とも書かれていて、『正食』と同じ意味に使われているところがあります。『正食』の基本を要約すると四つの条件になります。それは、①季節食、②国土食、③全部食、そして食品の加工・調理に注意して、④できるだけ自然のままに食べることです。

季節食ということで古来日本では、『春は苦み、夏は酢の物、秋は辛味、冬は油もの』と教えられてきました。国土食とはその土地にできた季節のものをいただくということです。つまり正食（清食）とは、季節ごとにその土地で採れたものを無駄なく、できるだけ自然のままにいただくことですね」

橋口は穏やかな口調で丁寧話し、さらに聖師さまの以下のお示しをもとに、内容をかみ砕いて説明した。

『わたしは柿が大層好きである。果物の中^{うち}では柿が一番美味^{おい}しい。柿はまた毒消しの

働きをするものであって、夏の暑い時から、秋にかけていろんな悪い食物を食べてた毒が秋になって出てくるのを、柿によって消してしまうようにできているのだ。単に柿のみならず、神様は季節々に人体に必要なものを出して下さる。春は人間の体が柔らかになつてくるから、筍たけのこのような石灰分に富んだものを食べさすようにちゃんと用意してあるのだ。ゆえに人はその季節相応のものを食べておれば健康を保つことが出来るようになっていゝるものである。今のように夏出る西瓜すいかを春ごろ食べてみたり、春出るべき筍を冬食べて珍味だと喜んでゐるのは間違つてゐる。それだから人間がだんだん弱くなつてくるのである。すべてが間違いだらけである』

（『水鏡』「柿は毒消し」）

「つい忘れがちですが、食べ物をいただくときには、神さまのみ心、天地のご恩に感謝しながらいただけたらいいですね」

橋口が受講者の顔を見回しながら言った。

…深いなあゝ。

大地は心の中で頷うなずいた。

季節食・国土食

「どれもおいしいですね」

受講者の一人の女性がしみじみと言った。

「おいしいですよね」

隣の男性が相槌を打った。

「この賀茂ナスの味噌田楽は、絶品ですね！」

丸山が言った。

「そうですね。ナスは今が旬ですから、まさに季節食ですね。賀茂ナスは、京都の上賀茂地域で古くから作られてきた丸ナスの一種で、“京の伝統野菜”の一つに認定されています。固くしまった肉質で甘みがあつておいしいですよね」

橋口が詳しく説明した。

「ほんとにおいしいですね」

大地も思わず声を出した。

“京の伝統野菜”は、“ブランド京野菜”とも言いますが、エビイモや九条ネギ、聖護院カブやミズナ、鹿ヶ谷カボチャなど十数種類が認証されているそうです。実は、

京都の冬の定番漬物・千枚漬けに使う聖護院カブや、この賀茂ナスも、ここ亀岡市内で多く栽培されているんですよ。このナスは本部の農事で作られたものです」

「そうなんですか」

丸山が言った。

「私も家庭菜園のまねごとをしていて、賀茂ナスも育てているんです。輪切りにして、フライパンで焼いて、ただポン酢と鰹節かつおをかけてシンプルにいただくんですが、これが絶品なんです。賀茂ナスに限らず、無農薬栽培で作った採れたての野菜は、どれもおいしいですね。これこそが“季節食”であり“国土食”だなあ、って思います。お土とお水と太陽の恵みがギュッとつまっている気がして、とてもありがたい気持ちになるんです」

橋口は今朝も出勤前に畑に出て、夏野菜の世話や草取りをしたことなどを話しながら、天地のご恩ということを体験的に語った。

「“本物”をその季節にいただくということ…、それこそぜいたくな“美食”ですね」

丸山が言った。

「そうですね。昨年でしたか、有名ホテルなどの食材偽装が相次いで発覚するという

問題が報道されていましたね。あれは美食を追求したツケとも言えますね」

「そうそう。日本人は、流行やうわさに弱くて、有名店や名人の料理を奉る風潮がありますなあ」

「確かに、自分の評価ではなく、有名な産地の珍しい食材が良いとして、値段や表示という評価で選ばれた料理をおいしいと思ひ込むクセがあると思います。それを見事に裏切ったのが、食材偽装問題でしたね。でもあの事件は、だます側はもちろん悪いのですが、だまされる方にもつけ込まれる原因はあつたんじゃないでしょうか？」

橋口が問いかけた。

「そうですね、それこそ表示だけを鵜呑みにし、普段身の回りにある本物の食材を食べていなかったから、自分の舌で判断することができなかったわけですね」

「そうですね。普段から本物をいただいていると、偽物を食べた時には何となく分かります。基本的には、食べ物に対する敬けんな気持ち…、神さまからの「賜^{たま}べもの」という謙虚な思いが欠けていることが根本の問題だと思っています」

…なるほどなあ。

大地は、橋口と丸山の会話を聞きながら頷^{うなず}いていた。

「本物の野菜は、本来多くのものに甘みがあるんですね」

橋口はさらに説明を続けた。

「でも、子供はピーマンやニンジンなどの苦みやえぐみを嫌いますね」

一人の婦人が言った。

「それは、小さい時に最初に食べたものが苦かったからだと思います。おそらくそうした野菜は、あまり新鮮でなく化学肥料で育てたものだたからではないでしょうか。私の子供が、たしか二歳くらいだったころだと思いますが、いただいた酵素農法の無農薬で作られたシシトウを食べさせたことがありました。シンプルに焼いて醤油しょうゆをかけただけでしたが、びっくりするほどパクパク食べていました。とても甘かったんですね。ニンジンもそうでした。子供は味に敏感ですから、やはり最初にその野菜本来の味を持ったものを食べさせることが大切だと思いました。私はこのことは、赤ちゃんの離乳食から気を使った方が良く思っております。やはり最初が肝心ですね」

橋口は、自分の子育てで体験したことを語って説明した。

「本物と言えば、亀岡の鮎あゆも有名ですね」

丸山が訊きいた。

「はい。さすがに食作法ではお出しできませんが、この時期、鮎と言えば、亀岡市を流れる保津川の天然鮎が昔は一級品だったんですね。もちろん今でも高級品ですが、かつては“日本一の鮎”と称され、皇室にも献上される“献上鮎”として広く知られていたそうです。美食家としても知られ、二代さまと親交があった、あの北大路魯山人も、保津川の鮎を称賛しています」

この橋口の説明に大地が反応した。

「そういえばその魯山人を登場人物のモデルの一人にした人気マンガの『美味しんぼ』でも、保津川の鮎が紹介されていたと思います（参考…8巻第4話「鮎のふるさと」）。主人公の山岡が保津川まで来て、その質を確認していたんじゃないか」と……」

「そうでしたか。確か魯山人は、自身の著書の中で、鮎の味は激しい流れの溪流で育った逸物を、その土地でなるべく早く食べないとまくな。だから東京で本当にうまい鮎を食べることはできない、とまで言い切っていたと思います。これも“国土食”ということだと思います」

「その通りでしょうなあ」

「食は人の生き方の根本にある文化ですから、その作法もまた日本人の大切な文化です。それを身に付けることによって生活に潤いが生まれ、ひいては日本人としての誇

りにもつながるのではないでしょうか」

橋口の説明に、大地は頷きながら、自分が今まで食べることに無頓着だったことを反省していた。

席中には日常とは違う時間が流れ、ほんわかとした雰囲気包まれていた。

「皆さん、ご飯は全部食べ切らずに、一口だけ残しておいてください。それから今、香の物（漬物類）のお鉢が回っていますが、沢庵は一切れ残しておいてください。最後に使いますので…」

湯桶が運ばれ、橋口の説明で、それぞれの器にお湯（お松茶）を注いだ。

「このお湯を使い、順に器を清めてください。飯碗は、お米のぬめりを沢庵で落とすようにして清めてください。ただし、塗りにキズがつかないよう、軽くぬぐうようにしてくださいね。そして、最後に湯漬けにさせていただきます」

…なるほど、そのために沢庵を残しておくのか。

大地は納得した。

橋口は沢庵についても説明した。

「徳川三代将軍の家光時代、大徳寺の沢庵和尚が考案し、家光が絶賛した漬物という

ことから全国に広がり、沢庵と呼ばれるようになったという説があります。通常お客さまに出す時には二切れ出します。これは一切れは〃人を切る〃、三切れなら〃身を切る〃ということですのでその数を避けて、二切れになったということです。いかにも武士の時代の縁起ですね」

「知らなかったなあ、おもしろい話ですね」

丸山が感心したように言った。

「お湯をいただかれましたら、最初にお渡ししました布巾で器を拭き清めてください。ゴシゴシ拭くのではなく、塗りにキズをつけないよう押さえ拭き程度でお願いします」最後に箸の先を拭き、最初のように折敷おしきの右端に掛け、飯椀と汁椀の蓋を同時に閉め、そろって「ごちそうさまでした」と発声し、二拍手した。

「では、お膳を下げていただく合図を水屋に送ります。箸を折敷の上に落とします。これには三つの方法がありますが、今日はそろってお箸の右端を指先で折敷の方へ突いてください」

全員が箸の右に指を当てた。

「はい、ではごいっしょに、どうぞ」

折敷に箸の落ちる音が響いた。同時に、坂口ら係員が障子を開けて席中へ入ってきた。一人ずつお膳を手渡しし、全員の膳が下げられた。

大地は足がしびれていて「これで終わりか」と思っていると、続いて薄茶が振る舞われた。聞くとお菓子も本部職員の手作りの饅頭^{まんじゅう}で、ほどよい大きさと温めてあり、口に入れると黒糖の風味がした。心遣いが嬉^{うれ}しかった。

お茶の頂き方も教えてもらい、一口すすると、ホッとした気分になった。

…なんと至れり尽くせりだなあ。

大地は、足の痛みもさることながら、心からありがたい気持ちになった。

薄茶を頂き終わり、茶碗が下げられた。受講者は床の間のお軸と花を拝見し、順次退席し、元の待合の席に戻った。

「みなさま、ありがとうございました。いかがでしたでしょうか？」

「おいしかったですね」

「幸せな気分になりました」

「器の扱いや忌み箸のことなど、知らないことが多くて、とても勉強になりました」

受講生は口々に感想を語った。

「では、今日体験なさったことを、この場限りで終わらせないで、せめて残りの修行の間、食堂で意識をしながら食事を召し上がっていただけたらと思います。できればご自宅に帰られてからも思い出していただき、少し気を付けて実践していただけたらと思います。もし、日常箸置きを使っておられないようでしたら、まずは普段から箸置きを使い、箸の扱いだけでも習慣付けていただけたらと思います」

橋口が提案した。

……よし、帰ってからはまず箸置きを使って箸の扱いから実践しよう。

そう秘かに心に誓う大地であった。

靈界の實在

「食作法」が終わり、大地はいったん部屋に戻った。イスに腰を下ろし一服して時間を確認すると、午後の講座開始まで十五分を切っていた。

「そろそろ行かないとなあ」

大地は足早に神教殿へ向かった。

二日目午後の講座は、「靈界の實在」である。

午後一時になり、坂口が講座の始まりを告げ、講師の池本明夫を紹介した。お礼拝に続き、池本講師の宣伝歌^{はいしんか}拝誦^{はいしやう}で、鎮魂を行った。

大地も手を組み、鎮魂の姿勢をとった。背筋を伸ばして肩の力を抜き、軽く目を閉じた。池本の二拍手の音が講座室に響いた。

「大本宣伝歌。死生観」

池本は穏やかな口調で音吐朗々と「死生観」を拝誦した。宣伝歌のさわやかな言霊を聞きながら、大地は次第に心地良さをおぼえていた。

……

一夜の宿を立ち出でて

またもや旅をなす時は

また人間と生まれ来て

神の働きなす時ぞ

生まれて一日はたらいて

死んで一夜をまた休む

死ぬといふのは人の世の

果にはあらず生魂の

重荷おろして休む時

神の御前に遊ぶとき

栄えの花の開くとき

歓喜充てる時ぞかし

またもや神の命令に

神世の宿を立ち出でて

ふたたび人生の旅をする

旅は憂いもの辛いもの

辛い中にもまた一つ

都にいたる限りなき

歡喜の花は咲き匂ふ

神の御子たる人の身は

生まれて死んで また生まれ

死んで生まれて また生まれ

死んで生まれて また生まれ

どこどこまでも限りなく

堅磐ときはに栄えゆく

……

拝誦が終わり、しばらくの間、静寂な時間が流れた。窓外のセミの声がかすかに聞こえ、妙に心地良かった。次の瞬間、二拍手の音が響いた。

「はい、鎮魂を終わります」

そう言って池本は立ち上がり、演台に移動した。大地も、正座から直って、イスに

腰を掛けた。

池本は自己紹介の後、早速に講座に入り、最初に大本の「霊界観」「宇宙観」について話を進めた。

「一般的に『霊界』というと、多くの人は、死後の世界、『あの世』を連想されると思いますが、大本ではそれ以外に、あと二つの受け取り方があります。

一つは、現実世界、この世の中にある『霊界』です。この現界には、目に見える物質界のほかに、目には見えませんが、精神的な世界がありますね。もちろん、皆さんお一人お一人もお持ちです。そのような精神界をさして『霊界』ということがあります。

そしてもう一つは、全大宇宙すべてを総称しての『霊界』です。地球の外の宇宙や銀河系、また科学的に人類が認知している地球外という概念での宇宙ではありません。どこまでも果てしなく、また極まりもなく、至大無外しだいむがいであり、至小無内ししょうむない、人の知識のおよばない全大宇宙を総称しての時間・空間のこと。別の言葉で表現すると無限の霊妙な世界ということで、『一大霊妙世界』です。これをつづめて『霊界』という場合があります。

この三様の意味での霊界が、大本の霊界観であり、宇宙観であります」

……死後の世界だけが「霊界」だと思っていたけど、そんな広い受け取り方があるんだなあ。

大地は以前、祖父・松太郎から聞いた「あの世」や「みたままつり」の話（『暁の大地』第十三～二十四回）を思い出しながら、自分が思ってもいなかった考え方があることに驚いていた。

池本の話は、「修行のしおり」に添って進められたが、時々脱線して、話が横道にそれてしまうことがあった。だが、その脱線話がおもしろく、受講者の笑いを誘った。

臨死体験の話も興味深かった。それは、奈良県に住む六十代の女性の体験談だった。「A子さんはある日、勤め先で突然胸が苦しくなったそうです。それまでに体験したことのないような痛みで、胸を押さえながら意識が遠のき、A子さんはその場に倒れてしまいました。同僚らが駆け寄り、すぐに救急車を手配、病院に搬送されました。ところがその間、A子さんは倒れた自分の姿を、少し高い位置から見ていたそうです。どうして自分はあるそこに倒れているんだろう」と思ったそうです。そして、眼下にある肉体と今意識のある自分の体―これを霊体と言いますが―、その肉体と霊体は向かい合う形になっていて、肉体の両手両足の二十本の指と、霊体の両手両足の二十本の

指先とが、それぞれつながっているという不思議な感覚だったそうです。それなのに、彼女は肉体から五、六センチほど離れた高い位置から、倒れた自分を見ているのでした」

……なんと不思議な状態だなあ。

「そしてその時は、とにかく最高の気分だったそうです。体がとても軽くて、まるで真綿に包まれたようにフワフワと浮いた感じで、A子さん自身がそれまでに経験したことのないくらい気持ちのよい法悦状態だったということです。同時に、えも言われぬ『幸福観』に包まれたそうです。

『あゝ、気持ちいいなあ、ずっとこのままでいたいなあ』、そう思った瞬間、霊体は、スーッと自分の肉体に吸い込まれるように戻っていったそうです。と同時に、全身に痛みが走って意識が戻り、病室のベッドの上にいることに気が付いたそうです」

……そんなことがあるんだなあ。

「A子さんは、『自分の信仰を、神さまが試されたのだと思います。私はこの体験を通じて、魂の实在、霊界の实在を心の底から信じることができるようになり、それが確信に変わりました。大きなおかげをいただき、誰が何と言おうと、魂はある、霊界は存在します』と、喜々として語っておられました。

A子さんの場合はおそらく、肉体と霊体の手足がつながっていたために、あの世へ

旅立つことなく戻って来られたのでしょうかね。もし、離れてしまっていたら、今頃は霊界に行っておられたかもしれません。A子さんは救急搬送後、一カ月ほどで退院され、今は元気にお過ごしで、所属機関の月次祭にも参拝し、いろいろとご奉仕されています」大地は、池本が語ったA子さんの臨死体験談を聞き、魂の実在をより納得できたように思った。

この講座の中では、大地の興味をそそる話がほかにもいくつかあった。

その一つは「死後、自分より先に亡くなった人とあの世で出会うことができるかどうか」という話題だった。

「私は家内とは来世でもいっしょになりたいと思いますが、天国で夫婦になれるでしょうか？」という質問を受けることがあります。仲の良いご夫妻なのですね。もつとも、奥さまの気持ちは聞いていませんでしたが…（笑）」

講座室にまた笑いが起こった。

「こういう質問の場合、私は『できます！』とお答えします。そして、『ただし』と言ってこのお示しをお伝えします」

そう言いながら、追加資料を配布した。

「その資料の最初のお示しをご覧ください。読みますね」

そう言つて資料を手に、拝読した。

「『天界地獄の区画はかくのごとく判然たりといえども、肉体の生涯にありし時において朋友となり知己となりしものや、特に夫婦、兄弟、姉妹となりしものは、神の許可を得て天の八衢^{あめやちまた}において会談することができるものである』（『靈界物語』第十六卷「靈の礎（一）」）とあります。

つまり先に靈界に入つた縁のある人で、強く会いたいと願えば、神さまのお許しのもと天の八衢、つまり中有界^{ちゆううかい}で会うことができるのです。ただし、一回だけのようです。どうしてか？ それが次のお示しで説明されています。

『生前の朋友、知己、夫婦、兄弟、姉妹といえども、いったんこの八衢に於いて別れたる時は、高天原に於いても根底の国に於いても再び相見^{あいみ}することはできない。また相識^しすることもない。ただし同一の信仰、同一の愛、同一の性情におつたものは、天国に於いて再び相見、相識することができるのである』（同）ということなのです。

つまり、同じ信仰心、同じ愛善の心、同じ価値観など、靈性が同じであるということが条件であるわけです。ということは、生きている間に同じような心、魂の状態に

なっていないかもしれないということです。私は質問者に、[〃]この点はいかがですか？
お二人、同じですか？[〃]と問い返します。すると、[〃]ん[〃]と考え込まれ、[〃]難しいで
す[〃]と答える方が多いですね」

……なるほど、そうだろうなあ。

「そこで私は、[〃]今から努力しましょうね[〃]と申し上げます。

よく、仲の良い夫婦は、長い間一緒にいると顔も似てくる、ということが言われま
すね。ましてや日々神さまに向かい、同じ信仰をし、教えに照らした価値観を持った
夫婦なら、霊性も近くなり、天国では同じ団体に籍をおけるかもしれません。そう
なよう、現界で努力しないといけないわけです。

ただし奥さまが、[〃]あの世に行つてまで一緒に居たくないわ[〃]というのであれば、こ
の限りではありません。まずは、現界にいる間お互いの意志確認をしておかないと
いけませんけどね……（笑）」

……そりゃあ、そうだ！

大地は笑いながら大きく頷いた。^{うなず}

幽体離脱

“霊界” “あの世” のように、目に見えない世界の話を信じるか信じないかは本人次第であるが、考えてみれば、大道場修行の講座で聞く話の多くは、目に見えない世界の話、心の世界の話である。

大本では霊界観、特に死後の世界の様子は、詳細に深く教えられている。これは、ほかの宗教団体にはない大本の教えの大きな特徴ともいえよう。もちろん大道場修行の講座「霊界の実在」の二時間半で学べることは、そのほんの一部に過ぎない。それでも、初めての話や体験などを聞くと、多くの人が強い関心を抱くものである。

大地も同じで、まだ修行二日目ではあるが、目に見えないものに関する価値観が次第に変わり、これからの自分の人生にとって、少なからず影響を与えるだろうと感じていた。

そのことは、池本講師が講座の最後に紹介した修行者の感想が物語っていた。

「少し前に、九州から見えた五十代の女性の方の感想をご紹介します。その方は、人生というのはこの世しかない、死んだらすべて終わりだと思っておられたそうです。ところが講座を聞いた後は『目の前の視界がパァっと開けて、心が明るくなりました。

現界でご縁ができ、先に旅立たれた人と霊界でまた会えると聞き、とてもありがたい気持ちになりました』とおっしゃっていました。これはその方にとって、とても大きな心の変化だと思います」

大地は池本の話聞き、この女性の気持ちに共感していた。

講座終了後、大地が神教殿の廊下で“お松茶”をいただきながら休憩していると丸山が近づいてきた。

「雨宮君、この方はね、とってもおもしろい体験をされているんだよ」

そう言っ、大地に受講者の北原剛さんを紹介した。名札を見ると、徳島から来られた人のようである。昨日から一緒に修行を受けてはいるものの、まだあいさつを交わした程度だった。どうやら丸山は昨夜、この六十歳過ぎとおぼしき男性といろいろ話をしていたらしく、特異な体験談を聞いたようだ。

「雨宮です。どんなお話なんですか？」

大地が丸山に訊いた。

「ほら、あの幽体離脱の話ですよ」

丸山が北原に話をうながした。

「ああ、あの話ですね。もう半世紀も前の古い話なんですけどね」

そう言って北原は、大地の前に座り、穏やかな口調で語り出した。大地は北原の話に「そんなことが本当にあるのか」と思いながらも、次第に引き込まれていった。

その体験談は、概ね以下のような不思議な話であった。

北原は中学三年生の夏休み、蓄膿症ちくのうの手術を受けることになった。通常は一週間程度の入院で済むのだが、両鼻を一度に手術したことにより、一カ月過ぎても医師からは退院の許可が下りなかった。それでも二学期が始まるというので、何とか退院したが体の不調は続いた。そこで、大学病院で検査をしたところ、心臓が衰弱しているうえに、蛋白尿たんぱくが出ていたことから腎臓の病気が発見されたのだった。

立った姿勢だと蛋白尿がおりるため、寝ていなければならないという重い腎臓の病だった。医師からは入院を勧められたが、再び入院を強いられることが耐えられず、無理を言って自宅療養を願い出た。医師は渋々承諾したものの、条件として、絶対安静と徹底した食事制限が課せられることになった。

腎臓の病のため、水分を控え、タンパク質と塩分が制限された。育ち盛りの北原少年にとっては、思い通り水を飲めないばかりか、塩気のある物やご飯をほとんど食べ

られないというかなりの苦行であった。そのため、みるみる痩せてゆき、体は衰弱して体力もなくなり、髪の毛も産毛のように細くなっていったという。

北原少年は、「こんなことをしていて本当に病気が治るのだろうか」、そう思うようになっていた。しばらくたつと、夜、幻覚すら見るようになった。

寝る頃になると体の毛穴から蒸気のようなものが出てきて、それが寝ている体の横で渦を巻いて姿となり、そこに自分の意識があるのだった。そして、横になっている自分自身を眺めるようになった。

北原少年は、「おかしいことになったなあ。自分はここにいるのに、なぜ自分の体が目の前に横たわっているのか？ 俺は幽霊になったのだろうか？ いやいよこれでこの世とお別れなのだろうか？」と恐^{こわ}くなった。しかし、そうしたことが毎夜続き、次第に自分の魂が体から抜け出ていることを自覚したのであった。いわゆる幽体離脱である。

「最初は驚き、とても不思議な気持ちだったんですけど、そのうちに慣れてきて自由に動けるようになったんですよ」

「へえ、そうなんですか」

大地はますます興味をおぼえた。

北原少年はそのうち考えるようになった。

「もし自分が幽霊なら、壁も通り抜けることができるんじゃないだろうか」と。そして、実行に移してみた。

するとどうだろう、目の前の部屋の壁をいとも簡単にすり抜けることができたのである。それも歩いてではなく、飛んで抜けられたのだ。さらに空中を自由自在に飛び回れることもわかった。それからというものの、夜な夜な部屋中を飛び回り出した。次第に当たり前のように幽体をコントロールできるようになっていた。そうなると飛翔^{ひしょう}する範囲も広がり、ある夜、家から出て近所の廃工場前の広場まで飛んで行つた。

もちろん、実在の場所であり、元気な時にはよく遊んだところでもある。そこへ一匹の野良犬が現れ、北原少年に気づき吠^ほえながら追いかけてきたのである。北原少年は「この犬は自分のことがわかるのか」と驚きながらも、慌てて自宅へ逃げ帰り、肉体に戻って目が覚めたのだった。

当初、肉体に戻る時はなかなかうまくいかなかったが、そのうちだんだんと慣れてきて要領がわかり、思うように肉体に復帰することができるようにもなっていた。

「でもね、そうなってくると、考えるようになったんですよ…、今は肉体にスムーズに戻るけど、もし戻れなくなったらどうしよう…とね。きっとその時は、“死ぬ”ということなんだろうなあ、と思うようになりました」

そう考えると、恐さがつのつてきた。

「これ以上体が衰弱したら、永久に元に戻れなくなってしまう。だったら早く体力を回復しないといけないのではないか」

そう思った北原少年は、医者から指示されていた食事制限をやめるしかないとは決意。しっかりと水を飲み、食べたいものを食べるようにしたのだった。

食事制限をしないと命は保証しないといわれていた北原少年だったが、あにはからずや、体力が少しずつ戻り、病状も回復していった。それと同時に魂が肉体から脱離する現象も起こらなくなったのであった。

「私はこの体験から、魂が存在するということは確信しましたし、魂あつての肉体であることを自覚しました。それと同時に、その逆もしかりで、魂には健全な肉体がないとダメだということも教えていただきました」

北原少年はこの時はまだ大本信徒ではなかったが、その後もさまざまな霊的体験を通して、目に見えない世界の存在を確信していった。そして、後年、大本の教えと出会った時、大本の霊界観を抵抗なく受け入れることができたというのである。

「霊界の存在は、疑う余地がありません。だって実体験しているんですからね」

北原は笑いながら、自信ありげにそう言った。

「幽体離脱」って、双子のお笑い芸人、ザ・たっちのギャグくらいしか知らなかったけど、ほんとうにあるんですね」

大地は真面目な顔で言った。

「『信仰叢話』^{ぞうわ}で尊師さまが書いておられる幽体離脱を、北原さんは実地体験しておられるんだよ」

丸山はそう言つて、尊師さまの以下のご文章の内容を要約しながら、幽体離脱や霊夢、火の玉などについて大地に話した。

『皆さんは、火の玉が飛んでいるのを追いかけてみたり、あるいはそれを叩いたりしたところ、夜が明けたら、ある家の人が傷を受けておったとか、あるいは病氣した

とか、急に気絶したとか、そういうような話、あるいは物語などをお読みになったことがおありではないかと思いますが、肉体をはなれた靈魂を追うというと、ある家にはいつて行く、その家をのぞいて見ると、その家の人が、いま非常におそろしい夢を見たとか、散歩しておったら怖ろしいものが棒で叩いて来たから逃げてきた、というのの聞いて、追うて行った人は非常に気味悪がったとか、そういう話もおありです。

人間が睡眠のあいだにでも、魂の一部が脱^ぬけて歩いてゆく、それが或^ある靈夢になる。自分の行かんと熱望している所へゆき、また亡くなった人に会い、ふつうの雜夢とはちがった、非常にハッキリした感じをもつことがあります。(中略)

そういう時にもかならず魂^{たま}の緒^{すじ}というて、条^{すじ}が、線^{すじ}が、緒^{すじ}が、その肉体につながっているのです。

死んだ魂^{たましい}と生きた魂との比較は、赤い火の玉は現界に肉体をもっている魂で、お月さまみたいな青白色をしているのが、肉体を現界に持っていない魂であります』

(『信仰叢話』「靈魂の肉体脱離」)

「僕は火の玉は見たことないのですが、二種類あるんですね」

大地が丸山に訊いた。

「私は一回だけ見たことあるんだけど、どっちだったかなあ？」

「えっ、見たことあるんですか？」

「確か、青白かったような気がするんだけど…。でも、北原さんの靈魂が犬に追いかけられた時、犬には赤い火の玉として見えていたんでしょうなあ」

「そうなんでしょうね」

北原はニコリと笑った。

「あつ、いけない。丸山さん、もう時間ですよ。ギャラリーに行かないと…」

大地が次のプログラムの時間に気づいて声を出した。

「おう、そうだね」

三人は立ち上がって、急いでみろく会館へ向かった。

感性を磨く

「ギャラリーおほもと」前には、すでに修行者が集まっていた。

「すみません、遅くなりました」

丸山が大きな声で詫^わびた。丸山の後について、北原と大地も頭を下げた。

「二分の遅刻ですね」

と、坂口が冗談^{冗談}ぽく、笑顔で言った。

「ごめんなさい」

丸山がちやめつ気たつぷりに笑顔を返した。

大地は丸山の後ろでいっしょに頭を下げながら、丸山の憎めない性格を羨^{うらや}ましくも思っていた。

「ではこれから、歴代教主・教主補さま方のお作品を拝見させていただきます」

坂口はギャラリーが開設された経緯などを説明し、続いて入口左手前の展示スペースのお作品を紹介した。

右には、軸装された開祖さまの全紙のお筆先が掛けられ、中央に聖師さまの墨絵「丹後風景」の襖^{ふすま}四枚が展示されている。大地は昨日から、食堂へ入るたびに、食堂入口

向かいにある展示スペースを眼にしていたが、説明を聞きながらあらためて見ると、お筆先はその存在感が迫ってくるし、「丹後風景」は奥行きが深く広がっていくようで、景色の中に引き込まれる感覚さえ覚えた。

「では、中へお入りください。しばらくご自由に拝観してください」

大地は最後尾から入室した。大方の修行者が右手壁側の展示ケースの耀盃の方へ向かった。

大地は昨年の五月四日、教主生誕祭の祭典前に、祖父母と母・京子と共に、初めてここへ入った時のことを思い出していた。

…あの時は、お筆先の和綴本わとじが展示してあったけど。

そう思いながら左手の方に目をやると、ハイケースの中に、展示してあるのを見つけた。

「あった」

思わず声に出た。

大地はお筆先に引き寄せられるように列をはずれ、ハイケースの方へ進んだ。

…やっぱり何とも言えない威厳があるなあ。

大地は、本紙と読み下し文とを見比べながら、小声で一字ずつ読み、筆跡を眼で追った。

しばらくハイケースの前にいると、ギャラリーの係員の男性が後方から声を掛けてきた。

「初めてですか？」

大地が振り返った。目が合った長身の男性の胸には「尾澤恭三」という名札が着いていた。

「いえ、二回目です。去年の五月に初めて拝見したのですが、その時の感動がよみがえってきました」

「そうですか、それはよかった」

「開祖さまのお筆先ということは、神さまが書かれたも同然なんですよね」

「そうですね、まさに神さまの書であり、神さまの直接のお言葉です。表に掛けてある全紙のお筆先も同じなのですが、ここへ来られた方の多くが、やはりこの和綴本のお筆先の方に感心を示されるんですよ。特に大本のことを勉強して来られた一般の方ほど、その傾向が強いです。軸装したお筆先は、地方で開催している作品展でも展示していますが、和綴本のお筆先は、ここでの展示していませんから、作品展で

軸装のお筆先を見てきた方は、ここで和綴本をご覧になると、とっても感激されますね」

「そうなんですか」

大地が頷いた。

「^{やはぎ}矢作直樹先生もそうでしたね」

「矢作先生って、東大病院の？」

大地はちよつと驚いた表情で言つた。

「ご存じですか？」

「ついさっきの『霊界の實在』の講座の中でお話をうかがつたばかりなんですけど……。『人は死なない』という著書を書かれた方ですね。その先生がここへ来られていたのですか？」

「ええ、二年ほど前だったか、ご友人の案内で綾部へ節分大祭にみえて、翌日、天恩郷へ立ち寄られたんです。その時、この部屋に入られるとまっすぐにお筆先の前に進まれて、しばらくジツと見入っておられました。そして、案内された方に「これを拝見ただけで、大本がどういふところかわかります」とおっしゃっていたそうです」

「ええ、すごい！ 説明を聞かなくても、分かる人には分かるのですね」

「そういうことですね」

尾澤は「ごゆっくり」と笑顔で会釈し、他の修行者の列の方へゆっくり向かった。

大地はハイケースのお筆先に一礼して、右手の耀盃の方へ進んだ。

さまざまな形と色の耀盃。

昭和二十年という戦中戦後直後の混沌とした時代に、よくぞこんな鮮やかな色彩のお茶盃を造られたものである。

知る人ぞ知る耀盃の人氣は、世間でも徐々に高まってきているという。

大地は展示ケースの耀盃から、二代さまの書、聖師さまの書画、三代さま、四代さまの書や陶芸、尊師さまの書、そして教主さまのお茶盃と、展示を一巡し、最後に聖師さまの等身大とされる樂焼の「伊都能売觀音像」の前まできた。

やはり「伊都能売觀音像」は存在感がある。それでいて、見る人を包み込むあたったかい力がある。

樂焼は、千利休の茶の湯のためという明確な目的のもとに生まれたもの。その製法

で茶碗以外のもの、しかも、こんなに大きな作品は、おそらく他で眼にすることはできないだろう。ゆえに、どの窯でどうやって焼成されたのか、まだナゾが残っているという。

「雨宮君、最初、長い時間お筆先の前にいたのに、もう全部拝見してきたのかい？」

丸山が声を掛けてきた。

「はい、そうなんです。実は去年、友人の紹介である個展に行ったのですが、その時に主催していた陶芸家の先生から、美術展の見方をアドバイスしていただいたんですよ」

「ほう、どんな？」

丸山が興味深げに訊いてきた。

「普通の人は、展示場に入ると順路通りに、まず挨拶文や説明文をじっくり読んで、一つ一つの作品を丹念に見て歩くんだそうですね。私もそうでした。でもその先生は、違う見方を教えてくださいました」

大地は少し間をおき、話を続けた。

「自分の感性で作品を見るということです。だから、説明文などは最初は一切読まな

いこと。読んでしまうとどうしても先入観が入ってしまうと言うんですね。つまり、予備知識を入れない。とにかく展示作品そのものを自分の美的感覚で見て歩く。すると「これ、いいなあ」というのがある。もちろん、一つもそう思わないこともあるでしょうが、どれか気になる作品がある。そうしたら、あらためてもう一度その作品をじっくり見るんです。そのあとに、展示会の概要や展示品の説明を読むようにするという鑑賞の仕方です。つまり、自分の感性に正直に向かい合うことによって、美感性をより磨くことができるということです」

丸山は頷きながら大地の話聞いていた。

「それから展示場を出たら、いったん忘れてしまう。そして数日たっても、心のどこかに残っているもの、気になる作品があれば、それが本当に自分が好きな作品であり、自分の感性に合ったものだということらしいです」

「なるほどね」

「でも、ここの作品はちよつと違うかもしれないね。芸術作品としては同じでしょうが、信者さん方は、信仰的な対象として書画や陶芸を受け止められると思いますから」
大地は、あくまで受け売りの話なので、少し自信なさげに言った。

「いや、その通りだね。でも、一般の人からしたら、やはり芸術作品として見るだろうし、その観点からしても、ここにある作品は素晴らしいものばかりだと思うけどね」

丸山はギャラリー内を見回しながら言った。

「もちろん、そうだと思います」

大地も答えた。

「例えばだよ、あのお茶盃……」

丸山はそう言いながら、奥の展示ケースの方へ誘うように歩を進めた。そして教主さまのお作品の前で立ち止まり、大地の方を向いて話を続けた。

「雨宮君、この教主さまのお茶盃を拝見してどう思った？」

「どう思ったか？ ん〜」

大地はしばらく考えて、口を開いた。

「どれも好きです！」

「なるほど」

丸山が笑顔で言った。

「恐れ多くて僕なんかが批評することはできませんよ。ただ、それぞれに違った特徴

があるなあ、だからカッコイイなあ、って思います」

「そう、それぞれ」

丸山が言葉をかぶせるように言った。

「えつ、どういふことですか？」

「普通ね、一人の作家が造る茶碗というのは、何となく同じような雰囲気があるんだよね。でも、教主さまのお茶盃は、全部雰囲気が違うでしょ。ここに展示してある六個のお茶盃もそう。それぞれに特徴があり、個性があり、顔がある。もし、何も知らない人にこれらの茶盃を見せて、これは何人の陶工が造ったものでしょうか？」って質問したら、おそらく複数人と答えるんじゃないかなあ。だから私は、このお茶盃は、教主さまのご人格の上に、神さまのご意志のもと造られた大本の『宝』だと思っているんだよ」

「確かにそうですね。いや、勉強になります」

横から北原が得心したような声で口をはさんだ。

「きれいだなあ、と思う美の意識というのは、見た目、外見からだけ受けるものじゃなくて、内側からにじみ出るものなんだと思うんだよ。そこには精神性や思想も現れてくる。それを突き詰めていくと、宇宙の本源にたどりつくんじゃないかな」

「つまりは、神さまのみ心ということですね」

丸山の説明に、北原が言った。

大地もしっかり頷いた。

「いや、偉そうに言つて、すみません！」
またちやめつ氣たつぷりに、丸山が笑った。

四大綱領

規則正しいスケジュールとはいふものの、日常とは違う生活サイクルで、朝も早く、二日目の夜となり、夕食の後ということも手伝って、安生館の部屋で、しばし睡魔に襲われてしまった大地だった。

スマホのアラームをかけていて正解だった。アラーム音で我に返り、あわてて神教殿へ向かった大地は、気持ちを切り替えて講座に臨んだ。

夜間の講座は「四大綱領（人類生活の原理）」である。

講師の田沼賢一にうながされ、机上に置いてある「おほもとのり」との表紙を開けると、そこに見開きで「大本教法」が掲載されている。田沼講師によると、これは大本の「憲法」のようなもので、全部で十二章からなっていると言う。その第十章に「大本は、左の四大綱領をもって、人類生活の根本原理とする」と記載され、続けて以下の四つが掲げられている。

一、祭さい 惟神かなながらの大道たいどう

- 一、教きょう 天授てんじゆの真理しんり
- 一、慣かん 天人道てんじんどうの常
- 一、造ぞう 適宜てきぎの事務

大地は最初「綱領」の文字から、何だか堅苦しい講座なのかと思っていた。一般に「綱領」というと、政党や労働組合などの団体が、その立場や目的、計画、方針、または運動の順序や規範はんなどを要約して列挙れつきよしたものであるからだ。だが「綱領」にはほかに、物事の大切なところ、眼目という意味があることを知った。

また、「四大」は「よんだい」ではなく「しだい」と読むことも初めて知った。副題から合わせて考えると、「四大綱領」は、人類が生活を営む上で大切な四つの眼目ということである。

「一言でいうと、人にはそれぞれ、神さまから与えられた本分・使命があります。その本分をつとめあげるために必要な日常生活の「原理」を、『四大綱領』と言います。人はこれに沿って生きることによって、幸せな人生を送り、世の中を明るく平和にしてゆくことができますのです」

田沼講師は、そう説明して講座を始め、最初に「四大綱領」の歴史に触れた。

聖師さまが示された「四大綱領」が最初に活字となって信徒に伝えられたのは、明治四十二年であつたという。同年六月十日に発行された当時の機関誌「直霊軍」の第四号に初出されている。

ただしこの時は「四大綱領」ではなく、「本教の四大主義」として出され、最初の「祭…惟神の大道」が「政…万世一系」となっている。

これが「四大綱領」と表記されるようになったのは、機関誌「神霊界」の大正八年十月一日号からである。この時も、「祭」は「政」と記されている。

その後「四大綱領」は、大正十年の第一次大本事件後、当時の大本の機関誌に掲載されなくなったが、「神霊界」誌が「神の国」誌と改題（大正十年八月）された後の昭和二年二月号から、「政」が「祭」と、今の表記で掲載されるようになった、との説明だった。

「昨日の午後、皆さんは神苑案内で、万祥殿から巡拝コースに入られ、『教学碑』のところに行かれたと思います。その右手前には、『四大主義碑』がありましたね。ちなみ

に『四大主義』に関しては、明日の午後、講座があります。それはともかく、現地で説明を聞かれたと思いますが、あの『教学碑』と『四大主義碑』の碑石は、第二次大本事件解決後に建立されたものです。

『教学碑』が、開教六十年記念事業の一環として、昭和二十八年四月十八日に立ち上がりました。『四大主義碑』はその十八年後、聖師さまのご聖誕百周年を記念して、昭和四十六年八月七日に建立されました。これらの石碑は、事件前にも建てられることになっていました。そしてもう一基、『政・教・慣・造』の『四大綱領碑』もあつたのですが、建立されないまま弾圧によつて破壊されてしまったのです。現在はその拓本のみが残されています。私はいずれ時節が来れば、『四大綱領碑』も建立されることになるのではないかと考えています」

と、田沼講師が「四大綱領」の大まかな歴史を紹介した。

大地は、初めて聞く話であり、ついていくのが精いっぱいだったが、ふと隣の丸山を見ると、時折^{うなず}頷きながら、眼をらんらんと輝かせて聞き入っていた。「ほお、そうなのか!」と得心する丸山の心の声が聞こえてきそうなくらいであつた。

……丸山さんのように、大本の歴史に興味のある人にとっては、たまらない話なん

だろうなあ。

大地はそう思った。

「さて、それでは『修行のしおり』を読ませていただきます。四十八ページを開いておられますか？」

田沼が受講者を見回して確認した。

「最初の文章は、『靈界物語』の第三十八巻の第一章『道すがら』からの引用です。

：人生の本分としては、第一に天地神明の大業に奉仕し、政治をすすめ、産業を拓き、かつ真の宗教を宣伝し、道義心の發達を助けて世界の醜惡を驅追し、真善美の天地に進めてゆかねばならぬのである。他人はどうでもかまわぬ、自分のみ清く正しければいいのだといって、聖人氣どりで済ましているようなことでは、人間としての天職を全くしたものだということとはできないのである。喜樂は常に、政（※祭）教慣造の進歩發達を祈願し、かつ完成せしむるを以って、人たるものの天職だと考えている。

この中で出てくる『喜樂』というのは、聖師さまの雅号です。聖師さまはお若い時、浄瑠璃を語られたり、冠香句の選者をなさる時など、『安閑坊喜樂』と名乗っておら

れたのです。聖師さまは、『四大綱領』が進歩発達することを常に祈られ、人々の生活の中に浸透し完成することが、人として神さまから与えられた本分、使命であり、大きなご用だとお示しになっています。

それから、このお示しの中で“（※祭）”と記載してあるのは、『靈界物語』の原文には書いてありませんが、講座資料として挿入してあるものです。その理由は、先ほどお話しした歴史に由来しています。今の世の中では“政”というと、どうしても現在の政治を連想されるかもしれませんが、神さまを中心とした本来の“政”は、“まつりごと”なのです。大本では“祭政一致”というお示しもありますが、本当の“まつりごと”は、祭と同じ本義があるわけです」

田沼が力を入れて語った。

……大本の教えというのは、どうも単なる人生訓や生き方の指針とは違うようだなあ。

大地は、田沼講師の話聞きながらそう思っていた。

「さて、その“祭…惟神の大道”について、次のお示しを読ませていただきます。

…祭（マツリ）（マツル）という語は真釣^{まづ}り、真釣ルの意義である。真釣ルとは度衡^{どこう}

の両端に、重量を懸けて平衡へいこうさせる意義である。天上の儀と、地上の儀とを相一致せしむるの作法が、マツル（祭祀）である。マツリゴト（政道）である。祭祀政道の大儀は、これ以外に決してあるべきではない。

○

惟神（カ・ミ・ナ・ガ・ラ）の道というのは、天上地上の祭祀政道の、正しく行わるる有様をいうのである。神の示させ給うまにまに、行い行くのが惟神の道である。惟神の道は祭祀政道の根本義である。現代の如き形式的祭祀、権謀術数的政道は、決して惟神の道でない。（「出口王仁三郎全集」第一卷）

この中にある度衡というのは、天秤てんびんばかりのことですが、この中でいちばん若い雨宮さん、わかりますか？」

田沼講師に急に振られてドキツとした。大地は、「は、はい、わかります」と答えた。田沼はニコリと笑顔になり、話を続けた。

「祭というのは、お祭り騒ぎの祭ではないんですよ。まつりは、宇宙の普遍的なりズムそのものであり、神さまへ一切のものが融合し帰っていく働きで、神さまと人とが

真に釣り合う、全く釣り合うということです。さらに、神と人との間だけでなく、宇宙のすべてのものの間に行われているもので、人間相互の間にもまつりがあります。夫婦の間、親子の間、師弟の間、上司と部下の間などにもまつりが必要なのです。あるいは、人と動植物の間、動植物間にもまつりがあるのです」

…とても幅広い考え方なんだなあ。

大地はそう感じた。

「大自然の組織、人の組織、人体の組織と、すべての組織には必ず中心があります。全大宇宙の中心は、天地をお創りになった主の大神さまです。その主神とまつりあわせ、ご恩に対して感謝の気持ちを表すことが、まつりであり、現実の世界では祭祀といえます。

祭祀には大きく分けて二つの方法があります。一つは、神さまを齋きまつるために、荘厳な形式を整えて行う方法で、これを『顕齋』と言います。月に一度の月次祭や大祭などのように、ご神前にお供え物をし、装束に身を包んだ祭員が作法に則り、祝詞を奏上してお祭りする祭典が『顕齋』です。日々の朝夕拝も『顕齋』ですね。

もう一つは、神霊に対して自分の霊、想念、思いをもって祈りを捧げる方法で、こ

れを『幽齋』^{ゆうさい}と言います。

体的に神さまに向かう『顕齋』が「祭るの道」で、靈的に神さまに向かう『幽齋』が「祈祷の道」と示されています。そのことが次のお示しに書かれています」

田沼はそう説明して、「修行のしおり」にある『道の栞』のお示しをゆつくりと読み上げ、続けて記してある聖師さまの四首の道歌を拝誦^{しきゅう}した。

宮柱^{みやばしら}太しき建てて幣帛^{みでくわ}を

ささげまつるを顕齋といふ

眼に見えぬ己^{おの}が心靈^{こころ}を眼に見えぬ

神にささぐる幽齋の道

むらきもの心きよめて大前に

祈るまことを神は受けなむ

心をも身をもまかせて祈りなば

神はまことの力たまはむ

（『大本の道』）

祭政一致

「さて、さきほどもお話ししましたが…」

そう言つて田沼講師は、話を戻した。

「四大綱領の『祭…惟神の大道』は、昭和二年までは、『政…万世一系』と表記されていたとお伝えしました。現在の大本教法では、『祭・教・慣・造』になっているわけですが、さきほど拝読した『修行のしおり』の『靈界物語』（第三十八巻・第一章『道すがら』）には、『政・教・慣・造』となっています。何か矛盾するようですが、決してそうではありません。

神さまを中心とした本来の『政』は、『まつりごと』であり、本当の『まつりごと』は、『祭』と同じ本義があると申し上げました。その理由の一つに大本では『祭政一致』というお示しがありますので、そのことをもう少し詳しくお話したいと思います」

田沼はそう言つて一呼吸おき、話を続けた。

「実は、『祭政一致』という言葉は、大本独自のものではありません。明治三年一月三日に明治天皇が出された『大教宣布の詔』にも見るできます。兩宮君、詔

ってわかりますか？」

大地はまた指名されて驚いたが、少し考えてから答えた。

「確か、天皇陛下のお言葉、ということじゃないかと思います」

「はい、そうですね。天皇のご意思を伝えるお言葉であつたり、天皇のご命令や、またそのご命令を直接に伝える文書のことをいう場合もあります」

田沼は大地に笑顔を向けながらそう言うのと、すぐに正面を向いて話を続けた。

「詳しい説明は避けますが、天皇を現人神あらひとがみとして神格を与え、神道しんどうを国教と定めて、日本を祭政一致の国家とする国家方針を示されたのが、『大教宣布の詔』で、その中に、『祭政一致の制度を明らかにして』とか、『惟神の大道を宣揚すべき』という言葉がありました。

ですから、『祭政一致』は、大本独自の言葉ではありません。でも、この詔の中の『祭政一致』の意味と、大本のみ教えの中の『祭政一致』は、ちよつと違うようです……どう違うんだろう。

大地はそう思った。

「日本では幕末、徳川幕府による武家政治から、天皇による元の君主政治に復帰する

“王政復古” という思想の下に明治維新がなされたことは、皆さんよくご存じだと思います。

この王政復古と同時に、明治天皇は、“神政復古”を遂行しようとされたわけです。“神政”とは、まさに神さまのマツリゴトで、“神権政治”とも、“神裁政治”ともいわれます。

『大教宣布の詔』の内容は、古代の日本のように、天皇が現人神、つまり生き神さまであり、神さまの代理者として絶対的権力を持たれて、マツリゴトを進められることを宣示されたものでした。

古代、天皇は神さまとして崇められていました。飛鳥時代の七世紀末、壬申の乱に勝利した大海人皇子が第四十代の天武天皇として飛鳥浄御原宮で即位されたのを讃えた歌にそれを見ることができません。

有名な万葉歌人の柿本人麻呂や大伴御行などが天武天皇を神と崇めて詠んだ歌があります。

おほきみ
大君は神にしませば天雲の
いかづち
雷の上に廬らせるかも

大君は神にしませば赤駒の
腹はら這たふ田居いを都と成しつ

大伴御行

今は時間の関係で歌の意味を詳しく申し上げませんが、ほかにも、「大君は神に：云々」という歌はいくつかあります。

要するにそれまでは大君と呼ばれていた天皇が、実は神さまであり、その神さまがマツリゴトをなさるのだ、ということにつながるわけです。

同じように明治天皇は、『大教宣布の詔』で自らを神格化し、神道を国教と決めて、日本を「祭政一致の国家」にしようとなさったわけです。

ところがこれがなかなか思うようにいきませんでした。わずか五年後にはもう立ち消えのような状態になってしまったのですね。

聖師さまは、『出口王仁三郎全集』（第二巻）の中で、「このことはとても腹立たしいことだった」と書いておられます。でも、「実はこれも大神さまのご神慮であり、大本

が出現するについての必然的な順路だった」とも述べておられるのですね」

そう言うてから、田沼講師はホワイトボードに板書した。

宗教即政道

政道即宗教

←

祭政一致

「聖師さまは、地上天国実現の条件は、宗教即政道、政道即宗教であるとおっしゃっています。そして、『政道即宗教の本義を称して、祭政一致と言うのである』とお示しになっています。

さらに、日本の国における祭政一致の真の意義は、『神と国と人と世』との真釣^まりごとの意義であるとされ、『祭政一致がなければ、地上天国・みろくの世は来ないのだ』、とまで明言されているのです。

逆に言えば、祭政一致の本義、真の意義を世の中に復活することができれば、みろくの世が到来するということなのだ、と拝察できるわけですね。

そういう意味からも、この四大綱領の『祭』はとても大切なことであり、『政』から『祭』になったこともご理解いただけるのではないかと思います」

…ん……、奥が深くて、ちよつと難しいなあ。

大地はそう思いながら横を向くと、丸山はさつきと同じように、何回も頷（うなず）いていた。

「ちよつと横道にそれるかもしれませんが…」

と言つて、田沼講師はまた二つの言葉を板書した。

大乘教

小乗教

「大乘仏教、小乗仏教という言葉は聞かれたことがありますか？」

田沼がまた大地の方を向いたが、大地は田沼と目が合うと、首を傾けた。

それを見て田沼は、大地から返事を聞くのを諦めたかのように話を始めた。

「大乘仏教というのは、仏教の二大流派のひとつですね。大乘の乗は『乗る』ということですから、大きな乗り物ということで、そのことから、どんな人でも信仰があれ

ば救われるという意味や、自分よりもまず衆生を救済することを優先し、自分が救われるかどうかは仏に任せる、という考え方といわれています。

それに対して、小乗仏教は、乗り物が小さく、自己の悟りや解脱げだつを主にする在り方の仏教ということです。

さきほど、現代は“政道即宗教”とはほど遠い時代だと言いましたが、その宗教、特に現代の既成宗教は、ことごとく小乗教の域を出ていない、と聖師さまはご著書の中で論破されているのです。

では、大本はどうなのかというと、次のようにお示しになっています」
そう言って、手元の資料を拝読し始めた。

大本の教えは大乗の教えであるが、大乗教ばかりでは人を救うことはできない。たとえば、風呂をわかつて入れてやると皆が非常に愉快な気持ちになるが、しかし風呂をわかすには、それに先だつて薪炭しんたんをととのえねば入浴の愉快が永續しない。この薪炭をととのえる小乗教の働きをもせなければならぬから、王仁わたいしはこれから小乗に下つて働く。

「つまり、大本には大乘と小乗の両方の教えがあるということです。また、この大乘と小乗についてとてもわかりやすい例え話を書いておられますので、ちよつと読ませていただきますね」

そう言つて田沼講師は、ゆつくりと読み始めた。

寒くば火鉢に暖まれあつたという、火鉢で足らねば暖炉にせよという、暖炉を設けて重ね着してなお寒くば何とする、酒でも飲んで炬燵こたつに暖まれという、実に注意周到な御教示である。しかし私には炭火もあり、重ね衣ぎする衣服もあれど、貧困者は何としよう。私は炬燵に入つておつて暖かくとも、隣の奎兵衛もくべえはそれができない。大家の旦那は酒を呑のんでストーブに暖まつているが、私には暖炉の設備ができません。酒も嫌いです。そんなことは世の中に何程もある。

大風呂を沸かして向かい三軒両隣の人々を招いて、素裸すっぱだかにしてその大風呂へブツ込んでみたまへ。十人でも二十人でも一時に暖まつて、誰彼の差別なしに同様に暖ぬくいから着物を重ねる世話もなく、炭火をあがなう要もない。裸ほど一親平等なものはない。誰の羽織が絹物で、誰の衣服が木綿だと議論する必要がない。一様に温かい湯は誰に

でも同様に温かいに相違ない。吾人は炭火を用意せよ、着物を重ねよという教えを小乗といい、風呂へ入れる教えを比較的大乗だというてみたいと思うのである。(中略)

現代の既成宗教が説くところは、ことごとく墮落した教義であり、個人に修養をすすめるところの小乗教である。一つとして大乘がない。大風呂へブツ込み桃源を実現する用意がない。換言すれば政事を忘却しているところの閑人間の仕事である。

〔出口王仁三郎全集〕第二卷

「どうです、おもしろい例えでしょ」

田沼講師が、顔を上げて丸山に視線を向けた。

「なるほど、わかりやすい話ですなあ」

丸山が笑顔で返した。

…僕にはちよつと難しいけど、丸山さんは興味津々のようだなあ。

大地はそう思った。

教…天授の真理

「さて、次は二番目の『教…天授の真理』に移ります。まずは、『修行のしおり』の次のページをお開きください」

田沼講師は修行者を見まわして、全員がページを開くのを確認してから、最初のお示しを読み始めた。

総て教なるものは、今日の人智を以て測り知る事の出来ぬもので、智徳円満豊備なる神の直々の教でなければ、教と云ふ資格は無いのであります。
(道の大原)

「ここで示されているのは、古今東西にいろいろな教えがありますが、『教』というのは、人間の悟りや経験から導かれたものではなく、本来、人智を越えたものなんですよ…ということですね。『智徳円満豊備なる』というのは、神さまから発せられた…ということです。『円満』は夫婦円満というように仲が良いとか、角がなく穏やかなことという意味もありますが、ここでは十分に満ち足りていることで、『豊備』も豊かに備

わるといふことですね。つまり、「智と徳が満ち足りている存在」といふことですから、「智徳円満豊備なる」は「神さま」と受け取れますね。つまり、神さまの直々の教えでなければ、「教」という資格はない、と断言されているわけです。

それは取りも直さず、天から授かった永遠無窮むきゆうの変わることのない真理ということ。ですから、教…天授の真理、というわけです。このことを端的に詠まれた聖師さまのお歌があります。それが次のページにあります三首ですが、順番を変えて、後ろから読んでご説明します」

田沼講師はそう言つて、道歌を読み上げた。

教おしえとは人の覚さとりのおよばざる

天地の神の言葉なりけり

「まさに、今ご説明したことを、一言で示されたお歌だと思ひます。また、お筆先にも同じようなことがあります。国祖・国常立くにとこたちのみこと命さまは、「言い置きにも書き置きにもないことを示す」と書いておられます。過去に言われたこと、書き留められたこともないことを示すんだ、とおっしゃっている。まさにそれが「教」なのですね」

人生の悩みをすくふ光明は

三世貫通の神のみをしへ

「人生の悩みを救うことができる『光明』、そのすべ・というのとは、三世を貫通している神さまのみ教えである、ということですね。この三世というのは、『過去、現在、未来』のことであり、また、『靈界の實在』の講座で学ばれた『現界、幽界、神界』のことでもあります。つまり、真の教えは、今だけ、現界だけのものではないということです」

大本は宗教にあらず神ながら

天授の真理説く道にぞある

「大本というのは、普通一般の宗教ではありません。天授の真理、つまり神さまのみ教えを説く『道』であるということです。『ぞある』の『ぞ』には強調の意味がありますから、強く訴えておられます。

このように、この三首のお歌からも、『教』というのが、人智を越えた絶対的な真理で

あるということをうかがい知ることができるかと思ひます」

大地は、何となく理解したつもりになっていたが、まだ納得できない自分がいることも感じていた。

田沼講師は、さらに説明を続けた。

「では、その『教』はどこにあるのかということですね。それは特に二大教祖である開祖さまと聖師さまを通して、まことの神さまから伝授された真理がまとめられた『教典』にあるわけです。

教典は、開祖さまのお筆先に聖師さまが漢字を当てられた『おほもとしんゆ』全七巻、聖師さまが口述なさった『靈界物語』全八十一巻・八十三冊、（※現在はこちらに『いづのめしんゆ』を含める）、聖師さまが示された『道の栞』、『道の光』を加えたものです。またそれ以外の聖師さまの論文や随想、道歌、また、歴代教主・教主補さまのお示しを『教説書』といいます。さらに、その時代の教主さまのお示しを『教書』といい、この教典、教説書、教書を総称して、私たちはご神書と呼んでいます」

…ご神書にも、そんな種類があったとは、初めて知ったなあ。

そう大地は思った。

「さて、続きを『修行のしおり』の少し前に戻ってご説明します。そこに書いてあるのは、尊師さまの『信仰叢話』からの引用です。

「教は、日本でオシエと読み、オシエとはオシウであり、『緒強う』という漢字が当てられています。そして、オは魂の緒で、霊魂のこと、シウは強いて良くしていくということであるといわれています。つまり、教えというのは、悪い方の霊魂をだんだんと強いて良くしてゆくという意味があり、悪い方を純化してゆく向上的な手段であるとおっしゃっています。

また、教え育てること…教えるというのは、英語で educate と言いますが、それは引き出すという意味があります。つまり教え育てるということは、神さまから与えられた純なる性、人それぞれに備わっている「神性」を引き出すということなのです。

ところが今の時代、便利になりすぎた現代文明によってその「神性」は、覆われてしまっていることが多いのです。そういうものを引っ張り出すのが教えである、と尊師さまが断言されています。

ですから、教えというのは、良くない魂のあり方を強いて、霊魂をより良く向上させてゆく上の一つの理論ともいえるべきものなのです」

…神性を引き出すということか。

大地はしおりの余白にメモを取った。

「なくて七癖」といいますが、皆さんそれぞれにクセがありますよね」

田沼講師はそう言って、大地に視線を投げかけた。大地が気配を感じて顔を上げると目が合い、仕方なく頷いた。田沼は笑顔で一度頷いて話を続けた。

「もちろん私にもいくつかのクセがあります。クセにはまず態度や仕草しぐさに表れるものがあります。当人は気づかなくても、親子で同じようなクセがある場合もありますね」

…ああ、あるある。

大地は同感した。

「さらに、自分の考え方、あるいは価値観にもクセがあります。性格や人格という場合もあるでしょう。でもそれが常に正しいかどうかはわかりませんね。誰もが自分の物差しだけで自分勝手に生活していたのでは、この世の中はうまくいかないでしょう。

特に、自分では意識していなくても、神さまがもつとも戒めておられる“われよし”“つよいものがち”という悪の要素が隠れているとやっかいです。この悪の要素を強いて良くしていくには、悪の要素が含まれていない天授の真理、神さまのみ教えをいた

だき、実践していくしかありません。

尊師さまは、今の世の中が行きづまり、現代の教育がどうも腑に落ちないというのは、その教えが天授の真理でないからだ、とおっしゃっています」

…そうのことか。

大地は、自然と頷いていた。

「そして、教えをいただく上で大切なことが三つあります。それは、『感恩』『鍛錬』順序です。しおりに尊師さまのお示しがありますね」

そう言って、田沼は『修行のしおり』に目を落とし、該当の箇所を読み上げた。

細目さいもくに分ければいろいろ出来ましようが、私はこの感恩、鍛錬、順序の三つは天授の真理の中で間違いない、時と所と人とを問わず、どこにほどこしてもよいものであると信ずるのであります。（『信仰叢話』）

「まず、『感恩』ですが、教えというのは理屈で理解するのではなく、教えをいただく根底に『ありがたい』という気持ちが無くてはいけません。人間は片時も神さ

まのみ恵みなくしては生きていけません。水も火も大地も神さまのみ恵みであり、これが必要れば人は生きていけません。さらに、空気がなくなってしまうばなおさらですね。こうした「天地の之恩」に私たちは慣れすぎていて、あるのが当たり前のことと思い、神さまの愛、神さまのありがたさを忘れてしまいがちです。まずは「感恩」ということを知らなくてはなりません。そのためには、「鍛錬」が必要なのです。

教えを真に自分のものにしていこうと思えば、まず教えが絶対的なものであることを固く信じることです。そして自分自身に教えにそぐわない点があれば、徹底的に鍛錬を重ね、自分のあり方、考え方を根底から改めていくだけの勇氣が必要になります。頭だけで理解するのではなく、体も使い、腹を練っていかないといけないということです。まあ、楽をしていてはダメ、苦勞も必要だということですな」

「若いうちの苦勞は買つてでもしろ、ということですね」

丸山が言った。

「そういうことですな。ただし、丸山さん、教えをいただくのに、年齢は関係ないので、鍛錬はずつと必要かと思えますよ」

「あつ、こりゃやぶ蛇だったかなあ」

丸山が、掌でピシャツと額を叩くと、講座室に笑いが起こった。

「そして三つ目が『順序』です。これは、物と物との関係において、あるいは人間同士の間、左右の関係など、その区別、序列をしっかりとわきまえないと、真の教え、物の道理がわからないということです。

この三つを踏まえて、『教』を得るには、まずご神書を拝読して、神さまのみ教えを素直にいただいてください。そして、人の視点ではなく、教えに基づいた視点を持つてください。

神・さ・まの目から見たら、何が正しくて、何が間違っているのかをしっかりと知り、神さまのみに添える行い、生活の実践を、お互いに心掛けていきたいと思えます。：
ねえ、雨宮君！」

「あつ、はい」

急に田沼に振られ、大地は思わず返事をしてしまった。

慣と造

「さて、次は三番目の『慣…天人道てんじんどうの常』です。

慣…『慣なわし』で辞書を引くと、『じきたりとして決まっている事柄』とあります。また、慣を使った言葉に『慣性』とか、『慣性の法則』がありますが、東川さん、『慣性の法則』って知っていますか？」

田沼が修行者の一人、東川芳かおるに質問した。

東川は静岡から参加している二十代後半のOLである。

「えっ、私ですか？ えっと、学生時代に習ったことだけは憶おぼえていますけど…、何でしたっけ？」

東川は急に指名されてびっくりし、とっさにそう返事した。

「たぶん物理の授業で、だるま落としや、電車が動き出す時に働く力として習ったんじゃないかと思いますが、辞書には、『力が働かない限り、物体がその運動状態を持続する性質』とあります。つまり、止まっているものはずっと止まっていようとし、動いているものはずっと動き続けようとする性質のことですね。

これを、神さまが創造された宇宙の動きで考えてみましょう。地球と太陽、大宇宙

と太陽系など、すべて神さまが定めた慣わし：慣によつて寸分違はず動いているといえます。つまり宇宙の全てのものは、天道の慣性：慣わしのもとに活動しています。

そして、人にも物にも、本来神さまが定められた慣性が備わっているのです。ただ物体の場合、地球上では宇宙空間とは違い、空氣の抵抗や摩擦がありますので、動き続けられませんね。ここまでいいですか？」

と田沼は東川に目線を向けた。東川は、小さく二回頷いた。

「『天道』とは、『天道』と『人道』をあわせたものです。『天の道』と『人の道』ということ。この二つ『天と人』、つまり『神さまと人』の道において、常に厳然と存在する慣わしが『慣』である、ということです。

つまり『天授の真理』が型にあらわれたものが『慣』というわけですから、『教』が型にあらわれて『慣』となるのです。

人の道には、内外両面がありますから、内面的には神さまの教えが『心の慣』となり、外面的には『形の慣』、たとえば習慣やクセなどに表れてきます。そして『心の慣』：つまり神さまから人の魂に授かった慣性には、五倫五常などがあります。

今ご説明したことを踏まえて、次のお示しを読ませていただきます」

田沼講師はそう言って、資料を読み始めた。

山野に樹木の発生し、且つ其幹の丸く成長するは、是れ天道である。是を人あり、伐採して或は四角の柱と造り替え、或は平たき板となし、或は諸道具を作製するは、是れ即ち人道である。人に五倫、五情の心得あるは、人類自然の慣性にして、神又は人の教導を待つて知る可きものではありませぬ。

(道の大原)

「この中に、『人に五倫、五情の心得あるは…』とありますが、ここである『五倫』は、儒教の教えでいうところの『五倫五常』のことで、『五情』は昨日『神と人』の講座で学ばれた『一霊四魂』の働きである『五情の戒律』のことです。

『五倫五常』の『五倫』は、基本的な人間関係を規律する五つの徳目で、君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信のことです。そして、『五常』は、仁・義・礼・智・信の五つのことです。

また、『五情の戒律』というのは、憶えておられるでしょうが、省みる、恥じる、悔ゆる、畏れる、覚るの五情ですね。

そして、これらの慣性と同時に、生まれてから日常生活を送る中で、後天的に慣性

が身につけてきますね。それによって、生活のリズムができ、規律が生まれ、社会で生きていくすべを身につけていきます。

ところが、それが良い慣性だけならいいのですが、往々にして、悪い慣、習慣、クセがついてしまうことがありますね。私にもありますし、自分では気づかないことも多々あります。ねえ、丸山さん

「その通り！」

丸山が相づちを打った。

「人間にとって、そのクセを一つ直すだけでもたいへんな労力だと思います。次の尊師さまのお示しがそのことを伝えておられます」

と、しおりの次のページをめくって読み始めた。

自分の悪い慣を一つ直した人は、大変な宝の塔を建てた人、一つの世界を改造した人といってもよいのであります。人間の一生は、ある意味において、慣を直すことである。悪い慣をなおし、良い慣をますことであります。

（『信仰叢話』）

「このように、皆さん、良い慣を作っていきましょうね」

田沼講師は、笑顔で修行者を見回した。

「さあ最後が、造^{ぞう}…適宜^{てきぎ}の事務^{じむ}です。事務と聞くと、机に向かつて書類などを処理するような事務仕事を連想される方が多いかと思います。どうです、東川さん？」

「はい、そう思っていました」

「正直ですね」

田沼がまた笑顔になった。

「事務とは“務める事”ですよ。ですから仕事、働き、職業という言葉に置きかえられるのではないでしょう。そして、適宜^{てきぎ}というのは、その場や現状にぴったり合っているということです。から、“適宜の事務”とは、神さまの目から見て、人の天職・使命である地上天国建設のために、適材適所のつとめに従事することです。

尊師さまは、『造は自分の思うままをつくること、創造すること、自己の自発的衝動のままに行くこと』とお示しになっています。この点から言うと、慣や教にとらわれずに造の生活をしているのは、赤ん坊ですよ。神さまから頂いたままの清浄無垢^{むく}な

心で思うままに生活しています。私にも一歳の孫がいますが、見てみるとそれがよくわかります。そして、その無邪気な行動を見ると、こちらも自然と嬉しくなってきます。この「赤子のころ」から発する働きの尊さは、お筆先の中にも『赤子のころになりてくたされよ』と示されています。

造は慣を作り出します。造を悪く利用すると悪い慣となり、造を良く利用すれば良い慣ができます。造を行わせる力とは、人間の本能であり、神さまから頂いた先天的な意志です。尊師さまは、『生きるために働くのじゃない。生きているから働くのだ』とお示しになっています。端的で、たいへん素晴らしい聖言ですね。

私たちはそれぞれに何らかの仕事、職業を持つて実生活を送っています。それは生きるためではないのです。私たちは、神さまによつて生かされているからこそ、頂いている天職使命…本来すべての人に共通している「地上天国建設のご神業」に奉仕させていただくために、働いているのですね。その一人一人に与えられている「ご用」に励み、ご用を通して天職を果たしていくことこそが、私たち人間に課せられた使命だと思っています」

田沼講師はそう語ったあと、一呼吸おいて話を続けた。

「聖師さまの道歌にこういうお歌があります。

一人ひとり同じ神業なしと聞く

さればうらまじ人の役目を

まさに神さまから与えられたご用というのは一人ひとり違うんだということです。ということは、この世の中に、一人として不要な人なんていない、何か神さまから与えられたお役があるということですね。

皆さん、ジグソーパズルをご存じですよ。私は辛くさくてあまり好きではないのですが、いったんやり始めると最後までやり遂げたいタイプなので、あまりしないようにしています。でも、家内は好きで、時々買ってきてやっていますよ。小さいサイズのパズルは意外と速いですね。でも、大きなサイズになると、数日かけて取り組んでいますね。ある時、一週間くらいかけてやっていたのですが、もうすぐ完成するという時になって、ワンピース足らないことがわかったんですね。欠品だったのか、途中でなくしてしまったのかわかりませんが、しばらくイライラして、えらい騒ぎでした」

田沼は、笑いながら話を続けた。

「たとえば、人の世を大きな『ジグソーパズル』と考えてみたらどうでしょう。一つひとつのピースは形も違い、書いてある絵の部分も違いますね。派手な色のピースもあれば、無地のピースもあります。じゃあ、無地のピースはなくてもよいかというところを決してそうではありませんよね。もし、そこが一つ抜けていたら、気になって気になつてしょうがないことになると思いませんか。無地のピースにも立派な役目があるのは、誰もが認める場所ですね。」

同じように、どんな人にも本来、必ず神さまから与えられた使命があり、その使命を全うするために、個々の造を全うすることが大切なのです」

田沼講師は一応の説明を終わり、少し間をおいて、正面の時計に目をやり、言葉を継いだ。

「少し時間が残っていますが、東川さん、四大綱領の内容は、理解できましたか？」
と言って、東川に声を掛けた。

東川は少し考えて言った。

「今のジグソーパズルの例え話は、わかりやすく、よく理解できました。でも先生、正直に言うと、全体的には何となくわかったような、わからないような……って感じです」

茶目っ気のあるかわいい笑顔で答えた。

「そうですか、ちょっと難しかったかもしれませんがね。では、ひとつ例え話で、もう少しお話ししてみますね」

東川は申し訳なさそうに頷いた。

表情にこそ出さなかったが、大地も心の中で、「そうそう、同じだあ。あゝ、良かった」と東川の答えにホッとした気持ちになった。

四つが関連して

田沼は一呼吸置いて、話を再開した。

「講座の最初にお話ししましたが、綱領というと、言葉自体が堅苦しく難しいように受け取られがちですね。でも、この考え方は、四つが関連性を持ち、人類が生活していく上でとても大切なあり方なのです。それを一つの事例で考えてみましょう。」

ここに、自動車を製造販売する会社が設立されたとしましょう」

……おつ、何だかおもしろくなってきたぞ。

大地はそう思った。

田沼は話を続けた。

「創業者は、多くの人たちに喜んでもらえるようにと、できるだけ安価で故障の少ない車を作ることを大目標に掲げました。そして、同じ志を持つ仲間と会社を作り、彼らが会社の役員となり、ほかのメーカーとは違う車作りの理念を語り合いました。」

しかし、当然役員だけでは車作りはできません。そこには多くの人材が必要となります。そこで社員募集をかけて優秀な社員を集めました。会社に入った社員らは、役員が定めた目標、大命題に添って真面目に勤めました。各社員はそれぞれの担当や仕

事分担のもと、持ち場ごとに積極的に仕事に取り組みました。

役員と社員、そして社員間にも互いに厚い信頼関係がありました。つまり、ま・つ・り・合・い・ができていました。この情態が「祭」であり「政」なのです。

「組織は人なり」という言葉がありますが、役員と社員間、社員同士の間に、「真釣り合ひ」がなければ、会社自体が成り立たないといってもいいのだと思います。その意味からも、会社では、まずこの「祭」「政」が一番大切だと言えるのですね」

……なるほどなあ。

「次に、設立当初の車作りの理念を役員と社員の一同が共有することが必要になります。同じ方向を向き、同じコンセプト（概念）、統一的な視点や考え方でなくてはなりませんね。つまりそれが経営者から示された方針であるわけで、これが会社の「教」になります」

東川も「なるほど」という表情で頷いている。

「次に、車を作るという目的のためには、その工程や手順がきちんと確立されていないといけませんね。それを最初に決め、それに添って各自が、自分の能力や技術を十分に發揮していかないといけません」

役員が決めたその工程や手順が、会社にとっての正確な慣^{なら}わしとなるということです。つまりこれが「慣^{かん}」に当たります。その上で、工程や手順をきちんと守って仕事をするために、社員の心構えとして、尊師さまのお示しでご説明したように、慣^{なら}わしに必要な「感恩と鍛錬と順序」が大切であることは言うまでもありません」

隣の席の丸山もしっかり頷いている。

「そして、社員一人一人が与えられた自分の持ち場で、適宜に務めるべき仕事に取り組むことですね。これがまさしく「造^{ぞう}」です。こうしてこの会社の商品である車が、製造販売されるわけですね。祭、教、慣、造が関連して流れ、その真理に添っていくことで、目的が達成されるのです。このように、四大綱領というのは、単なる理念ではなく、ごく身近なところに生きている生活に必要な原理なんですね。東川さん、わかつていただけましたか？」

田沼講師が東川に訊^{たず}ねた。

「はい、よくわかりました。ありがとうございます」

東川は笑顔で頭を下げた。大地もそれに合わせるように頷いた。

……これでスッキリして寝られるなあ。

そう思った。

修行三日目の朝を迎えた。この日は万祥殿の朝拝には行かず、高熊山と瑞泉苑に参拝する。

午前五時三十分、みろく会館ロビーに集合し、マイクロバスで高熊山へ向かう。

人数が少ないときは、乗用車やワゴン車を使うが、この日は分割での修行者もあり、マイクロバスを利用した。車内は満席にはならず、一人一人ゆったりと座った。

高熊山は、天恩郷から西へ約五^キ離れた亀岡市曾我部町にある標高三五四・九^{メートル}の霊山で、地図上では、丁塚^{ちようづか}山と記載されている。

大本の根本教典『靈界物語』の第一巻・第一章はこの高熊山の説明から始まっている。夏の明け方、大地たち修行者を乗せたマイクロバスは、亀岡市役所の前を通って、国道九号線を西に横切り、京都縦貫道の高架下をくぐって右折して、しばらく縦貫道に並行して走った。やがて左手に視界が広がり、その先にはグラウンドや体育館らしいものが見えた。

「あそこは何ですか？」

大地が運転席に向かって訊^きいた。

「あれは亀岡市の運動公園で、左が陸上競技場、右手が体育館ですね」

運転している井端雅春が答えた。今日の案内はこの井端大道場講師補が担当している。

「運動公園を左に曲がったら、穴太^{あなお}に入ります」

少し走ったところで井端がスピードを落とした。

「この左手の土塀に囲まれたところが瑞泉苑で、聖師さまのご生家があった所です。のちほど参拝します」

……ここがそうなのか。

大地は左の窓外に目をやった。

数十メートル進むと道がゆるやかに左にカーブし、さらに進むと右手には田園風景が広がり、青々とした稲が、吹き抜ける初夏の風に揺れていた。何とものどかな景色である。

しばらくすると舗装道路の途中から山道に入る。道幅が狭くなり、地面から伝わる震動が激しくなった。自ずとスピードもダウンする。山道は緩やかな上りになっているようである。

「もう少しだな」

丸山が言った。

バスが杉木立ちに囲まれた場所まで来たところで停車した。

「はい、到着しました。ここから徒歩になります」

井端がバスから降りるよう促した。

大地は真つ先に降り、辺りを見回した。続いて、東川や丸山も下車した。

全員が降りるのを待つて、井端はバスを方向転換させて止め、運転席のドアを開けて降りてきた。

「それでは出発いたします。無理なさらないよう、ゆっくりと登ってください」

「はい、よろしく願います」

丸山が力強く言った。

大道場修行の初日午後の「救世の神業」で、聖師さまの高熊山での修行の様子を聴いた。まさにこれからその現地へ登るのである。人里離れた霊山の中腹にある岩窟の前という説明から、大地は険しい山道を想像していたが、ここから見る限りでは、そんな急斜面ではないようである。

全員が静かに歩き始めた。

「やっぱり晴れましたね」

大地が丸山に言った。

「だろ」

丸山が、さも当然のような口調で答えた。

前夜、講座が終わるころに雨が降り出した。講座終了後、係の坂口が翌日の案内をした。

「あいにく雨が降りりましたが、明日の朝は高熊山へ参拝します。天気予報は、思わしくないのですが、たぶん雨はやむと思いますので……」
と笑顔で案内を続けた。

大地は「本当にやむのかなあ？」と首をかしげた。その不安を丸山に話した。

「雨宮君、絶対大丈夫だよ。大道場修行の高熊山参拝は、たとえ雨が降っていても、時間になると不思議とやんだり、その間だけ雨がおさまったりするんだよね。修行中、受講者は特に神さまのご守護をいただいている証明のようなものさ」

「そうなんですか？」

「おや、まだ疑っているのかな？」

「いや、そんなことはないんですが……」

大地はそう答えながら、まだ半信半疑であった。

ところが、今朝起きて窓を開けると、雨はすっかりやんでいた。

「丸山さんの言通りですね」

大地がちやかすように言った。

「実は、何度も修行を受講していると、明日こそ高熊山参拝は無理かなあ、と思うこともあったんだけどね。ところが、必ず参拝させていただけたんだよ。今日もそうだね。ありがたいことだなあ」

丸山は歩きながら、実感を込めて言った。

山道は昨夜の雨で湿ってはいるものの、登山に支障はなかった。大地は丸山のペースに合わせるようにゆっくり歩を進めた。

山水が流れ落ちる沢まで至った。ここから道が細く急斜面になる。一同はその手前で、沢の水をすくって手と口を清めた。

「では、ここから少し急な斜面になりますので、慌てず無理をなさらずに、ご自分の

ペースでお登りください」

そう案内して井端を先頭に登り始めた。

丸山は登り口の前で深呼吸をし、みろく会館玄関で借りてきた自然木の杖つえを手に登り始めた。大地はその後について歩いた。

しばらくすると、丸山が立ち止まり、大地の方に振り返った。

「丸山さん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。ただど亀のようにゆっくりだから、雨宮君、先に行つて」

「いいえ、お供しますよ」

「いや、ほかの人も遅くなるし、先に上がってくれた方がいいなあ」

大地は少し考えて言った。

「わかりました。では、先に行きます」

そう言つて大地は丸山を抜き、自分のペースで登り始めた。

次第に右手の視界が開けてきた。

「気持ちいいなあ」

雨後の松葉が風に揺れ、辺りが何だか輝いて見えた。額にジワリと汗がにじんできたが、大地はいつになく、爽快感な気分になっていた。

靈山・高熊山

「もう少しですから、がんばってください」先頭を登る井端が、あとを振り返り声をかけた。大地はその言葉を聞いて、急坂を踏みしめる足に力を入れた。

岩窟^{くわ}まで間もなくというところで、井端が参道から左脇へそれて、また声を発した。「すみませんが、お若い方、向こうの倉庫からゴザなどを運びますので、お手伝いください」

井端の先に小さな倉庫が立っていた。

……僕も該当者だな。

大地は足早に倉庫の方へ進んだ。井端は扉のカギを開け、中からぼんぼり一對、三宝ゴザを数枚取り出して、大地たちに手渡した。それらを五人で手分けして持ち、順に岩窟前に向かった。大地はゴザを一巻き抱えて参道に戻った。ちょうどそこへ丸山が登って来た。

「丸山さん、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫！ 何か手伝おうか？」

「いえ、もう必要な物は手分けして持ちましたので大丈夫です」

「そうか、じゃあ、この重たい体をしっかり運ぶとしますか」

「それがいいですね」

大地は笑顔でそう返し、先へ進んだ。

ほどなく視界が開けた。左手には少し広くなった場所があり、直進すると下り坂になっている。その先に威厳のある岩窟が顕立していた。

……ここかあ。

出口王仁三郎聖師が一週間の修行を行った霊場がそこにあった。大地は、岩窟一帯が醸し出す空気感にすがすがしさをおぼえた。

立ち止まっていた大地に丸山が後ろから声をかけてきた。

「最近手入れが行き届いてすっきりして、周囲が明るくなったなあ」

「そうなんですか？」

「下の山道もそうだけど、私が最初に来たころは、木々がもつとうっそうとして本当に“暗い山中”っていう感じだったんだよ。最近、杉の枝打ちや松の手入れもされているし、参道も整備されて歩きやすくなっていて、ありがたいことだよ。ただ、年齢とともに、だんだんと登るのがきつくなってきたけどね」

丸山はそう言って、大地の肩をたたき、先へ進むように促した。大地は丸山のあとについて岩窟前に下りた。

先に着いていた井端や東川らが、八足の上にぼんぼりと三宝を置き、岩窟前の平坦な場所を選んで、ゴザを敷いていた。

「雨宮さん、ここへ敷いてもらえますか」

井端の声に、大地は持っていたゴザを指示された場所に広げた。

「ありがとうございます」

礼を言ってから、井端はぼんぼりの中のロウソクに灯り^{あか}をともし、火打ち石で切り火をした。

「皆さん、お揃い^{そろ}ですね」

井端が確認した。

「はい、しんがりの私がいますので、全員おります」

丸山の発言に、みんなが笑った。

「お玉串をお供えされる方は、お預かりします」

「あつ、そうだった」

大地はシヨルダーバッグから準備していた玉串を取り出し、井端に渡した。

「はい、ありがとうございます」

井端は玉串をそろえて三宝に乗せ、切り火で清めて供えた。

続いて一同が敷物の上に座ってから、井端は高熊山についての説明を始めた。

「皆さまの目の前に立っているのが、聖師さまがご修行になられた霊山・高熊山の岩窟です。ちょうどこのあたりで…」

井端は八足が置かれている辺りを指しながら、話を続けた。

「聖師さまは、木の花咲耶姫命の天使、松岡芙蓉仙人に導かれ、明治三十一年の旧二月九日から一週間の修行をなさいました。旧暦の二月初めですから、まさに厳寒の中、服装は襦袢一枚です。」

今でいったら寒空にTシャツ、短パンという薄着ですね。

そんな姿で米一粒も食されず、水一杯も飲まれることなく七日間ここに端座され、現実の世界と神界とを行き来されながら修行なさったわけです。その結果、聖師さまの灵力発達の程度はたいへんに迅速であったそうです。その進歩のスピードは、幼稚園児がいきなり大学を卒業して、博士の地位にまで進んだようだった、ということだ

すから、恐ろしい速さですね。

そうして、過去のことはもちろん、数千年先の未来のことまで知ることができたというのです。その上で神さまから人類救済の教えを授けられ、ご自身の救世の天命を自覚されました。

そして修行で見聞されたことを後に口述筆記されたのが、大本の根本教典の一つ『靈界物語』です。ですから、ここはまさに救いの教えの発源地といえます。その当時、聖師さまは数え年の二十八歳でした。ですから、ちょうど雨宮さんくらいでしょうかね」井端が大地に向かつてそう訊ねた。

「はい、私が今二十八歳です」

大地が答えた。

「じゃあ、雨宮さんより聖師さまが一歳お若い時になりますね」

「そうなんです」

「どうです雨宮さん。今は真夏ですが、雪が舞う真冬のさむい夜に、Tシャツ姿で一週間、飲まず食わずでここに座っていられますか？」

井端が大地に投げかけた。

「いや、とんでもないです。私、恐いのは苦手ですから…」

大地が首を左右に振りながら答えた。

「そうですね。私もできません。しかし聖師さまは、神さまが命じられたままにその修行をなさいました。聖師さまは上田家という極貧の家庭に誕生され、ご幼少のころから社会のあらゆる辛酸を嘗めつくされていきましたから、一週間の現界的修行は、私たちが思うほどではなかったのかもしれない。それでもやはりこの山中ですから、たいへん心細い思いをされたようです。

ところが、そうした現界の修行よりも、神界の修行の方が何十倍も苦しかったとおっしゃっています。その様子を記されたのが『靈界物語』第一巻の冒頭にあります。

では、天津祝詞奏上のあと、その部分の拝読を聞いていただきながら、鎮魂をさせていただきますと思います。

それから、天津祝詞の後のご神号奉称は、『おほもと すめ おほみ かみ大天主太神守りたまへ幸はへたまへ』
に続いて、『みずの みたまの おほ瑞靈大神守りたまへ幸はへたまへ』ですので、よろしく願います」

説明し終わり、井端の先達のもと、一同で天津祝詞を奏上した。

「では、鎮魂をいたします。皆さま、鎮魂の姿勢をおとりください」

大地は姿勢を正して座り直した。畳の上と違い、デコボコした地面は正座しにくい、それとも良い体験である。手を組み、静かに目を閉じた。「修行の心得」で教えてもらったように、肩の力を抜き、噛みしめていたアゴの力をゆるめてリラックスするように努めた。

その時、大地らを祓い清めるかのように、一陣の風が吹き抜けていった。

……あゝ、爽やかだなあ。

大地はそう思いながら、深く息を吸った。

井端は、全員が鎮魂の姿勢をとったことを確認して、二拍手ののち、『靈界物語』の拝読を始めた。

本来なら、第一巻の第一章から順に四章まで拝読するのが順当であるが、この日は年配の修行者もあり、いつもより登拝に時間がかかってしまった。下山後と帰苑後のスケジュールにも配慮し、井端は第三章から拝読することにした。

「靈界物語、靈主体従、子の巻、第三章、現界の苦行。

高熊山の修行は一時間神界の修行を命せられると、現界は二時間の比例で修行をさ

せられた。しかし二時間の現界の修行より、一時間の神界の修行の方が数十倍も苦しかった。現界の修行といつては寒天に襦袢一枚となつて、前後一週間水一杯飲まず、一食もせず、岩の上に静坐して無言でおつたことである。その間には降雨もあり、寒風も吹ききたり、夜中になつても狐狸の声も聞かず、虫の音も無く、ときどき山も崩れんばかりの怪音や、なんとも言えぬ厭らしい身の毛の震慄する怪声が耳朶を打つ。寂しいとも、恐ろしいとも、なんとも形容のできぬ光景であつた。……たとえ狐でも、狸でも、虎狼でもかまわぬ。生ある動物がでてきて生きた声を聞かして欲しい。その姿なりと、生物であつたら一眼見たいものだ、と、憧憬するようになつた」

……これはさつき説明してもらつたことだなあ。なるほどすごいことだなあ。
大地は心の中でつぶやいていた。

「ア、生物ぐらい人の力になるものはない……と思つていると、かたわらの小篠の中からガサガサと足音をさして、黒い影の動物が自分の静坐する一尺ほど前までやつてきた。夜眼には確かにそれと分りかねるが、非常に大きな熊のようであつた。

この山の主は巨大な熊であるということを、常に古老から聞かされておつた。そして夜中に人を見つけたが最後、その巨熊が八つ裂きにして、松の枝に懸けてゆくとい

うことを聞いていた。自分は今夜こそこの巨熊に引き裂かれて死ぬのかも知れないと、その瞬間に心臓の血を踊らした。

ままよ何事も惟神かんながらに一任するに如かず…と、心を臍下丹田せいかたんてんに落ち着けた。サアそう
なると恐ろしいと思つた巨熊の姿が大変な力となり、その呻声うなりごえが恋しく懐かしくなつた。世界一切の生物に、仁慈の神の生魂いけたまが宿りたまうということが、適切に感じられたのである」

と、この一節を聞いた大地は、心の中で「あれっ？」と首を傾けた。

冬の熊

「確か聖師さまは、真冬に修行されたんだったよなあ。んゝ、どうしてその季節に熊が出てくるんだろう？」

大地は不思議に思った。しかし、すぐに、
「まつ、いいか。あとで丸山さんに訊いてみよ」

大地はそう思い直して、鎮魂を続けた。

井端は、しつとりとした聞きやすい声で、淡々と拝読を続けた。

「第四章、現実的苦行。つぎに自分の第一に有り難く感じたのは水である。一週間というものは、水一滴口に入れることもできず、咽喉は時々刻々に渴きだし、何とも言えぬ苦痛であった。たとえ泥水でもいい、水気のあるものが欲しい。木の葉でも噛んでみたら、少々くらい水は含んでおるであろうが、それも一週間は神界から飲食一切を禁止されておるので、手近にある木の葉一枚さえも、口に入れるというわけにはゆかない。その上時々刻々に空腹を感じ、気力は次第に衰えてくる。されど神の御許しがないので、お土の一片も口にすることはできぬ。膝は崎嶇たる巖上に静坐せることとて、これくらい痛くて苦しいことはない。寒風は肌身を切るようであった」

聖師さまは、この高熊山の修行を通して、天地の大恩^{だいおん}を悟^{さと}られている。そして、この『靈界物語』第一巻第四章で、そのことを明示されている。次の一節には、お水のご恩を自覚される貴重な体験が綴^{つづ}られている。

「自分がふと空をあおぐ途端に、松の露^{つゆ}がポトポトと雨後の風に揺られて、自分の唇^{くちびる}辺に落ちかかった。何心なくこれを嘗^なめた。ただ一滴の松葉の露のその味は、甘露^{かんろ}とも何ともたとえられぬおいしさであった。

これを考えてみても、結構な水を火にかけ湯に沸かして温^{ぬる}い^{ぬる}の熱いのと、小言を言っているくらいもつたいないことはない。

草木の葉一枚でも、神様の御許しが必要^{いまだ}なければ戴^{いた}くことはできず、衣服は何ほど持つておつても神様の御許しなき以上は着ることもできず、あたかも餓鬼^{がき}道^{どう}の修業であつた」

さらに聖師さまは、高熊山の修行のおかげで、衣食住の大恩を悟つたと明言されている。

「贅沢^{ぜいたく}なぞは夢にも思わず、どんな苦難^あに逢うも驚かず悲しまず、いかなる反対や

熱罵嘲笑ねつばちようしやうもただもつたいたい、有り難い有り難いで、平気で社会たいげんに泰然じじやく自若、感謝のみの生活を楽しむことができるようになったのも、全く修行の御利益おかげである」

聖師さまは、この高熊山の修行以降、感謝のみの生活を楽しまれたというのである。

……すごいな！。

大地はそのスケールの大きさに驚いた。そして次の一節は、大地がそれまで思ってもみなかった考え方であつた。

「それについて今一つ衣食住よりも、人間にとって尊く、有り難いものは空気である。飲食物は十日や二十日くらい廃したところで死ぬような事はめつたにないが、空気はただの二、三分間でも呼吸せなかつたならば、ただちに死んでしまうより途みちはない。自分がこの修行中にも空気を呼吸することだけは許されたのは、神様の無限の仁慈であると思つた。

人は衣食住の大恩を知ると同時に、空気の御恩を感謝せなくてはならない」

……は、なるほど。

大地は心の中で唸うなつた。

……確かにそうだ！ 当たり前すぎて、一番ありがたいことに、今までまったく気

付いてなかったなあ。

大地は、衝撃にも似た感動を憶^{おぼ}えていた。

しかし、続く箇所から、そうしたことは修行のほんの一部のことであつた、と述べておられることを知り、大地はさらに驚いた。

「しかし以上述べたところは、自分が高熊山における修行の、現界的すなわち肉体上における神示の修行である。霊界における神示の修行は、とうてい前述のごとき軽い容易なものではなかつた。幾十倍とも幾百倍ともしれぬ大苦難的修練であつた」

……霊界における神示の修行つて、いったいどんなものだつたんだろう。

大地には想像もできないことであつた。

井端は、一呼吸おいて、章末の道歌をゆつくりと詠んだ。

朝日さす高熊山に来て見れば

世を警^{いまし}むる松かぜの音

拝読を終わり、井端は『霊界物語』を閉じ、膝の上に置いた。そして、鎮魂の姿勢をとっている修行者の様子を確認してから自らもあらためて呼吸を整え、手を組み半眼^{はんがん}になり、しばらく間を置いた。

静かな時間が流れた。

大地は拝読の間、いろいろなことを考えてしまったことを反省しつつ、今の静寂の空間に身をまかせた。

すると、下腹がポツと温かくなるような感じがして、何とも言えない心地良い気分になった。

しばらくして、二拍手の音が響いた。

「はい、鎮魂を終わります」

大地は目を開け、組んでいた手をほどいた。

「ありがとうございます。ではこれから下山して、瑞泉苑へ向かいます。すみませんが、お若い方には、片付けをお手伝いください」

井端が呼びかけた。そして、丸山たち年配組には、先に下りるよう促した。大地たち若者は、自分が持ってきたゴザや道具類を途中の倉庫まで運んだ。

「これで最後です」

大地が井端にゴザを手渡した。

「はい、ありがとう」

井端は慣れた手つきでゴザをしまうと、扉を閉めて施錠した。

「さあ雨宮君、下りましょう」

「はい」

大地は井端の前を歩いた。しばらくして、井端が声を掛けてきた。

「初めての岩窟前での鎮魂はどうでしたか？」

「とっても気持ちよかったですね」

「そう、よかった」

「それから、聖師さまが『空気の恩』のことをお示しになっているじゃないですか。あれはすごいことですね。僕は今まで考えたこともなかったです」

「そうだね。まあ、一億二千万の日本人の中で、空気の恩を考えて生きている人なんて、そうそういないだろうけどね。正直、私も、普段は忘れてしまっているしね。でも、せめてこうしてご神書をいただいた時には、あらためて天地のご恩、空気のご恩、衣食住のご恩に思いを馳^はせることも大切だと思うよね」

「はい、確かにそうですね」

大地と井端は前後で会話を交わしながら、細い参道を下りていった。

登り口まで戻り、沢の小橋を並んで渡っている時、大地が思い出したように井端に訊ねた。

「そうそう井端さん、今日の拝読の中で、ちょっと不思議に思ったことがあったんですけど…」

「さて、なんだろう？」

「聖師さまが生き物の大切さを示しておられるところで、修行中の聖師さまの近くに大熊が出てくる場面です」

「その場面の何が不思議だったの？」

「聖師さまが修行されたのは、真冬ですよ。普通冬場、熊は冬眠しているんじゃないですか？　ましてや今から百二十年近く前の山中ですから、寒中に出て来る熊はないと思ったもので…」

「あ、ははは」

井端は大きな声で笑った。

「何かおかしいですか？」

大地が訊いた。

「いや、そうじゃないんだ。実は、私も若い頃、同じようなことを先輩に質問したことがあったんでね」

「えー、そうなんですか？」

「けっこう理屈屋だったんで、私も単純に考えたらおかしいんじゃないかと思ったんだよ」

「ですよ。で、どうだったんですか？」

大地がたたみかけるように訊いた。

「ところが、生物学的にはありうるらしいね。まれに冬眠しない熊、冬眠に失敗した熊もいて、冬場に起きて出歩くこともあるらしいね」

「そうなんですか？ 知らなかった！」

「冬眠といっても、熊は普通に寝ているだけで、カエルやヘビみたいに完全に動けなくなっているわけじゃないそうだよ」

「そうですか。勉強になりました」

大地は納得した。

「いや雨宮君、これだけで終わってしまつては、普通の答えでおもしろくないだろ」

「えつ、まだ何かあるんですか？」

「実は『靈界物語』では、ほかにも冬場に熊が出て来るシーンがあるんだよ。しかもたくさん！」

「そうなんですか？」

大地が興味津々な表情で訊き返した。

前方に目をやると、丸山ら年配組がゆつくりと歩いていた。井端と大地は歩くスピードを少しゆるめた。

井端は歩きながら大地の方を見て、解説を続けた。

『『靈界物語』第二十巻の第一章、^{たけし}武志の宮^{ひと}という章。舞台は亀岡の北の方、今の京都府南丹市にある^お人の尾峠^{とうげ}という山中。天の真浦^{あめまうら}という宣伝使が、^{うづ}宇都の郷^{さと}へ初宣伝に向かう途中、その峠で滝のように降り積もる大雪に進路を妨げられる、というシーンがあるんだ」

「はい」

「日は暮れてくる。雪はみるみるうちに膝くらいまで積もって、進退これきわまる。天の真浦は、佇立したまま天津祝詞を何回も奏上したんだね。するとその時に、数十頭の熊の群れが、山上から真浦の方に向かって、勢いよく駆け下りてきたんだ」

「え、数十頭ということは、四、五十頭ですよ。常識では考えられない光景ですね。で、どうなったんですか？」

大地は、目を輝かせた。

神の化身

「そうだよ。夕闇迫る大雪の山中で、熊の大群が自分の方へ向かって走ってきたら、そりゃあ恐いだろうね」

「ですよ」

大地が頷いた。

「実は一度、私もある山の中で、瓜坊うりぼう（イノシシの子供）に出くわしたことがあったんだよ。細い山道を歩いていたら、いきなり山手の斜面の上から目の前に落ちてきて、私の方に突進してきたんだ。私はてつきり岩が転がってきたと思ったので、それがいきなり動いて走ってきたものだから、もうビックリ！ だから熊が、しかも四、五十頭も突進してきたら、そりゃあ普通だったら腰を抜かすかもね」

「四、五十頭といったら、クマ牧場なみですよ」

「でもそこはさすがの宣伝使。冷静に路を避けて熊をやり過ごすんだ。すると、天の真浦まうらが向かっていった方角へ走り去っていったんだね。見るとそのあとには、立派な通路が開かれていて、真浦は迷うことなく熊が踏みしめて作った雪道を前へ進むことができたんだね」

「すごいですね」

「そして天の真浦の宣伝使は、これもまったく神さまのご神徳であろう、ありがたし、ありがたし」と感謝しながら歩いていったということなんだ」

「じゃあ、熊は神さまだったということですか？」

「そうだね、まあ、神さまの化身か、神さまのお使いだったんだろうね」

「なるほど、そういうことですか」

大地が頷いた。

「それから熊に関してもう一つ」

井端が言葉を継いだ。

「ぐま には、二通りの解釈があつて、一つは *ぐま* の *ぐま* という解釈があるんだ」

「悪魔ですか？」

「そう悪魔。今から二千七百年ほど前、初代の神武天皇がまだ即位される以前のことだけど、九州の日向から、葦原中津国、つまり日本を統治するために、東の国を治めに行かれる、いわゆる神武東征という歴史があるんだけどね。雨宮君、知ってる？」

「聞いたことはありませんが、あまり詳しくは知りません」

「そうか。簡単に言うと、神武天皇は最終的には、大和やまとの地、今の奈良県橿原かしはら市の橿原の宮で、初代天皇として即位されるんだけど、その前に紀伊半島を東に回って、和歌山の熊野から大和に向かおうとされたんだね。そして熊野まで来た時に、大熊に襲われるんだ」

「大熊に」

「その時は、授かった一振りの太刀で難を逃れたんだけど、その大熊のことを、聖師さまは、『この熊というのは本当の熊ではなく、悪魔ということ』で、『悪魔が憑かかった』という意味だと書いておられるんだね」

「そうなんですか」

大地が言った。

「それからもう一つの解釈では、くまくま（隈・曲・阿）というのは、もともと、奥まっくまて隠れたところ、秘めているところ、隠しているところ、という意味があるんだね。くまくまはくまくましねしね（奠稻）という言葉と同じ意味で、くまくましねしねは、神仏に奉る洗い清めた米、大本でいうお洗米と同じ意味だそうだ」

「くましね、つて初めて聞きました」

「そうだろうね。普通一般ではあまり聞かない言葉だもんね」

「はい」

「そう考えると、たとえば『蟻ありの熊野くまの詣もうで』といわれるほど人々の崇敬を集めている和歌山の『熊野』という地名は、意味が深いなあ、つて思うんだよ」

「なるほど」

「そうして考えてみると、実際『くま』のつく地名がいくつか思いつくんだ……。さっきの和歌山県の熊野、ほかに熊本、大熊、熊谷、それから千曲川ちくまがわとかね」

「けっこうあるもんですね。でも井端きよくさん、千曲川は動物の熊じゃないですけど…」

「そう、千曲川の『くま』は、曲きょくという漢字だけでも、曲もクマと読むし、それから阿蘇山の阿もクマと読むんだね。この曲や阿の意味は、『山や川の曲がって入り込んでいる所』という意味があるそうだよ」

「なるほど、だから千曲川かあ」

「雨宮君の地元の川じゃないかな」

井端は、大地の名札を見て言った。

「そうです。長野県民は千曲川と呼んでいます。新潟県に入ると信濃川となって日本

海に注いでいて、全長だと日本でいちばん長い川ですね」

「それはそうと、今日拝読した『靈界物語』の中で出てくる大熊のことだけど…」

井端が話をもどした。

「はい」

「物語では、夜眼には確かにそれと分りかねるが、非常に大きな熊のようであつた。つて書いてあつて、決して「大きな熊であつた」、と断定的には書いてないんだね」

「えつ、そうでしたか？」

大地が訊き返した。

「そうなんだよ」

「ということは、聖師さまは、その熊の姿を見てはおられなかったんですか」

「そうだね。一読すると、聖師さまが大熊に対面されたと思つてしまうんだけど、そう断言されてはいないんだね。聖師さまは、すぐく表現を考えておられるんだと、私は思っているんだよ」

「なるほど、そうなんですな。ということは、やはり神さまのお使いだったということですね」

「いや、そうとも書いておられないので、私たちがそこをどう解釈するかだけど、私自身は、神さまの化身だと考えてもいいのだろうと思っっているけどね」

「わかりました。いろいろとありがとうございます」

大地は頭を下げた。

「でも、うれしいよ。私と同じ疑問を持った若者が現れてくれて」

「そうですか」

二人は笑顔で打ち解け、坂道を下った。

丸山ら先に歩いていた修行者は、マイクロバスのところまでたどりついた。少し遅れて最後尾を下ってきた井端と大地が追いついた。

「お待たせしました。では、ご乗車ください」

そう言いながら、井端はマイクロバスに乗り込み、運転席のスイッチを入れ、ドアを開けた。続いて全員がバスに乗り込み、出発。瑞泉苑へ向かった。

「丸山さん、大丈夫でしたか？」

大地が丸山に声をかけた。

「はい、この通り大丈夫！　今回も無事に登らせていただけて、ありがたいことだったよ」

「良かったですね」

大地は丸山をいたわるように言った。

マイクロバスは山裾^{すそ}を抜け、左手に穴太の青々とした田園風景を見ながらゆっくり走っていく。大地は運転している井端に話しかけた。

「きれいですね」

「そろそろ穂が出るころかな」

「今ごろ穂が出るんですか？」

「品種によっても違うんだけど、この辺りはちょうど今ごろだと思うよ」

「そうなんですか」

「雨宮君は稲の花を見たことある？」

「稲の花ですか？　いや、見たことないです、っていうか、稲って花が咲くんですね。どんな花ですか？」

「小さな、かわいい白い花なんだよ」

「へえ、見てみたいなあ」

「これがタイミングが合わないと、なかなか見られないんだよ」

「えっ、どうしてですか？」

「亀岡だったら、今の時期に、茎の中から若い穂が出てくるんだ。『出る穂』と書いて出穂しゅつすい、というんだけど、出穂は一日で終わるんだね。そして、穂が開いて、穂の先の方から稲の花が咲き始めるんだよ」

「じゃあ、花は一日だけしか見られないということですか？」

「いやいや、もっと短いよ。だいたい二、三時間程度らしいね」

「え、そんなに短いんですか？」

「花びらのない、おしべとめしべだけの花でね、その二、三時間の間に受粉を終えて、受精が終わると閉じてしまつて、もう開くことはないんだよ」

「そうなんですか。じゃあ、その二、三時間の間に見ないと、稲の花は見られないということですね」

「一枚の田んぼで一斉に咲くわけじゃないし、稲の株によって成長の度合いが違うから、しばらくの間……、そうだなあ、一枚の田んぼで一週間くらいは見る事ができるかな」

「なるほど」

「出穂はおおかた午前中だから、ひよつとすると、今、その田んぼに行ったら、見られるかもしれないけどね」

「神秘的ですね」

「不思議な自然の営みが、今、目の前で繰り広げられているということだね」

「それなら、なおさら見てみたいなあ」

大地が言った。

「雨宮君、ごめん。あおっておいて申し訳ないけど、今日は時間がないので、このまま瑞泉苑に行きます」

井端が言った。

「はい、わかりました。またの機会に……」

大地は残念そうに返事をした。

ほどなくして、井端はマイクロバスを瑞泉苑の敷地内に乗り入れ、ドアを開けた。

「はい、到着しました。では、奥の礼拝所の方へお進みください。ご一緒にお参りさ

せていただきます」

大地たち修行者一同は順にバスを降り、苑内の礼拝所へ進んだ。

瑞泉苑

玉砂利が敷かれた広場の北側、玉石で包まれた盛り土の中央に、ご神体の神籬松ひもろぎまつが伸びている。その手前の銅板屋根の下に、一段高くなった三和土たつきがあり、そこに八足はつそくが設しつえてある。

修行者一同は、その前まで進んで整然と並んだ。

「皆さんお揃そろいですか？」

井端が言った。

「丸山さんたちがまだです」

大地が応えた。

「まだお手洗いでしたか？ では、ちょっとお待ちくださいね」

井端が優しく呼びかけた。

礼拝所の右手の桜やカヤの大木をはじめ、ツバキやヤマブキなど、瑞泉苑ずいせんえんにはさまざまな樹木や草木が植えられている。今、それを一時の宿として、アブラゼミの大合唱が響いている。典型的な夏の風物詩である。

「お待ちせしました」

丸山ら三人が急ぎ足でやってきた。

「以前とは違って、きれいな東司棟とうすどうになりましたなあ」

丸山が言った。

「はい、そうですね」

井端が答えた。

「どうすとう？」

大地が首をかしげた。

「聞き慣れない言葉だよ。東の司の棟と書くんだけど、トイレのことなんだよ」

「へえ、トイレのことなんですか。初めて聞きました」

「そうだよ。一般ではあまり使わない言葉だね。もともとは禅寺での便所の通称で、

東司は、便所の守護神のことだという説もあるらしいね。少し前に流行はやった「トイレ

の神様」かもね」

「じゃあ、それはそれはキレイな女神様」のことですね」

「そうかもね。トイレ、廁かわやの神さまのことも大本ではちゃんと説かれているけど、今

は時間がないので、またあとで話しますね」

井端はそう言つて笑顔になり、目線をほかの修行者の方へ向けた。

「はい、皆さま、ここが聖師さまのご生家跡である瑞泉苑です。最初に、正面の神籬松に向かつて、天津祝詞を奏上させていただきます。ご神号は高熊山と同じで、
大^{おほもと}天主^{すめ}太^{おほみ}神^{かみ}守りたまへ幸はへたまへ」の後に、
瑞^{みず}之^{のみ}御^{たま}霊^{まの}大^{おほ}神^{かみ}守りたまへ幸はへたまへ」です。ではよろしくお願いいたします」

井端はゆつくりと修行者の前に進み、先達を務めた。

終わつて四拍手。井端が元の場所まで復座し、揖^{ゆづ}。修行者の方へ向き直つた。

「ありがとうございました」

井端は丁寧にお辞儀をしてから、少し間を置き、説明を始めた。

「さきほども申し上げましたように、この土塀に囲まれた敷地が『瑞泉苑』といつて、聖師さま、つまり上田喜三郎という『神童』と呼ばれた少年が生まれた場所です。皆さんの右手にある井戸が、聖師さまの産湯に使われた『玉の井』という井戸です。今も清水がこんこんと湧いています。

そして、明確な範囲はありませんが、大本では、この瑞泉苑を中心とした穴^{あな}太^おの里

一帯を“瑞泉郷”と呼んでいます」

……なるほど、その違いがあるのか。

大地は納得したように頷いた。

「さて、喜三郎少年の出生に関しては、修行初日の“救世の神業”の講座の中で詳しくお聞きになったことかと思えますし、神苑案内の時に、懐古歌碑のところでも、歌碑に刻まれたお歌から、聖師さまの幼少期の上田家の様子を学ばれたと思います。

寝ながらに月を仰ぎしあばら家の

むかしの住居吾眼に新し

と詠まれているように、聖師さまが子どもの頃には、夜、仰向けに床につきながら月を見ることができたというのですね。つまり家の天井に穴が空いている状態だったわけです。それほど貧しい生活の中にあつたという、ある意味とてもシヨッキングなお歌です。そしてこちらをご覧ください」

そう言って、井端は前に進み、修行者を左側に立つ歌碑の前まで誘導した。

「ここには聖師さまの青年期のお歌が刻まれています。

西は半国はんごく 東は愛宕あたご

南妙見みょうけん 北帝釈たいしやくの
青山屏風びやうぶを引廻まはし

中の穴太で牛を飼ふ

東西南北にある山を詠み、亀岡盆地の中にあるこの穴太の里で、牛を飼っておられた当時のことを詠っておられます。聖師さまは二十代の時、数々の事業を手がけておられました。ある時期にはこの近くで「穴太精乳館」という牧畜搾乳販売業、簡単に言うと「牛乳屋」をされていました。その青年時代を懐古されて詠まれたお歌です」

井端はさらに説明を続けた。

「その次のお歌は、

父よ恋しと西山見れば

山は狭霧さぎりに包まれて

墓標ぼひょうの松も雲うがくれ

晴そでるるひまなき袖の雨

喜三郎青年が二十七歳の時、慕つてやまなかつた大切な人、父・吉松さんが、半年の看護のかいもなく、五十四歳の若さで亡くなりました。喜三郎青年の落胆ぶりは、はた目にも痛ましかつたそうです。お父さんは喜三郎青年にとって、師匠でもあり、友でもあつた。その愛する父親が死んでしまったため、心にポツカリと大きな穴があいてしまい、一種の虚脱状態になられたそうです。亡くなつた父を思う、そんな当時の心境を詠まれた、とても哀愁深いお歌だと思います」

井端は気持ちを込めて説明した。修行者の中には、説明を聞きながら、目を赤らめて聞いている年配の女性もいて、その姿を見て、大地も心にグツとくるものがあつた。

「皆さん、この碑石をよく見てください」

井端が促した。

「横に穴が空いていたり、刻んだような跡があつたり、少しいびつな感じがしませんか？」

「そう言えばそうですね」

大地がのぞき込むようにして言った。

「実は昭和十年の第二次大本事件前には、ここに玉水殿という建物と、もつと横長で大きな“神聖歌碑”が立っていたのですが、事件で破壊されました。そのときに割られ、壊されていた碑石の一つを使つて、この歌碑が建てられたわけです」

……この碑石にも、そんな深い歴史があるのか。

大地は感心するように何度も頷いた。

「私はここに來させていただくと、いつも思うことがあります。それは“大本讃美歌”の中の一節です。

喜び胸にみちあふれ

あまつみかみ
天津御神の一人子を

ばさう
馬槽に近づきをがみたる

人のごとくにわれわれも

みつみたま
瑞の御魂の更生主

仰がせたまへと願ねぎまつる

第三十一の二ですが、これは、キリストは馬小屋で生まれたという説がありますから、キリストの聖誕の場所へ喜び勇んで拝みに来た人々のように、私たちも瑞ずいれい霊、救いの神である聖師さまを仰がせ給え、という意味だと思っています。

実際、キリストの聖誕地とされている中東イスラエルの南にあるベツレヘムには、キリストが生まれたとされる場所に聖誕教会があり、毎日世界各地から多くの巡礼者がやってきます。私もだいぶ前ですが、一度行ったことがあります。その時も、本当に多くの人たちがひっきりなしに訪れていました。

キリストは救世主でしたが、聖師さまも救世主です。ですから、時代が進むと、きつとここにも毎日たくさんの人たちがお参りに来るんじゃないかと思っています。まあ今は、キリストが生まれて二千年以上たっていますが、聖師さまはまだお生まれになってから百五十年弱ですから、もう少し先のことだと思えますがね。あつ、これはあくまでも、期待を込めた私の個人的な思いですので……」

井端が笑顔で言った。

「なるほど、それはそうかもしれませんね。私も賛同します」
丸山が力強く言って、みんなの笑いを誘った。

「ありがとうございます。では、あちらにご移動ください」

そう言つて井端は、修行者を南側の方へ案内した。そこには、堀のような池があり、小さな橋が架かっている。井端は橋の上から池を見ながら説明を始めた。

「これが久兵衛池きゆうべえいけです。上田家の先祖が灌漑かんがい用に築いたものです。講座の中で紹介があつたかと思いますが、聖師さまの少年時代の代表的な出来事、“久兵衛池事件”の舞台です。

当時上田家としては、田畑も少なくなつていてあまり用はなく、第一、子どもがはまつてしまうこともたびたびあり、危険でした。そこで、父・吉松はこの池を埋めようとしたのです。ところが、この池から水を田に引いている村の連中が結束して反対運動を始め、吉松を圧迫しようとしたんですね。

それを知つた喜三郎少年は、村の連中と命がけで闘うことを決心しました。そしてこの事件は、村を挙げての大騒動と発展していったのですね。結局、村人らは喜三郎少年の勢いに折れて、村が上田家に借料の玄米を払うことで、一件落着となりました。でも、村人らには“敗戦”の感情が残り、それ以降も上田家に対する村人らの差別は強くなつていったそうです。

喜三郎少年は、米欲しさではなく、地主や有力者が権力を盾に小作人をいじめようとしたことに、一人で立ち向かったわけです。聖師さまはこの事件を通じて、ますます社会批判の精神を強くしていられました。その反骨精神が、やがて“世直し”の思いにもつながっていったのではないのでしょうか」

井端は言葉をかみしめるように語った。

舌の剣

「さて、個人的にはここでもう少しゆっくりしたいところですが、皆さんの朝食の間がありますので、この辺で天恩郷に戻りたいと思います」

そう言つて井端は修行者をマイクロバスへ案内した。

丸山たちは名残惜しそうに、橋の上まで行つて、もう一度久兵衛池きゆうべえをのぞき込んでいた。

「丸山さん、行きましょう」

大地が丸山に声を掛けた。丸山は無言で片手を上げて、了解の意を伝えた。

最後の一人が乗車口に入るのを確認して、井端も運転席に乗り込んだ。

「では出発します」

「お願いしまゝす」

例によつて丸山が大きな声で答えた。

「途中、ちよつと回り道をして穴太寺の前を通ります」

そう言つと井端はゆっくりバスを発車させ、ハンドルを握りながら説明を続けた。

「初日の『救世の神業』の講座でお聞きになったかと思いますが、喜三郎少年は漆^{うるし}灸^{きゆう}の災難から体一面かぶれて腫^はれ上がり、三年遅れて満九歳の春にようやく小学校に入学しました。でもその三年の間に、祖母の宇能^{うの}さんから、豊富な知識を教え込まれたことと、潜在的才能から、めきめきと学力を伸ばし、すぐに進級していききました。当時の小学校は実力さえつければ、どんどん進級できるシステムになっていたんですね。

そのころ、担任の先生が、大岡越前守^{おおおかえちぜんのかみ}忠相^{ただすけ}を「タダアイ」と間違つて読み、それを喜三郎少年が指摘したことから、先生との間に大きな確執ができてしまいました。それが高じて、先生からいじめまで受ける破目になりました。喜三郎少年も反撃に出たのですが、ついに校長も知ることとなり、校内の大問題になりました。この一連の騒動が「タダアイ事件」と呼ばれています。結局はケンカ両成敗で、二人とも学校を去るのですが、ほどなく喜三郎少年は、代用教員として復帰します。

学校をクビになった担任の代用として喜三郎少年を採用したわけですから、英断を下した校長先生は、大岡越前並みの「名さばき」だと、私は思っています。

さあ、当時偕行^{かいこう}小学校といったその建物^{たてもの}が、左手に見える穴太寺の中に、今もあります。本堂に向かって右にある念仏堂がそれなんです」

井端は、マイクロバスの左前方に見える西国二十一番札所・穴太寺を指さした。

大地も窓外に目をやった。お寺の土塀の中の木の間に、ちらつと多宝塔の水煙が見えた。

ほどなくバスが穴太寺正面まで進むと、井端はスピードを極端にゆるめた。

「ここが正面の入口・仁王門で、奥の正面が本堂です。で、少し前に行きますと、右横にお堂が見えてきますので、よくご覧ください」

そう言つて井端はゆつくりとバスを前へ進めた。

「ほら、あのお堂です。おわかりですか？」

「ああ、あれですか。わかりました」

修行者の東川芳が言つた。

大地はバスの右列に座つていたので、通路に身を乗り出して目を向けた。

「あれが小学校だったんですか？」

大地が確認した。

「もちろん、今の学校の形態とは違うわけで、当時はお堂の中に仕切りを設けてクラス分けをしていたようですね」

「なるほど、そうなのか」

大地がうなず頷いた。

バスはすぐに穴太寺を過ぎてしまった。

「井端さん、よく見えましたよ。ありがとうございました」

丸山が言った。

「どういたしました。では、これから天恩郷へ戻ります」

民家横の細い道を抜け、田んぼの中を走る道路に出てから、井端はアクセルを踏み込んだ。

午前八時前、マイクロバスはみろく会館前に帰着した。

「皆さま、ご苦労さまでございました。では、バスを降りられたら、そのまま食堂へお入りいただいて、朝食をおとりください。よろしくお願いいたします」

井端が運転席から振り向き、案内した。修行者は順次バスを降りて、みろく会館へ入った。

「お世話になりました。とても有意義な朝でした。ありがとうございました」

大地は運転席の井端にあいさつした。

「こちらこそ、ありがとうございます。おなかすいたでしょ」

「はい、腹ぺこです」

「きつと朝ご飯がおいしいね」

井端が笑顔で言った。

修行者一同は、みろく会館の二階にある食堂で朝食をとった。通常食堂の朝食時間は午前八時までだが、時間が過ぎたからといって食べられなくなるわけではなく、修行者が帰ってくるのを待つて対応している。

丸山と向かい合わせに席についた大地は、三首のお歌を拝誦^{はいしやう}して箸をとった。

「あゝ、今日はまた一段とおいしいですね」

「さすがに今朝は高熊山に登らせていただいたので、おなかがすいたね。また味噌汁^{みそ}がうまい！」

みんな笑顔で朝餉^{あさげ}を楽しんだ。

午前十時半。講座「祝詞の意味」が始まった。講座の前の鎮魂は、八雲琴ではなく、

講師が拝誦する「大本宣伝歌」で行われた。

大地は机の右横に正座し、いつものように鎮魂の姿勢をとり、軽く目を閉じた。講師の二拍手で鎮魂が始まった。

「大本宣伝歌 生言霊。

神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

善悪不二の神の道

善を思へば善となり

悪を思へば悪となる

舌の剣の切先に

鬼も悪魔も曲霊も

先を争ひ出で来たる

この世曇るも舌のため

争い起るも舌のため

敵に悩むも舌のため

この世を照らすも舌のため

人を救ふも舌のため

天国浄土も舌のため

地獄極楽舌のため……

……何事も舌のためっていうことか？
大地は心の中でつぶやいた。

「……世のことは押なべて

舌の毒より湧き出づる

舌の奥には心あり

鬼が出づるも心から

大蛇探女も心から

神も仏も心から

心の持ちやうただ一つ

心の花の開くとき

あめつちよも　はなひら
天地四方に花開く

こころこがらし
心に閑すさぶとき

せかいこがらしふ
世界に閑吹きまくる

ひと　ころも　むらきも
人を殺すも村肝の

こころい　した　さき
心の呼吸の舌の先

ひと　すく　した　さき
人を救ふも舌の先

かみ　した　さき
神となるのも舌の先

おに　した　さき
鬼となるのも舌の先

ひと　だいいちことたま
人は第一言霊の

あま　ぬ　ぼこ
天の瓊矛とたたへたる

した　つるぎ
舌の剣をつつしみて

じ　あい　さや　をさ
慈愛の鞘によく納め

みだりに　ぬ　はな
みだりに抜くな放つなよ

ぜん　げん　び　しかむ　よごと
善言美詞の神嘉言

つか　した　やく　め
使ふは舌の役目ぞや

ぜん　げん　び　あめつち
善言美詞は天地の

醜しこの惡魔あくまを吹ふきはらふ

生言靈いくことたまの劍つるぎぞや

あゝ惟神かむながら惟神かむながら

靈幸たまちはへませ言靈ことたまの

舌したの劍つるぎをおだやかに

使つかはせたまへ天津神あまつかみ……」

宣伝歌の拝誦が終わり、しばらく静寂の時間が流れた。言靈の心地良い響きが余韻となつて大地の心に染み込むようであつた。

「口は禍わざわいの門かど」というが、世の中で起こっている事々、特にもめごとや争いを招く大きな要因は「舌の先」にあること。さらにつきつめていくと、その奥にある人の心から、すべてが発せられていることが教示されている。同様に、人を救い世を清めるのもまた、「人の心」であり、「舌の先」……善言美詞の言靈である。

大地は何か思い当たることがあるのか、心の中で「舌の劍……、気をつけないとなあ」

とつぶやいた。

しばらくして二拍手の音が響いた。

「鎮魂を終わります。どうぞお掛けください」

壇上の演台に立った講師は、あらためてあいさつした。

「おはようございます。皆さまには今朝の高熊山参拝の後ということで、この時間は少々、おくたびれのことと思いますが、少しご辛抱になつてご受講いただければ存じます。私は大本部の筒井陽子と申します。今日はこれから正午までの約一時間半、*「祝詞の意味」*という講題でお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします」

筒井は深く頭を下げてから、話を始めた。

「先日、ある修行者の二十代の男性が、このような感想を残されていました。

…今まで祝詞は、あげさせていたことが大切で、意味まで深く考えたことはありませんでした。今回の修行で、少しですが祝詞の意味を知り、神さまのお働きを感

じさせていただくことができました。これからは、祝詞の意味を考えながら奏上させていただこうと思います…

このように実感されたようです。これはとても貴重なことだと思います。もし、皆さまの中に、祝詞奏上に関して、奏上すること自体が大切であって、意味は関係ない“と思っていらっしゃる方がありましたら、どうかこの時間に、少しでも祝詞の意味を理解していただけたらと思います」

筒井は笑顔で語りかけた。

ご神徳

大地は筒井講師の笑顔になぜか安堵感あんじょを憶おぼえていた。

……とても聞きやすい声だなあ。

そう思いながら筒井の話に耳を傾けた。

「さて皆さま、信仰生活において祝詞のりとはなぜ必要だと思われますか？」

……ん、なぜだろう？

大地がそう思っていると、筒井は間を置かず話が続けた。

「一言でいうとそれは、みろくの世、地上天国建設というご神業しんぎょうのためです。世の中にあるさまざまな願い事の中で、究極の祈願がこの『神業成就』です。そして、この目的のためには、どうしても神さまに奏上する祝詞が必要なのです」

筒井は、淡々とした口調で言った。

「では最初に『祝詞』という言葉の意味を考えてみましょう。『祝詞』の漢字を分解してみると、その意味が見えてきます。『祝』という漢字は、『しめすへん』に『兄』と書き、さらに『兄』は『人』の上に『口』となつています。『しめすへん』は、その形から、お供

えをする祭壇を表象していて、さらには「神」を表します。つまり、「祝詞」は、人が口を通じて神さまに伝える、お供えする「詞」ということになります。口を使うということは、そこに音が発生します。人の思いや願いを音にして神さまに捧げるわけですが、その時に、人間の勝手な言葉ではなく、神さまに届きやすい「善言美詞」を発する方がよいのです。さらに一人一人がバラバラに発するのでなく、共通の言葉、言霊を使って奏上する方がより神さまに届きやすいわけです。それが祝詞なのです」

大地は、筒井の説明を聞きながら、以前長野の町村音江から聞いた「感謝祈願詞」の意味を思い出していた。もちろんすべてを正確に憶えているわけではないが、町村家のリビングで音江が熱心に語ってくれた時の様子（「暁の大地」第三十三回～四十一回）が、筒井の姿と重なって見えるような気がしていた。

……音江さんもていねいに教えてくれたなあ。

「さて次に祝詞の種類をご紹介します。まず月次祭や特別な祭典の時に、斎主が私たちの代表として奏上する祝詞があります。それから……」

筒井は手元に置いていた「おほものりと」を手にとって目の前に掲げた。

「皆さまの机の上にも置いてありますが、私たちが日頃から使っているこの“おほもとのり”があります」

大地も目の前に置いてあった「おほもとのり」を手にして開いた。

「齋主が奏上する祝詞にも、そしてこの“おほもとのり”にも共通して書かれている骨子が三つあります。一つ目が、皆さまの御徳を讃^{たた}える言葉、つまり“讃^{さん}美^び”です。二つ目が、日々ご守護いただいていることへの“感謝”。三つ目が、その時々お願い、
“祈願”です。この讃美と感謝と祈願が骨子となっています」

……なるほどなあ。

大地は心の中で頷^{うなず}いた。

「実は私たち、日頃の人間関係の中でも知らず知らずにこの三つを順番に使っているんですね。例えば、皆さんが目上の方に何か頼み事をするときでしょう。するとまず日頃お世話になっていることや、その人の力を讃^{たた}えて御礼を言いませんか。その上で、
“つきましては”とか、“実は”とか切り出してお願い事をされるのではないのでしょうか」
……確かに。

「これはなぜかというと、人は人間関係において礼儀というものを自然と身に付けて

いるからです。その礼儀が、この三つの順序になります。逆に考えると、この礼儀をわきまえずにお願い事しても、＼それでは通用しない＼ということになります」

語りかけるように話す筒井と目が合い、大地は自然と頷いていた。

「その上で、自分の願いをしつかり伝えようと思えば、より丁寧な言葉を使いますね。まして相手が神さまとなれば、最上級の『讃美と感謝と祈願』が必要です。それが祝詞なのですね」

筒井は少し間を置き、修行者を見回してから話を続けた。

「大本の信徒家庭にはご神前があり、普段から朝夕拝をなさっていると思います。朝拝の場合、理想的にはまず神床の掃除をして清めた上で、お給仕をして洗い米とお水をお供えます。その上でご神前に座り、神さまに向かい気持ちを静め、作法にのっとりて礼拝し、心を込めて祝詞を奏上します。信仰生活の基本は、この礼拝であり、祈る力を身に付けるのも、日々の礼拝の繰り返しです。これは言葉で言うのは簡単ですが、実践・継続するのはなかなか難しいことです」

「そうですねあ」

丸山がポツリと言った。筒井は丸山の方に視線を向けた。

「日常生活では誰しもいろいろなことがあります。心が苦しい時やムシヤクシヤしている情態じようたいでご神前に座ると、素直に神さまに気持ちを向けられないことがあります。良くない想念や雑念が湧いてきて、純粋な気持ちを捧げられない日もあるでしょう。私もまだまだ修行が足りないのだと反省ばかりしています。それでも神さまに向かおうと思ってご神前に座ると、そうでないのでは、おの自ずと結果が違ってきます。実はそれを裏付けるような話があります」

筒井は先輩から聞いたという昭和三十年代のエピソードを話し始めた。

「当時はまだ、聖師さまからお許しをいただいて、霊眼を使える方がいました。その人がある日、夕拝に遅れて万祥殿に入り、後ろの方から参拝者を霊視したそうです。当然、参拝している皆さんの肉体はご神前に向いているわけです。ところがそれぞれの霊体に向いている方向は、バラバラだったということです。

横を向いている人、後ろ向きの人、肉体は正座をしているのに、霊体はあぐらをかいている人。はたまた寝転がっている人もいたのです。はなは甚だしくは、あぐらをかいて後ろを向いている人があり、その上、口からは黒い煙がボワッと出ていたということです。これ、恐い話こわですよ。

肉体も霊体もご神前に向かっているまともな人は、ごくわずかだったそうです。皆さんは大丈夫だと思いますが……」

筒井は真剣な表情で話しながら、最後に笑顔で語りかけた。

……確かに恐い話だなあ。

大地は、もし自分の礼拝している姿を霊視されたらどうだろうか、と不安になった。

「今、〴〵もしお参りしている姿を霊眼で見られたら自分はどうか」と思った方はありませんか？」

筒井が問い掛けた。

「はい、思いました」

丸山が大きな声で答えた。それを聞いて大地は、……丸山さんもか、と少しホッとした。

「実は、私も最初にこの話を聞いた時はそう思いました。ですから、時に自分を戒めるためにも、この講座でお話をさせていただいています。皆さまも時々この話を思い出して、朝夕拝の時に、しっかり神さまに向かわせていただくように心掛けてください」

「はい！」

丸山が大きな声で返事をし、笑いを誘った。

「それから善言美詞の祝詞には、清め、浄化、祓^{はら}いの力があります。特に“おほものり”の中にある“天津祝詞”と“神言”は天地を祓う力徳があるのです。聖師さまがご口述された『霊界物語』の中で、神代の神人や宣伝使が、天津祝詞や神言を奏上して危難を乗り切る場面や、祝詞奏上を忘れて反省する場面が随所にあります。私たち信徒は、祈りに際し、この神代の神人らが奏上していたのと同じ祝詞を奏上することを許されているわけです。

これは、大変ありがたいことだと実感しています。それを最近も体験しました」と前置きして、自身のご神徳談を語り始めた。

「先日の朝、自宅で古新聞を回収に出そうとまとめていた時でした。束にした新聞を持ち上げようとした瞬間、腰に激痛を覚え、ギックリ腰になってしまいました。

その翌日は講座に立つことになっていたのですが、とても無理かもしれないと焦りました。そこで“どうか無事に講座に立たせてください”と必死で祝詞を奏上し、神さまにお願いして、何とかこの場所まで来ました。いつもはこのように立ったままお話ししていますが、その時は最悪イスに腰掛けたままお話しさせていただこうと考え

て、いつもより早く講座室に入り、先にこのイスに座って待っていました」

筒井は後ろに引いてあるイスを触りながらそう言った。

「そのうち、修行者の皆さんが順次部屋に入って来られましたが、講座が始まるまで、痛みを顔に出さないように我慢していました。

さあいよいよ時間が来ました。私は机に手をつけて体を支えるようにして慎重にイスから立ち上がりました。すると驚いたことに、何の違和感もなくスッと立てたのです。しかもそれまでの痛みがウソのようになくなっていました。もうビックリでした。この聖師さまのお軸のように、神さまの“神徳”は、本当にありがたいと実感した次第です」

筒井は、うしろの床の書に目をやりながら、しみじみと語った。

「当日は講座の最後に、その出来事を皆さまにご紹介したのですが、途中で何とも言えないありがたさが込み上げてきて、知らぬ間に涙が頬を伝っていました」

そう言いながら、筒井の目頭が少し熱くなっているのが大地にもわかり、彼女の“ありがたい”という感謝の気持ち、ひしひしと伝わってきた。

神さまの御心のまにまに

しばらく間を置き、筒井は気持ちを切り替えて話を続けた。

「次は拍手はくしゅについてお話します。先ほど、祝詞の三つの骨子の一つ目が讃美、神さまの御徳を讃たたえることだと申しましたが、お礼拝の時の拍手にも同じ意味があります。そのことがお手元の『修行のしおり』に、聖師さまのお示しで『拍手の意義』として書いてあります」

拍手かしわでは神さまを讃仰さんこうする行為である。今日の官国幣社かんこくへいしゃでは御神前で礼拝のとき、みな二拍手することになっているが、大本は四拍手する。古い祝詞にも「八平手やひらでを拍うち上げて――」ということがある。八平手というのはすなわち四拍手である。つまり大本は古式をそのまま採用しているのである。

大本では祖霊を拝む場合は二拍手する。これは大神様を拝むときよりも遠慮しているのである。



拍手のうちかたも余よほど慎重にせねばならぬ。ただポンポンと、あたかも主人が下

僕を呼ぶようなやりかたは、神に対して御無礼となるのはもちろんである。（『玉鏡』）

「このお示しのように、たとえば皆さまも感動的な舞台や素晴らしい歌声を聞いたときには、自然と拍手をされと思います。その場合、拍手の大きさや長さも、自ずとその感動の度合いに比例するのではないでしょうか。ましてや神さまを讃える拍手ですから、その気持ちでたくさん手をたたいてもよいわけです」

そう言いながら筒井は、短く十回ほど手をたたいた。

「でも、これは一人の時にはよいかもしれませんが、みんなで合わせる時には、どうしてもバラバラになってしまいます。それで聖師さまは、古い祝詞の中に拍手をやひらで八平手と記述してあることから、大本では四拍手とされました。八拍手じゃないのかと思われるかもしれませんが、右の手と左の手を一度打ち合わすことによって、一、二と二回の平手^{ひらで}となつて、それを四回することで、八つの平手になります。平手とは、平手打ち^{ひらで}というように、平に開いた手のことです。

しかもただ打つだけでなく、合わせた手のひらを指の関節二つ分ずらしてから打ちます。その動作が大切で、ずらすことによって力、エネルギーが発生します。そのことが次のお示しに書いてあります」

左手は火を表象し、右手は水を表象す。拍手すると左右合わして神（火水）となりて声を発す、その音タカとなる。アーの言霊は上がる意、マーの言霊は円満具足を示し、ハーの言霊四方に開くの意を現し、ラーの言霊螺旋を現す。すなわち拍手によりて、神なる声が天地の間に拡がりゆくなり。

（『水鏡』）

筒井はお示しを読み終えて、両手のひらを左右合わせたのち、右手を二関節下にならずに拍手をした。

……おー、いい音。

大地は感心した。

「どうです、タカアマハラのタカに聞こえましたか？」

筒井の問いかけに、丸山が口を開いた。

「先生、いい音ですね。タカかどうかはわかりませんが、タカ〜い音ですね！」

「ありがとうございます。では、皆さんも拍手を試みてください」

大地も筒井に習って手を打ったが、いい音が出ているとは思えなかった。

筒井はしばらく修行者が拍手をする様子を眺めてから、話を戻した。

「手のひらは、人によって大きさや形が違います。何度も練習して、いちばんよく鳴る位置やコツを掴んでいただけたらと思います」

筒井は笑顔で言った。

「さて、修行のしおりには続いて『祝詞の意義』とありますので、そこを読ませていただきます」

人間は往々にして無意識に祝詞を奏上することがある。そういう時、祝詞が中途に止まると後がすぐ出なくなるものである。機械的に祝詞を奏げるのは全く蟬が啼いているのと同じで、ただ囀るだけのようなものである。これでは本当の祝詞奏上にはならない。また本当の信仰ということは出来得ないのである。祝詞はベンベンダリと奏上するのもよくないが、駈け足で奏上するのもいけない。

（『水鏡』）

お示しを読み終えて、筒井は左手の窓の方に目をやった。

「今、外ではアブラゼミが鳴いています。聖師さまは、ただ機械的に祝詞を奏上するのは、あたかもセミが同じ調子で鳴いているようなもので、それでは意味がないと

示されていますね。そして…」

筒井は手元の「修行のしおり」をめくりながら話を続けた。

「次のページのお示しにありますように、尊師さまは『信仰覚書』の中で、祝詞を奏あげるときには、『ことたま』という玉を神さまに献上するつもりで、一語一語に熱誠をこめて奏上しなさい、とおっしゃっています。この心構えが大切です。

またこれも先輩から伺ったお話ですが、あるとき三代教主さまが、参拝者が奏げる祝詞を陰で聞いておられました。参拝者が帰った後、お側の人に、『あの祝詞は、レコードを回しているのと同じようなものですね』という意味のことをおっしゃっていたことがあったそうです。これはその参拝者の祝詞が、まさに機械的になっていたということだと思っています。

また四代教主さまからは、祝詞を奏げる時には、『おほもとのりと』を手にとって一字一字を確かめるようにして奏上するように、というご指導をいただきました。やはり集中して祝詞を奏上するためには、『おほもとのりと』の文字をしっかり目で追いなから、祝詞の言霊を一つ一つ確かめるようにして奏げることが大切なんですね。それには、祝詞の言葉の意味も知っておくことが必要かと思えます。この講座の時間内では、すべての意味をご理解いただくことは難しいかと思えますので、主立おもだったところをご

説明したいと思います」

そう言つて筒井は、主に「神言」の言葉の意味に関して、字句を追ひながら一通り説明した。

「まだまだ不十分ですが、もつと詳しくお知らせになりたい方は、天声社からこの『祝詞の解説』という本が出ておりますので、そちらをお読みいただけたらと思います」

筒井は「祝詞の解説」を右手で掲げながら紹介し、話を続けた。

「天津祝詞の後には、ご神号（こうしやう）を奉称（ほうしょう）します。『大天主（おほもとすめ）太神（おほみかみ）守りたまへ幸（さき）はへたまへ』と『惟神（かむながらま）真道（みちい）弥（ひろ）大（おほ）出口（いづき）国直（な）霊主（おほひめしのみこと）命（みこと）守りたまへ幸はへたまへ』の二つをご神号（しんごう）といひます。『大天主太神』は、『大本の出現』の講座でご説明があつたように大本のご祭神の総称です。また、『惟神真道弥大出口国直霊主命』とは、天界へお帰りになつた大本の歴代教主・教主補さま、いわゆる教御祖（おしえみ）さま方のご神霊のことです。この二つを二回ずつ奉称します。

そして平伏している間に、お祈りをささげますが、時々、声に出してお願ひごとをされている方があります。私の父親もそうでした。ご自宅でお一人の場合はそれでもよいかと思いますが、聖地や神の家の朝夕拝、月次祭や大祭などの祭典の時のよう

に、ほかの参拝者と一緒に祝詞を奏上しているときには、できれば声に出さず、心の中心念で祈願していただきたいと思います。ご本人は一生懸命だと思えますが、周りの方は、何を言っているんだろうかと気になってしまい、調和を乱すことになりかねませんからね」

と言つて丸山の方へ目をやった。それに反応するように、丸山が間髪入れずに応えた。「先生、私も以前はそのクセがあつたんです。声に出さないとお願いごとが届かないような気がしてね。今は気をつけてボソボソ言わないようにしています」

「そうでしたか。それは良い心掛けですね」

「はい、息子に注意されて改心したんですよ」

丸山が笑顔で言つた。

「そのように平伏している間、静かに想念でご祈願をしますが、実はその祈願、祈りの中身が大切なですね。おそらく信仰に入つた最初のころは、誰もが自分のこと、あるいは家族のことなどのお願いが主になっているかと思っています。もちろん当然のことだと思いますが、その祈りは信仰が深まるとともに変化してくるべきものかと思ひます。個人的な願いごとから、周囲の人のための祈り、あるいは公のことを祈る

ようになります。さらには、世界平和や神さまの目指されるみろくの世の完成、つまり最初に「なぜ祝詞奏上が必要か」ということで申し上げたように、祝詞奏上の目的である「神業成就」を祈る境域まで進んでいくのが理想的な祈りかと思います。そして神さまのご用のために私をお使いくださいと……。皆さまはいかがでしょうか？」

そう言つて修行者を見わたした。丸山は小声で「なかなか…」とささやいた。大地も小さく首をかしげた。

「私もそうです。なかなか個人的なお願ひごとかから抜け出せませんね。若い時は、自分のことばかりお願ひしていました。たとえば結婚前、今の夫からプロポーズを受けた時には、一旦承諾したものの、マリッジブルーというのでしょいか、日が経つにつれてなぜかしら不安な気持ちが出てきました。そこで私は神さまに、こんなふうにお願ひしました。

「神さま、このご縁が神さまの御心にかない本当に正しいものなら、全てうまくいくようにしてください。もしそうでなければ全てご破算になるようにしてください」と「ほほお、で、どうになりましたか？」

丸山が訊ねた。

「はい、すべて順調に이었습니다…と思っています」

筒井が笑顔で答えた。

「大本ではお祈りの最後に『かひながつたまちは惟神靈幸倍ませ』と唱えます。その意味は『神さまの御

心のまにまにみたまが善くなりますようお願いします』ということです。さらに言うとして、すべて神さまにお任せし文句は言いません、ということですね。これは逆に考えると、どんなにお願いしても、それが神さまの御心に添っていないければお聞き届けいただかなくてもかまいません、ということではないでしょうか。ですから、私の結婚は神さまの御心になつていた…と信じています」

筒井は相好そうごうを崩しながら言った。

……なるほどね。

ちよつと照れたような筒井の顔を見て、大地はほのぼのとした気分になった。

ありがたい修行

講座が終わり、昼食の時間になった。

大道場修行三日目午前中までのスケジュールを終え、ちょうど全日程五日間の半分を済ましたところである。

大地が神教殿の南玄関で靴を履いていると、丸山誠吉が声を掛けてきた。

「雨宮君、三日目の前半が終わったけど、気分はどうかなあ？」

「はい」

と返事をしてから、大地は靴を履き終え、丸山の方に向き直った。

「それが不思議ですね。今の講座が終わってふと気付くと、なぜか気持ちがグンと落ち着いた感じがしているんです」

「やっぱりな」

丸山は、わが意を得たり、という表情で微笑^{ほほえ}んだ。

「大道場修行は分割で受講することもできるんだけど、やっぱり五日間通して受ける方がいいんだよね。大方の受講者が、三日目から気持ちが変わってきたと言っただよ。私も最初に受けた時には、今の雨宮君と同じ気持ちだったなあ」

丸山は感慨深く語りながら靴を履き終え、大地を先に促し神教殿を出た。二人は並んで、向かいのひろく会館二階に入り左手に進んだ。

「丸山さんもそうだったんですか？」

「そうだよ」

「で、今回はいかがですか？」

大地が少し遠慮気味に訊いた。

「おつ、そうきたか」

丸山が返した。

「やはり何回も受講されていると、最初の気持ちとは変わってくるのかな、って思いました」

「いやいや、そんなことはないよ。やっぱり三日目となると、聖地の雰囲気になじんでくるといとか、靈気に包まれてくるといとか、落ち着いてくるのがわかるね。娑婆でついた心のアカが、少し落ちたという気分かな。まあ、クロい腹の中が、グレーになってきつつある感じだね」

丸山は前に突き出たお腹をさすりながら言った。

「ということは、五日目が終わるころには、ホワイトになるんでしょうね」

大地が冗談っぽく言った。

「いや、なかなか。オフホワイトくらいかな。それも北海道に帰ってしばらくすると、またクロ〜く戻ってしまうんだよね」

丸山が笑いながら言った。

「あゝ、それで何度も修行に来られるんですね」

「ピンポン！ その通り！」

丸山はおどけた笑顔で答えた。大地も声を出して笑った。相変わらず陽気な老人である。

二人はみろく会館二階の食堂に入ると、献立のディスプレイに目をやった。昼食のメニューは日替わりの献立が二品あり、それに加えて麺類とカレーライスが常時準備されている。それら四品の中からどれか一品を自由に選ぶことができる。

神教殿では冷房が効いていて快適に講座を聞いていたが、夏の盛りで、外はだいぶ気温が上がっているようである。大地は今日の献立の一つ、冷やし中華を注文し、丸山はカレーを注文した。

二人は窓際の四人掛けのテーブルにトレーを置き、それぞれご飯と味噌汁をよそつ

て席に着いた。

手を合わせ、揃そろって二代教主さまの「三首のお歌」を拝誦はいしやうして、二拍手した。

「いただきます」

大地は昨日の食作法の時間に学んだ器と箸の扱いを復習するような気持ちで、汁しる椀わんを持ち、ゆつくりと味噌汁をすすった。

そこへ修行者の一人、馬淵光彦がやってきた。

「ここ、いいですか？」

と相席を求めてきた。馬淵は六十歳過ぎだろうか。

「どうぞ、どうぞ」

丸山が歓迎した。

「お先しています」

大地が言った。

馬淵は、失礼します…と言って席に着き、テーブルの上にある三首のお歌を見ながら小声で拝誦した。

「いただきます。この季節、冷麺はうれしいですね」

「僕も麺類が好きなんです。馬淵さんは岩手県からお越しですよ。岩手は盛岡冷麺が有名じゃなかったですか？」

「そうです。盛岡冷麺はお好きですか？」

「はい、好きです。あれは、韓国冷麺に似ていて、歯ごたえのある麺ですよ」

「もともと、とても固くてゴムのような韓国冷麺を日本人に合うように改良したものが岩手の盛岡冷麺なんです。だからこれは……」

と目の前の冷やし中華に目をやった。

「冷麺でなくて、冷やし中華というのが本当かもしれませんね。冷やし中華は、夏用の冷たいメニューとして日本で生まれた麺料理ということですけどね」

「そうなんですか」

大地は感心した表情で言った。

「北海道では、冷やしラーメンって呼んでいるけど。中華そばというよりラーメンの呼び方が定着しているからね」

「なるほど、北海道はラーメン王国ですからね。でも、丸山さんは、カレーが好きなようです」

大地が訊ねた。

「あはは、まあね」

丸山が笑い飛ばし、しばらくたわいもない会話が進んだ。

「あれ、雨宮君じゃない？」

うしろから声がした。

「高村先生」

三年前、長野県の松代での「生きがい講座」で知り合った特派宣伝使の高村浩一が立っていた。

「久しぶりだね」

「お久しぶりです」

「丸山さんもお修行でしたか」

高村は大地の向かいの丸山に一礼した。

「高村先生、お久しぶりです」

丸山があいさつを返し、続いて馬淵も口を開いた。

「皆さん、高村先生のことをご存じなのですね」

「そりやもう、お世話になっていましたからね。今はどちらに赴任されているんです

か？」

丸山が訊いた。

「今はまだ東海教区を担当しております。そこで雨宮君とも知り合ったんです。ここ、空いてますか？」

「はい、どうぞ」

高村は大地の左横の席に着いた。

「皆さんご修行なんですね。すばらしい！」

「先生はいつ帰られたのですか？」

大地が訊いた。

「昨日、帰苑しました」

特派生活が長い高村は、大本の中で顔が広いようである。目の前にいる三人の信徒の地元や家庭のことにも詳しく、食事の間、いろいろな話題に花が咲いた。

「馬淵さんは、修行は何回目ですか？」

高村が訊いた。

「二回目です。大学を出た時くらいに受けたきりですから、四十年近く前ですね」

「そうですか。お忙しいでしょうに、よく時間がとれましたね」

「はい、実は還暦を過ぎて新しい事業を始めるに当たってしばらく家にいると、家内が、〃本部へ行って、修行してきたらどうなの〃と強く背中を押すもので、〃それもそうだな〃と決心してきました」

「なるほど、奥さんがね」

高村は馬淵さんの奥さんのことをよく知っているらしく、ニコニコしながら聞いていた。

「日頃はどつぷりと世間の泥水に浸かっていますから、〃身魂みたまの洗濯せんたくをしていただき、改心しようと覚悟を決めて来ましたが、聖地での生活はあまりにも快適で、時間が早く進むような気がして、もう三日目になりました」

「そんなに快適ですか？」

「はい、冷房の効いた神教殿で神さまのお話を聞かせていただき、一人部屋で快適に寝起きさせていただき、このように食堂では毎回おいしい食事を頂け、こんなにありがたい修行はありません」

「それじゃあ、なかなか改心かishinができませんね」

高村が突っ込みを入れた。

「そうなんです。毎日神床のお掃除とお給仕、朝夕拝をさせていただいていますが、時々、家内にありがたしい“訓示”を頂いている方が、よっぽどきつい修行ですよ、……ねえ丸山さん」

「そのとおり!」

丸山が笑顔で同意した。

「えっ、そうなんですか?」

大地が驚いた表情で馬淵に訊き返した。

「現実はどうだよ」

馬淵が答えた。それを打ち消すように高村が言葉を継いだ。

「雨宮君、違うよ。馬淵さんご夫妻はすぐく仲が良くて、奥さまはとっても信仰熱心な方なんだよ」

「なんだ、そうなんですネ。本気にしてしまうじゃないですか」

大地が安心したように笑顔になった。

「ところで雨宮君、午前中は何の講座だった?」

「筒井先生の『祝詞の意味』でした。とても良いお話でした」

「それは良かったね」

「あの、高村先生、一つ質問してもいいですか？」

おおかた食事も終わり、大地が遠慮気味に訊ねた。

「はい、どうぞ」

「講座では、祝詞を奏上するときの心構えも教えていただいたのですが、僕はなかなか集中できないんです。祝詞を奏^あげていると、次から次にいろんな雑念が湧いてきてしまつて、これでいいのかなあ？　って不安になつてくるんですが、こんなことではいけませんよね。どうしたらいいんでしょうか？」

「なるほどね、それはいい質問だね」

無我の境

高村は大地の方へ少し身を乗り出すようにして話を続けた。

「これは多くの信徒が、一度は抱く疑問というか、不安だと思うんだよ。もちろん、私自身も今の雨宮君と同じ気持ちの時があったし、今でもそんなに変わっていないかもしれないなあ」

「えゝ、ホントですか？ 高村先生でもそうなんですか？」

「そうだよ」

「私も同じだよ」

丸山が同調した。

「そうですね、丸山さん」

「何せ出来が悪いもので、毎回集中して祝詞を奏げられるほど、身魂みたまが磨けてないですからねえ……」

「そうなんですか？ じゃあ、僕だけじゃないんだ……」

「そりやそうだよ。安心してちょうだい、雨宮君」

丸山は例によって愛想良く言い放った。横に座っている馬淵もしきりに頷うなずいている

ところを見ると、みんなそう変わらないのかも…、と大地は少し気が楽になった。高村は優しい眼差しまなざしを向けて、大地に語りかけた。

「雨宮君も“無になる”とか“無我の境に入る”とかいう言葉を聞いたことがあるかと思うけど、本当の“無我の境”というのは、人間としてそう簡単にあるものじゃない…、と聖師さまがおっしゃっているんだ。ただし、無我のような感じを起こすことはあるとも言っておられるんだけどね」

「無我のような感じ…ですか？」

「そう、例えば、ある仕事などに没頭し、それに一生懸命になっているときは、他の仕事に対して無我の境に入っている状態だと言えるけど、反面、今夢中になっているその仕事に対しては相当意識しているわけだから、決して無我ではない、ということなんだ。…わかるかな？」

「…はい、何となく」

大地は少し考えてから返事した。

「それから、精神統一という言葉もあるけど、これも、言うは易くやす行うは難し…だね」「そうだと思います」

「聖師さまは、祝詞を奏上している時に、いろいろな雑念が思い浮かぶのは本来だ…、ともおっしゃっているんだね。鎮魂というのは、浮かれている魂を招いて身体の中府、つまり下腹のあたりに鎮めることだから、鎮魂をしているといろいろな雑念が集まってくるのは当然なんだ。だから聖師さまは、雑念というのはその人の罪障に対する回想や希望となつて現れてくるもので、いろんなことを思うのは別に悪いことではない、とも示しておられるんだよ」

「罪障に対する回想……？」

「本人は意識していなくても、その人が知らず知らずに作つた罪や過ちに対して思いをめぐらし、それが自分では雑念という認識で浮かんでくるといふことじゃないかな」
「じゃあ、雑念が浮かぶことは良いことなのですか？」

「んー、良いことというか、悪いことではなく、仕方ないことなんじゃないかな。その上でその雑念を一つずつ取り払っていきばいいと思うけどね」

「そうなんですか。でも、どうやって取り払っていきばいいのですか？」

大地は素直に問い掛けた。

高村は少し間を置いてから口を開いた。

「そうだね、それは人によっていろいろだろうけど、私自身がどうしているかという
とね……」

「どうされているのですか？」

「私も伺いたいですね」

馬淵も興味を示した。

「私が梅松塾の塾生だった時のことなんだけど、カリキュラムの中に“幽齋修行”
というプログラムがあつてね……」

「幽齋修行？」

「昔、大本の史実の中にも幽齋の修行として、人に懸かつた霊を審神……調べるため
の神事をしていた時代があるんだけど、それとはちよつと違って、顕祭けんさいに対しての幽
齋を修めるものなんだ」

「顕祭に対しての幽齋……ですか？」

「顕祭というのは、神殿や信徒家庭のご神前などで祝詞を奏あげ、神饌物や玉串をお供
えするなどの目に見える祈りのあり方なんだね」

「日々のお参りや月次祭などの形のある祭典、祈りのことですね」

丸山が言った。

「そうですね。それに対して、幽斎というのは、そうした形にはとらわれず、神さまに対して自分の靈魂で向かう祈りのあり方……。それを前提にして、梅松塾では幽斎修行というプログラムがあつて、実際には、万祥殿の朝拝後から、万祥殿の北側に隣接している春陽閣という建物の一階の畳の部屋で、翌日の朝拝までの丸一日間、無言で座わり、ひたすら神さまに向かうというものだったんです」

「えゝつ、二十四時間、座つたままですか？」

大地は驚きの声を上げた。

「とは言つても、ずっと瞑目正座めいもくして鎮魂めいもくしているわけではなくて、時に黙読で『靈界物語』を拝読したり、『おほもとしんゆ』を浄書したり、少しは横になることも許されていたけどね」

「そうなんですか。それでも丸一日はつらいな。僕には無理かも……」

大地は首を振りながら言った。

「しかも食事は無し。時々是用意された番茶を飲んで良いということになっていただけだね」

「えゝ、断食ですか。そりや、大変ですね」

「まあ、聖師さまの高熊山でのご修行や比叡山の千日回峰かいほうぎょう行からしたら比べものにならないけどね…」

「でも機会がないと、普通なかなかできないことですね」

馬淵が言った。

「そうですね、梅松塾の二年目と三年目に一回ずつさせていただきましたが、今思うとありがたい機会を頂いていたものです。梅松塾のような環境でないと、そうしたチャンスはなかなかないかもしれませんね」

高村は自分に言い聞かせるように言った。

「しかも、自分自身を見つめ直すには、とても貴重な時間でした。で、本題ですけど…」
と言いながら、高村自身の雑念を消す方法を伝えた。

「この幽斎修行中、無言で瞑目正座していると、最初はそれこそ祝詞を奏上している時よりも、もっともっとたくさん雑念が湧き上がってくるんです。自分でも“何でこんなことを思うんだろう”とイヤになるくらいでした。半日経たって夕方になると、お腹なかが空いて仕方なくなる。ところがそんな時に限って『靈界物語』を黙読していると、たくさんの食べ物が出てくるような場面に当たって、余計に空腹感が増えてきた覚え

もあります。そんなときはつらかったですよ」

「それはそうでしょうね」

「で、私は次から次へと湧き上がる雑念を一つずつ消化していくようにしました」

「消化？ どうやってですか？」

「神さまにお供えするんです」

「お供え？」

「神饌物ではないので、神さまにはご迷惑なことでしょうが、^{いったん}神さま、どうぞ差し上げますので、お取り上げください」とお願いするんです。で、^{いったん}神さまに差し上げたものですから、もう返してもらおうわけにはいかないでしょ。もし、また同じような雑念が湧いてきたら、ダメダメ、この想念はもう神さまに差し上げたのだから、私のものじゃない」と、神さまに引き上げていただく。そうして、一つ一つ「お供え」して、減らしていくんですね」

「なるほど」

「そうしていくうちに雑念が減ってきて、気付くと何も思ってたなかったという瞬間があるんですね」

「すごいなあ、無になったということですね」

「でもね、雨宮君、そうでもないんだよ」

「どういふことですか？」

「何も思っていない、無になった、と感じているということとは、そこにそう感じている自分の意識がある……ということになるでしょ。つまり“無”ではないんだよね。だからこそ聖師さまは、“本当の無我の境”というのは、人間としてそう簡単にあるものじゃない”とおっしゃっているんじゃないかな」

「なるほど、そういうことか、深いなあ」

「つまり普通の人間が、“無になりたい”、“無になるぞ”、“無我の境に入るぞ”……、などと意識している間は、本当の無の状態になっていてるのではないということ。あとで振り返ったときに、“あの時は何も意識してなかったなあ”と思えたその過去の瞬間こそが、無我のような感じを起こしたときだと、聖師さまがお示しになっているのじゃないかなあ……と私は思っています」

「なるほど。むしろ、無になろうと意識すればするほど、無になることは難しいという事ですなあ」

丸山は合点がいった口ぶりで言った。

「だからこそ、”拝む”というのは、己の我を無にする…と書いて “己^{おが}我^む無” というのだと思いますね」

大地は手のひらに指で “己我無” と書いてから、「あゝ、なるほど」と頷いた。

「この世は形のある世界ですから、いきなり幽斎的な祈りの道は難しいものです。だからこそ、肉体をもつてご神前に進み、礼拝の作法に則^{のっと}り、“おほもとのりと”を手にして、祝詞の言葉をしっかりと目で追いながら、素直に奏上させていただくのがいいんです。そのことが、お祈りをする日常的な訓練にもなるものだと思います。それを日々重ねることによって、集中して祝詞奏上ができるようになる。だから雨宮君も雑念のことはあまり気にせず、素直に祝詞を奏げさせていただいたらいいいと思うよ」

「はい、ありがとうございます。何だかスッキリしました」

大地は頷きながらお礼を言った。

「話は変わるけど、さつき幽斎修行では食事を取らないと言ったでしょ」

「断食されたことですか？」

「そう、その断食のことだけだね」

「はあ？」

大地は、何の話だろう…と思いながら、高村の顔を見た。

断食

高村は笑顔で大地を見た。

「雨宮君は『断食』って聞いたなら、何を連想するかな？」

「そうですね…、修行ですかね。あつ、いや、ここでの大道場修行じゃなくて、山伏の荒行のようなものですよ」

「大道場修行では、毎日おいしいご飯をいただけますからね」

横から馬淵が言った。

「断食といえば…」

と丸山が口をはさんだ。

「ほら、あれ、何て言ったかな、イスラム教徒が断食することがあるでしょ。横文字に弱いからすぐ忘れちゃうんだけど…」

「あゝ、ラマダンですか」

「そうそう、それ」

「ラマダンですよ、丸山さん。ラマダーンとも発音するらしいですね」

高村が答えた。

「何でも一カ月くらいの断食なんですよ」

「期間は約一カ月間らしいですが、ずっと食べないわけではないですよ」

「確か、夜は食べられるんじゃないかったですか？」

馬淵が訊ねた。

「そうです。日中、つまり日の出前から日没までの間、飲食を断つて神さまのみ恵みに感謝するというものですね。イスラムの聖地メッカへの巡礼など、イスラム教徒の五つの義務“五行”の一つで、その断食の行を“サウム”と言うんですね。ラマダンは、イスラム暦の九月のことで、太陽暦では毎年十一月ほど前にずれていくようですね。それに飲食だけでなく、さまざまな欲を捨てて、絶対の神へ近づくよう努め、飲食だけでなく、ほかの禁欲も課せられると聞いています」

「どんなことですか？」

「イスラム教徒はもともと飲酒は禁止だけど、確か喫煙や性行為もダメ。で、最大の罪とされるのが、うわさ話や悪口だそうで、これらはとても恥ずかしい行為だとされているらしいですね。それから…」

と、高村が禁欲について詳しく説明した。

「なかなか大変な行ですね。それは子供もするのですか？」

大地が訊いた。

「確か平均十歳くらいからだったと思いますが、本人の意思で決められるようで、早い場合は七歳くらい、ですから小学一年生くらいから参加する子もいるようですね」
「へえ、すごいですね」

「これは単純に考えた場合ですが、日中に飲食できないとなると、レストランの営業なんかは困りますよね」

馬淵が訊ねた。

「飲食店は、日没後から開店するところがほとんどうですね。イスラムの国でも、もちろん観光客や異教徒は断食する必要はないわけですが、公共の場所やイスラム教徒の前では飲食しないように通達があり、もし、そうした人たちが公共の場で飲食や喫煙をした場合には、宗教警察に通報され、連行されることもあるそうです。もしラマダンの時期にイスラム圏の国に行く場合は、注意しないといけませんよ」

「まあ、この歳で行くことではないでしょうから、大丈夫です」

丸山が妙に胸を張った。

「私たちは日本にいて、日頃から食べ物に恵まれていますよね。食べることに制限がない環境にいと、さっきお話した一日の「幽斎修行」ですら大変なことですから、ましてや日中だけとはいえ、一カ月もの断食は、かなり過酷だと思います。どうです、雨宮君、やってみたいかい？」

「いやいや、無理です。一生に一度じゃなくて毎年でしょ。僕なんか三日と持ちませんよ」

大地は顔の前で手を振りながら言った。

「そうだよね。話が横道にそれたけど、そのイスラムのような飲食断ちを、誰もが断食だと思ふよね。でも聖師さまが示された断食は、ちよつと違ふんです」

「そうなんですか？」

「食べ物近くにくくさんあるときにわざわざ飲食を断つても、それは本当の断食にはならないとおっしゃっているんです」

「えつ、どういふことですか？」

大地は不思議そうに訊いた。

「たとえば、大本の宣伝使が、神さまのご用でどこかへ行つて活動をしていて、そこに食べるものがなかったり、あるいは宣伝活動に忙しく食事をする暇がなくて、食べられなかったりした場合、…それが本当の断食になるんだそうで、三度続けば、一日分断食したことになるというんですね。そして、それがおかげである、と聖師さまは断言されているんです」

「断食するぞ」つて宣言してするのじゃなくて、何らかの理由で食べることができなかった場合、つまり食べ損ねた場合が断食だということですか？」

馬淵が訊ねた。

「そういうことですね。あるいは、神さまのご用に没頭していて食べのことを忘れていた場合もそうですね。そういうことってなかったですか、丸山さん」

「そりゃあ、本苑でお役をいただいていた時には、忙しくて食事ができなかったことは何度もあったけど…。あれが断食だったんだねえ」

丸山は半信半疑のような表情で頷いた。

「今のことは、『水鏡』の中に書いてあるのですが、その説明に当たって、昭和の初期の出来事で具体的に説いてありますね」

高村はそう言いながら、内容をかいつまんで説明した。

昭和二年十月ある日の事、筆者は聖師さまのお供をして大阪の某会社に参りました。会社では付近の土地のご検分を願うためにおいでをお願いしたのでした。午前十一時ごろお着きになりましたので、会社側ではご昼食を差し上げるとて、そのことを申し出られました。聖師さまは軽く「ご飯は済まして参りました、どうかおかまいなく」と断られました。実は聖師さまもお食事はしてはおられず、随員たちも頂戴してはおりませんでした。

それから電車にのせられ、下車して一里ばかりの山道を歩かされました。晩までにはかなりお腹がペコペコになって参りました。晩餐ばんさんののち聖師さまは上記（先の高村の説明）のお話をして下さいまして、

「皆さん今日は定めしお腹が空いたであろう。実は皆さんに断食をさしてやろうと思つて、わざとにああいうて断つたのだ、皆さんはおかげをもううた」

とお話し下さいました。随員一同深く御神恩を感謝いたしました。聖師さまはつづいて仰せられました。

「たとえ断食しても、神さまの御おん為ため働かしていただくという決心をして一カ月間その誠をいたせば、神さまはその赤誠よみを嘉したもうて、そののちきつと結構にして下さる。

一カ月の断食というのは引き続いて一カ月断食するというような苦業ではなく、一日食べん日があつたり、二日食べん日があつたり、それが積もつて一カ月になるとのことなので、それも前いうとおり自分の我では断食にならぬ。窮乏^{きゆうぼう}して食物が無くなって、食べようにも食べられないようになったり、草を櫛^{しどね}の旅枕、宣伝の旅にのぼつて、金は無くなり、食物を与えてくれるものもないでやむを得ず、断食するとうようなのでなければ、神さまから認めらるる断食にはならぬのである」

（『水鏡』断食のこと）

「…ということなんです」

「神さまの教えは、深いですね」

馬淵が感心したように言った。

「こうした一つの物事に関しても、一般的に考えられていることと、神さまがおっしゃっていることは、そもそも考え方の基準が違い、人間の解釈では、往々迷信に陥ってしまうことがあるようですね」

「迷信？」

「道理に合わない言い伝えなんかを頑固に信じてることだね。よく『そんなの迷信だ』と、

昔からの言い伝えを現代人の物差しで不合理だからって、否定することがあるでしょ。でも本来は、それが人の基準じゃなくて、神さまの目から見てどうかということなんですよ」

「なるほど、人の目からでなく、神さまの目から見るとか……って、それは難しいし、凡人にはわかりませんよね」

大地が言った。

「そういうこと。だから、神さまの目から見たらこういうことですよ、というのが教えなんです。ですから聖師さまは、神さまのみ教えに関して、

教とは人の覚りのおよばざる

天地の神の言葉なりけり

と詠んでおられます」

「だからこそ、素直に神さまのみ教えをいただくことが大切なのであります」

丸山が真顔で言った。

「例えば、神さまに祈願するのに断食をし、裸、裸足で滝に打たれ、そのままの姿で神前に進み祈りを捧げるのは、神さまに対して大変無礼になる……と聖師さまはおつ

しやる。人間同士でも、上司や尊敬する人の家へ頼み事に行くのに、裸や裸足では行かないでしょ。ましてや尊い神さまの前に裸や裸足のままで進んでご祈願するのは大変なご無礼であつて、本当は心身を清め整えて、それなりの服装で、畏れ慎んで申し上げないといけないわけですよ。それに本来神さまは親のような愛のご存在ですから、子である人民には常に衣食を与えたいと思つておられる。ですから人はそれに反することは本来避けるべきことなんですネ」

「あのゝ、だつたら……」

と、大地はちよつと言いにくそうに質問した。

「時代劇なんかで出てくる……何と言つたか、神社に夜、裸足で百回お参りして願をかけるという……」

「お百度参りだね」

丸山が助け船を出した。

「そうそれです。そのお百度参りや、好きな物を断つて願をかけるというのはいけないことなんですか？」

「もちろん、いけないことではないですよ。それは、自らの“行”と“まごころ”と

「行とまごころ？」
「いう視点から見るのが大切だと思うんですね」

大地は首をかしげた。

まごころ

「一般的に『願懸け』とか『願を懸ける』という言葉を目にするけど、これは神仏に向かい、病気が早く治りますように…などと、事の成就を祈ること。つまり大本でいう『ご祈願』と同じことですね。で、その『願懸け』のための一つの方法として、民間信仰の中に、お百度参りというのが根付いているわけです」

「僕は時代劇くらいでしか知らないんですけど、実際、今でも行われているのですか？」
「もちろん、全国的にあるようだね。関西なら、東大阪市の石切劔箭神社が有名で、平日でもお百度参りをする人が絶えないらしいよ」

「へえ、そんな神社があるんですか、知らなかったなあ」

大地が驚いた表情で言った。

「そもそもお百度参りは、今から九百年くらい前の鎌倉時代から始まったといわれている、最初は同じ神社・仏閣に続けて百回お参りして願を懸ける『百日詣』だったらしいんです。でも、急を要する願い事だと、百日もかけられないでしょ、…ということから簡略化されて、一日で百回参るという方法になったわけだね」

「お百度を踏んでいる間は、言葉を出してはいけないと言いますなあ」

丸山が言った。

「そのようですね。何回参ったかが分かるように、小石やこより、竹串なんかを用意しておいて、それで数を数えるそうですね」

「そうそう、こよりを手に握りしめて神社の石畳を歩いているようなシーンは、テレビドラマで見たことがありますね」

馬淵が相槌あいづちを打った。

「時代劇だと、だいたいは貧しい長屋住まいの母親が、自分の子供や夫の病気のためにお百度参りするというのが、よくあるパターンですね」

「そうですね」

大地が頷うなずいた。

「その時代、経済的に医者に診みてもらうことも、薬を買うこともかなわず、ただ看病することしかできない農民や町民が、するが思いで神さまに願を懸けるわけです。つまりもう他に手段がない。その切羽詰せつぱつまった思い、その人の“まごころ”を形に表したのがお百度参りだったんですね。悲痛な思いが行動になったわけですが、ドラマで

はそれが何だか“行”のようにも表現されている場合もありますね」

「雨が降る夜中、髪を乱し素足で必死にお百度を踏んでいる女性の姿…、という場面だと、必然的にそう映りますな」

「確かにね」

丸山の発言に馬淵が頷いた。

「でも実際には、お百度を踏んでいる本人の心の中は、人を思うまごころに満ちていると思うんです。つまりその当時のお百度参りは、自分はどうかまわらない、犠牲的精神…、まごころの表れであつたわけです。だからほとんどの場合、精神的にとっても尊いものだったと思いますよ」

「なるほど」

「同じように、茶断^だちで願を懸けるというのもそうですね」

「お茶を飲まないだけで、願い事をするということですか？」

大地は不思議そうな顔を高村に向けた。

「雨宮君、今の日本の恵まれた環境の中で考えたらダメだよ。その時代の貧しい人にとっては、お茶だって貴重だったと思うよ。そもそも、お湯が貴重品だからね」

「えつ、お湯が貴重品ですか？」

大地は驚いた。

「そうだよ。昔は現代のように、蛇口をひねったら…あつ、これももう古い表現か…、レバーを上げ下げするだけで水が手に入る時代じゃないでしょ。家の外の井戸まで汲みに行かなくちゃいけない。それも家からちよつと離れた場所にある。汲んできても、現代のようにボタン一つであつという間にお湯が沸くことはあり得ない。火打ち石と火打ちがねで火を起こして薪を焚き、時間をかけて湯を沸かしたわけですよ。

それに家によつては茶葉でも贅沢な嗜好品だつた。つまり、お茶を飲むことはその人にとつては、苦しい生活の中での大きな楽しみだつたかもしれないだね。その楽しみにしているお茶を断つということは、それなりの覚悟がいる。だから、自分の大きな楽しみを犠牲にしても、何とか神仙に願いを聞き届けていただきたいという切なる願いの表れ、方法だつたということですね」

高村が丁寧に説明した。

「なるほど、そこまで深く考えてみたことはなかったなあ。どうしても自分のものさしで考えていました」

「そうだね、反省しないとなあ」

大地の発言に馬淵も同調した。

「大切なのは、まごころ」ということですね」

丸山も頷いた。

「まごころ」は、真の心と書きますね。辞書では、誠の心、偽りのない真実の心とあります。それから、赤い心、まごころともあります」

「赤心報国の赤心ですね」

「丸山さん、その通りです」

「三代教主さまの力強い『赤心報国』の書が印象に残っているものでね」

「そうでしたか、私もそのお作品は印象深かったので記憶にありますね」

高村は頷きながら、話を続けた。

「真心という言葉は、お筆先の中でもたびたび出てきます。生まれ赤子の心とか、誠の水晶の真心、あるいは松の心と示されています」

「変わらぬ色のまごころですね」

「知ってます、大本青年部の機関誌が『まごころ』でしたよね」

「そう、あの誌名は三代教主さまからご命名いただいたタイトルなんです」

「そうなんですね」

頷きながら大地が周囲に目をやると、食堂の席に着いている人の数も少なくなっていた。そろそろかな、と時間が気になったが、高村の話は、まだ終わりそうになかった。「それから、『靈界物語』の中にも、真心について詳しく書かれているところがあるんです。第二十二巻の総説で、聖師さまは、万物の長である人間の身魂が邪神に感染してしまっている今の世界の惨状を憂い、世界の人類が一日も早く眼を覚まし、神心に立ち返らなければならないと訴えておられます。そのためには真心が必要であるとされ、『真心とは天地の先祖の大神の大精神に合致したる清浄心である』との書き出しで、いろいろと示されているのです」

大地ら三人は、高村の熱のこもった言葉に惹かれるように耳を傾けていた。

「そして、五ページくらいにわたって、真心について詳しく述べておられるんです。どんな場面に遭遇しても泰然自若であれ、物質欲には淡くあれ、人と争わず耐え忍べなど、いろいろなことを論しておられます。もちろん、私は全部覚えていませんし、今の自分にはほど遠いと反省することばかりですが、できたら皆さんも一度、『靈界物語』第二十二巻の総説を拝読してみてくださいね」

「はい」

大地が答え、他の二人も頷いた。

「その中で、『自己の独り知るところを慎み…』というお言葉があります。これもなかなかできないことですが、私はその慎むというのも、真心なんだと思うんです」

「慎むというのは、でしゃばらず控えめにするとかいう意味ですよね」

馬淵が訊ねた。

「慎むという漢字は分解すると、りっしんべんと真ですよ。りっしんべんは心ですから、真心のことだと思うんです。ですから、“慎ましく生きる”と言った場合は、贅沢をせず、質素な生活をするという一般的な意味の他に、真心で生きるということだと、私は勝手に解釈しています。」

……って、偉そうなことを言ってますみません。実際自分は全然できてないのですが、そうありたいということです、お許しください」

「いえ、大変勉強になりました」

丸山が言った。

大地は頷きながらも、周りを見渡すと、食堂のスタッフ以外は誰もいなくなり、四

人だけが食堂に残っていた。

「すみません、貴重な休憩時間にしゃべりすぎてしまいました」

高村は頭を下げた。

「いえ、高村先生、ありがとうございました。とても良いお話を聞かせていただきしました」

馬淵はそう言いながら立ち上がり、頭を下げた。丸山と大地も立ち上がり、トレイを持って返却口に向かった。

「午後からは四大主義の講座だね」

高村は、食器を洗い場に入れながら訊いた。

「はい、そうですね」

「ごめんね、休み時間がなくなっちゃったね」

「いえ、とても勉強になりました。先生もお忙しいのに、ありがとうございました」

「じゃ、また」

高村と別れ、大地は食堂東側の出口から安生館の部屋に向かった。

ドアを開けると冷房を切っていたため、部屋の中には熱気がこもっていた。大地はいったんベッドに寝転び、大きく背伸びをしてから眼を閉じて気分を切り換え、ほどなく立ち上がった。

スマホで時間を確認すると、講座開始まで十分を切っていた。大地は大きく息を吸って深呼吸し、神教殿へ向かった。

南口から中へ入ると、しつかり冷房が効いていた。

「おゝ、涼しい！」

大地は下駄箱に靴を収めた。

下駄箱談義

そこへ後から入ってきた丸山が声を掛けた。

「なるほど、雨宮君はその向きで入れるんだね」

「えっ？」

大地が振り返った。

「いやね、靴のかかとを手前にして下駄箱に入れるんだな…と思ってね」

「はい、別に意識しているわけじゃないんですが…、これって間違っているんですか？」

「いや、そういうわけじゃないけど、私は靴の正面、つま先が手前にくるように入れる“正面派”なのでね」

「そうか、僕は逆ですね。…でも、靴の種類によつて違うかもしれないなあ」

大地は独り言のようにつぶやいた。

「これ、いろんな考え方があってみたいだね。今は時間がないから、またあとで説明しよう。もしかしたら午後の講座内容とも関係あるかもしれないから…」

丸山は思わせぶりに言った。

「そうなんですか？」

「いや、遅くなりました」

そう言いながら馬淵が駆け込んできて、すばやく靴を下駄箱に収めた。

「馬淵さんも“かかと派”かあ」

「ですね」

丸山と大地は顔を見合わせて言った。

「えっ、何のこと？」

「ま、あとでね」

丸山が言った。

「はあ？」

馬淵はげんな顔をして二人を見た。

大道場修行三日目午後の講座は、「四大主義しだいしんぎよう：大道実践の原理」である。

「皆さま、こんにちは。大本部の真行礼司しんぎようれいじと申します。今日はこれから四大主義についてお話しさせていただきます」

そう切り出した真行講師は、簡単に自己紹介をしてから、壇上に掲示してあるパネ

ルを指しながら本題に入った。

四大主義

清潔主義…心身修しやうばつ祓はつの大道

樂天主義…天地惟神かんながらの大道

進展主義…社会改善の大道

統一主義…上下一致の大道

「ここに示してありますように、大本には、『大道実践の原理』として、『四大主義』というものがあります。大道というのは、神さまの示されたお道のことです。

原理というのは、根本的な法則や決まりという意味です。つまり『大道実践の原理』というのは、神さまの大いなるお道を実践するための根本的な決まり、ということになります。それには主義がある。主義というのは、明確な立場やあり方ということですから、それが四つあり、しかもその四つの主義は、バラバラではなく、順番に相関連しているとお教えられています。それが最初のお示しです」

そう説明して、『修行のしおり』の四大主義のページの冒頭を読み上げた。

この四大主義は、われわれのみの四大主義でありませずして、どこへ、どういう時に出しても、時と場所とに関係なく間違いない普遍の真理であります。

四大主義は清潔、樂天、進展、統一のこの四つをいうのであります。四つの大きい根本の行き方というような意味で四つ相関連して、そこに深い意味があり、連鎖があります。

すなわち、われわれは清潔であつてはじめて樂天的な気持ちになれる。樂天的な気持ちになつてほんとうに進展というものがある。しかし何があつても統一がなかったならば、天地も、社会も、家庭も、一身も成り立たない。そういうわけで、この四つは相互に関連しているのであります。

(信仰叢話)

「実は、この四大主義が実践されている世界があります。それがあの世、靈界の天国です。つまり天国天人の生活が、四大主義実践の生活そのものなのです。ですから、地上天国を建設していくことが人生の目的であると教えられている私たちは、天国天人と同じような生活をするのが理想なのです。

しかし、現界にはさまざまな制約があります。生きながらに、天国天人と同じように実践することが本来ですが、なかなかそうはいかない。でも、少しでも近づけるようにするための生活のあり方、原理が、この四大主義です。ですから私たちは、この四つをできる限り実践して、人としての使命を果たさなければなりません」

そう話し、清潔主義から説明を進めた。

「私たちは日常生活の中で、周囲や自分自身を清潔に保つための物質的な行動を、意識的に、あるいは無意識のうちにも行っています。朝起きたら顔を洗いますよね。汗をかいたら風呂に入ったり、シャワーを浴びたりして汚れを落とします。汚れた服は洗いますし、部屋の掃除もするでしょう。身だしなみを整えたり、トイレに行くなどの生理現象による行動も清めであり、はら祓い、浄化であり、宗教的な用語で言うところのけっさい潔斎です。

こうした物質面もさることながら、実は霊的な方面、心の方面のはら祓い清めが大切なのです。清潔主義は、霊体共に絶え間なく行われるおはら祓いです。でも、この世では、目に見えない心の方面のはら祓い清めをするためには、やはり形をもつて行うことが肝要なのです。その中でいちばん身近で取り組みやすいのが、きやつか脚下照顧：足元を正すことです。つまり、自分の履物、下足を毎回キッチンとそろえるという行動です」

真行講師は、そう言つて、具体的に下足のそろえ方を説明した。

靴を脱ぐときには：例えば玄関なら：進行方向のまま真つすぐに上がり、振り返つてからしゃがみ、靴の向きを一八〇度変え、きちんとそろえる。この振り返つて、今自分が脱いだ靴を確認し、丁寧にそろえるという行為が、自分のそれまでの心を振り返るという“省みる”行為につながるというのである。

：あつ、さつき丸山さんが言つていたのは、このことも。

大地はそう思つた。

「皆さん“なんでそんなことが清潔主義になるのか”と思われるかもしれませんが、この履物をそろえるという行為を、どんなときにも実践でき、しかもその時に“めんどくさいなあ”という心の葛藤なく、素直に、無意識に行えるようになるには、相当時間が掛かるんですね。私も最近、ようやく素直にできるようになりました」

真行講師は、自己紹介で古希を過ぎたと言つていた。

：いったい何十年かかるんだ？ 僕もできるのかなあ？

大地は自問自答していた。

清潔主義の説明が一通り終わり、休憩時間になった。

大地が畳廊下で、修行者用に準備されたお松茶をいただいていると、トイレから丸山が戻ってきた。

「丸山さんがおつしやつていた通り、下足の話がありましたね」

「だろう。で、さっきの続きだけどね…」

そう言つて、下駄箱談義が再開された。

「温泉施設などに行くと、強制的に一人用の下駄箱に靴を入れないといけないから、誰でもそうするよね」

「そうですね」

「でも、この神教殿の玄関のように、数段ある下駄箱に並べて入れる場合は、本当はどっちを手前に入れたらいいのかと思つたことが、そもそもこの話のきっかけなんだ。以前修行に來た時もこの話題で談義したことがあつてね」

「それでどうだったんですか？」

「結論から言つと、どちらが正しいということはない、ということになったんだ。『正面派』の人は、靴の中が見えにくいように、正面を手前にした方がいいんじゃないか、という意見。するとハイヒールのように、かかとが高い靴だと、かかとを手前に入れ

ると靴の中は見えないよ、という反論があったりしてね」

「なるほど」

「あと、*“かかと派”* は、下駄箱の一系列の高さが低い作りだと、正面向きに入れようとすると、靴を持った手が奥まで入れにくいから、かかを手前にする方が入れやすいんじゃない、とかね。

ということで、靴の形状や下駄箱の高さによって、臨機応変でいいんじゃないの、という結論になったんだ」

「確かに。下駄箱の上段が高いところに設置してあったら、つま先を手前にして入れるのは難しいですね。かかを保持して入れる方がそろえやすいし、現実的ですな」

「まあ、そもそも、普段から下駄を履いている人が少ないのに、今も多くの人が下駄箱というよね。靴箱とか下足箱、下足棚とか言うこともあるだろうけど、あまりなじまないんじゃないかな」

丸山が笑顔で言った。

「確かに僕も普段から下駄箱と言っています。今思い出したんですが、小学生の時には、上履きのかかとに名前を書いて、それが見えるようにそろえて入れなさい……って指導

されていたと思います。だから「かかと派」になったのかも」

大地が記憶をたどった。

「私は、靴じゃなく、本来の下駄だったらどうだろうかと考えたんだよ。下駄や草履だと、かかとは持てないでしょ、ね」

「そうか、下駄にはかかとはがないですね」

「そうなんだよ。下駄を脱ぎ、真つすぐに玄関を上がる。振り返って、手なりに鼻緒を持ち、そのまま下駄箱に入れる。すると、下駄の正面がこちらを向く。取り出すときも持ちやすい。これがわが「正面派」の主張なんだけどね」

丸山が「どうだ！」という表情で言った。大地は、丸山の説明をイメージして「なるほど」と思った。

「『脚下^{きやつか}照顧^{しやうこ}』という言葉は、もともとは「足元に注意せよ」「真理を自己自身の内に求めよ」という仏教用語らしい。でも私は、日本の履物文化や習慣に、深く関わる言葉のように思っていてね……」

「そうですね。外国では、ほとんどの国が靴を履いたままの生活が多いですからね」

「四代教主さまは、『自分の下足ひとつ正せないようでは、大きなことはできません』

と、お示しになっていて、真行先生がおっしゃっていたように、己を省みる上でも、“脚下照顧”の実践はとても大切なこと。それに、これを継続することは、簡単なようで、実はとても難しいことなんだなあ。特に私のような怠け者にとってはね」

丸山はいつもの笑顔で言った。足元にはガラス戸越しに、夏の陽が差し込んでいた。

天命を知って人事を尽くす

「そういえば、昨日の夕拝の時に感心したことがあったんだよ」

丸山が思い出したように言った。

「何があったんですか？」

大地が興味ありげに訊いた。

「万祥殿の玄関で、私の前にあの東川さんがいてね」

そう言いながら、丸山は講座室の方に顔を向けた。その目線の先には、すでに席について、修行のしおり^{しおり}に目を通してゐる東川芳^{かほる}の姿があった。静岡から来ている二十代後半の女性である。

「彼女は玄関で靴を脱ぐと、それを持って下駄箱の下の方の段に、靴を入れたんだよ。上の段が空いていたのにもかかわらず、わざわざしゃがみ込んで入れにくいところに入れていたんだね」

「どうしてですか？」

大地は不思議に思った。

「さあ、そこだよ。私もそう思って、『上が空いているのに、なぜそんな下の方に入れ

るんですか?』って訊いたんだ。そしたら彼女は、『年配の方が入れやすい場所は控えるようにしています』って言うじゃないの。いや、これには驚いたね。そんなところまで気を使っていたなんて感心したよ」

丸山が頷きながら言った。

「ん、僕はそんなこと、考えたこともなかったなあ。なんと気配りのできる人なんでしょうね」

「そう、たいした思いやりの心だね。なんでも、子供の頃からお母さんに言われていたんだそうだよ。〃年を取るとしゃがみ込むのは大変だから、お年寄りが入れやすい場所は空けておきなさい〃とね。」

普通は誰もが、無意識のうちに自分が入れやすいところから入れていくでしょ。まさか靴を入れる場所にまで気を使っている若者がいるなんてね。彼女のお母さんのしつけは素晴らしいし、それを実践している彼女もまた、たいしたものだと感心したなあ」

「えらい人だなあ、見習わないといけませんね」

「その通り! 尊師さまのお歌に『真似をせよ善いまねをせよその内に自分のものとなりてくるなり』というお歌があるからね。ぜひともまねをしてください。あつ、ち

なみに彼女の靴の入れ方は「正面派」だったよ」

「なるほど、そうじゃないかと思いましたよ」

大地は頷いた。うなず

「そろそろ時間だね」

休憩時間が終わり、真行講師しんぎょうが部屋に戻ってきて講座が再開された。講座時間の半分が過ぎていたが、四大主義の残り三つの説明が残っていた。

「それでは講座を再開いたします。次は、「楽天主教…天地かん惟神ながらの大道」であります」
真行が話を始めた。

「さて皆さんは、「楽天」といったら何を連想しますか？」

真行は丸山の方へ顔を向けた。

「楽天イーグルスです」

丸山が即答した。

「はい丸山さん、期待通りのお答えをありがとうございます」

「どういたしました」

二人の受け答えに場が和んだ。

「あとは、楽天カードとか、ネットショップの楽天市場とかを思い浮かべる方が多いかもしれませんが、楽天家という言葉を連想される方もあろうかと思えます。

ふつう楽天や楽天家、楽天主義というと、人生を楽観することや、自分の境遇に安んじてあくせくしない、自分自身が楽しければそれで良い…というふうに捉えられがちだと思います。

しかし、こういう考えは、ややもすると自分の喜びを得るために、周囲の人に不快な思いを与えたり、社会に害をなしたり、揚げ句の果てには地球環境をも悪化させてしまう場合があります。なのに、そんなことには一向気付かず、あるいは気付いていても自分の歓楽のために見て見ぬふりをしていることが、私たちの周りには多いこともまた事実ではないでしょうか。

では、本来の“楽天”というのは何か…、そのことについて、まずこのしおりをご覧ください」

真行は“修行のしおり”を手を持ち、楽天主義の項目の最初のお示しを拝読した。

楽天と申しますのは、これは天命を楽しむという意味であります。天命、これを

「性^{せい}」といいます。つまり惟神^{かんながら}の、それぞれ与えられたる天職使命、それが「性」であり、天命である。命^{めい}はおいしいつけであり、すなわちいのちであります。すべてのものに、人間とか動物ばかりでなしに、植物にも鉱物にも性があり、天のおいしいつけがあり、そのもの独得のいきのみち、すなわち、いのちがあるのでありまして、一切がその性にしたがって天地の化育に参じておれば、惟神^{かんながら}にほがらかで楽しいのであります。

（『信仰叢話』）

「私たちの身の回りの動物、植物、鉱物は、この天命に従い、与えられた境遇に不平不満を言うこともなく、与えられた天命を果たすために懸命に生きていますね。それに比べて、万物の霊長である人間はどうでしょうか。

人間には、神さまから分け与えられている知能と霊性が備わっていて、動物に比べるとうずば抜けて優れています。なぜか？」

真行は少し間をあけた。

「それは、神さまの代行者として、神さまが願われる理想世界……みろくの世を建設するために人に与えられたありがたい特性です。しかし、ややもするとその特性が、悪霊の欲望を満たすために使われていることはないでしょうか？」

今、日本や世界で起こっている問題のある現象を考えてみると、人間自身がより便利に、合理的に生活しているとして取り組んできたことが、逆に地球環境などを破壊する一因になっていることも少なくないと思います。核問題でも、それを生み出したのも人間の優秀な知能ですが、悪用するのもまた人間です。

人間は神さまの入れ物になり得ると同時に、悪霊の入れ物にもなり得る性を持ち合わせています。そのために起こる罪惡の心が、神さまのみ心に背く形として現れてきていることがあるのですね」

真行は熱を込めてみ教えを伝えた。

「そこで、万物自然の心である樂天的な気持ちで生きるには、どうしたらよいかということを学ぶことが大切になってきます。

で、それは何かというと……『信仰的刹那最善主義』の実践です。

これこそが樂天主義なのです。つまりは、すべてを神さまにお任せし、その時その時、刹那刹那に最善を尽くすことです」

……『信仰的刹那最善主義』か。

大地は心の中で反復した。

続いて真行は『修行のしおり』に掲載されている二首の道歌を紹介した。

今といふいま善き心よき言葉

よき行ひを上げむこそ善き

取り越しの苦労もなさず過ぎこしの

苦労も思はず刹那を進む

「刹那」というのは、もともと仏教からきている言葉で、きわめて短い時間という意味で、今のこの瞬間ということです。

日本の神道にも同じような意味で「中今^{なかいま}」という言葉があります。これは神道における歴史観でもあるのですが、永遠の時間の流れのうちに中心点として存在する今…単なる時間的な現在ではなく、神代から継承している中での今という考えです」

……刹那^{なかいま}も中今も、普段あまり使わない言葉だなあ。

大地は心の中でつぶやき、難しい言葉が多いことを感じていた。もちろん真行はそ

んなことは思いもせず、淡々と話を続けた。

「今この時代に生きているということは、当然過去があり、そして今があり、さらに未来があります。私たちはその歴史の中間点に居るわけです。ですから過去や未来がどうであれ、自分が生かされている、今この時代をどう人間として一生懸命生きていくかということが、中今なかいまの精神だといわれています。

大本も同じように刹那主義です。人間には、幅広い自由意思が与えられています。しかし、その自由意思を行えるのは、今いまという刹那だけです。

過去は、その瞬間瞬間が積み重なったものであり、今いまは過去の結果が積み重なって現れたものです。過ぎたことはいくら悔やんだところで、どうにもなりません。そして、今いまが延びていけば、当然それが未来になります。未来もまた、現在の瞬間が創っていくものであって、先のことはいくら思い煩わづらつても仕方のないことです。

すべてを神さまにお任せして、その時その時を楽しみながら精いっぱい生きることが、真の楽天です。

一般ではよく、「人事を尽くして天命を待つ」ということわざが使われますが、大本では、すべてを神に任せて自身の最善を尽くすということから、「天命を知って人事を

尽くす”というふうに言い換えています。この生き方の実践が、天地かんながら惟神の大道であり、
本当の楽天主義なのです」

真行講師は、楽天主義を心掛け、日々実践しながら勇んで暮らすことによって、喜びに満ちた生活を送ることができ、そのような暮らしこそが、地上天国のあり方なのだ、笑顔で語りかけた。

真行の人柄も手伝ってか、その言葉が染み込むように伝わってきて、大地は”楽天主義を実践したい！”と心に誓っていた。

月日の駒に神ならう

「さて、残り時間も少なくなってきましたので、次に進みます。

今お話しました本来の樂天的な気持ち…、これが豊かになれば、おのずと次の段階に移っていきます。そこには行動が伴い、動きがあります。そしてその動きには、良くなりたい、向上したい、進歩したい、開発したい、…という前向きな希望があります。それが“進展”…進展主義です。

これを実践するための心得ともいえるお示しが、お手元のしおりに記されています」
真行は、^{しんぎょう}“修行のしおり”を手に取り、お示しを読み上げた。

すんだことは忘れることだ。くやしかったこと、恥ずかしかったこと、恐ろしかったこと、そんなことは、みんな忘れてしまつて、ただ、より賢く^{かしこ}さえなつておればよいのだ。

われわれは、どんなことでも、それを踏^ふ台^{だい}として、一段うえへ、より賢くなることを、まず第一に心がけねばならぬ。そして、その踏^ふ台^{だい}に、いつまでも執^{しゅ}着^{ちゃく}してはならない。

かくて、無限に、より真に近づいて行くことに無限の愉樂^{ゆらく}はある。この愉樂は、われわれがいかなる境遇におかれていても求めうるものである。

（『信仰覚書』第四卷）

「清潔主義に続き、楽天主義を實踐していくと、次は三つ目の進展主義の段階におのずと入っていきます。そしてこの『進展』の中には、意識しての進展と無意識のうちの進展があります。皆さまは…」

真行は、修行者を見回した。

「…おそらくそれぞれにいろいろな都合を調整して、この大道場修行にお越しになり、今こうして講座を聴^きいておられると思います。三日目の午後となり、ここに来られる前と比べると、たぶん皆さまの心は豊かになり、充実し、前向きになっておられる、進展しておられると思いますか?、いかがですか?」

「はい、進展しております」

丸山が答えた。

「ありがとうございます、丸山さん。これは、皆さまの願いや希望を伴つての進展、

つまり意識しての進展ですね。

そしてもう一つ、無意識のうちに行われている進展があります。例えば、人はこの世に生を受け、月日とともに赤ん坊から幼児へ、幼児から小児へ、少年、青年、成人と段階を経て成長していきます。併せて人は、肉体的な成長・進展とともに、精神的、内面的にも進展していきます。

また、心臓などの臓器や細胞など、人体の中の仕組みも意識せずとも日々進展しています。このように、人間は進展し続けていくようにつくられているわけです。このプロセスは人間だけでなく、地球上の全ての生物、さらにはこの地球自体、大宇宙の全てに当てはまることなのです。

しかし、人間だけでなく、動物も植物も鉱物も、最初から完全なものはありません。それらは完全でないからこそ、より完全に近づくために、意識するもしないにもかかわらず、絶えず進展しようと成長し続けているわけです。そして後戻りや、やり直しをしないのが本来のあり方なのです」

……あれ、人間の老いも進展なのかなあ？

大地は、真行の説明を聴きながら疑問に思った。すると、それを見透かしたかのよ

うに真行が話を続けた。

「以前、こんな質問がありました。肉体も常に進展し続けるということは、老化現象も進展なのですか、とね」

……そうそう。

大地は心の中で相槌^{あいづち}を打った。

「この世の中に存在するほとんどの生物の一番の務めは、子孫を残すことです。生物は、その大切な仕事を終わると、ほどなく命を終わります。一例を挙げると、カマキリのオスは、最後の“ご用”を終わると、メスに食われてしまいますよね。われわれ男からすると、残酷な気がします、これが生き物の性^{さが}ですね。

ところが、ほ乳類で子孫を残す仕事を終わってからなお、長い年月生き続けるのは、人間と鯨だといわれています。特に現代の人間は、国にもよりますが、かなり長生きになりました。その中でも、日本は世界有数の長寿国で、男性の平均寿命が約八十一歳、女性では約八十七歳です。しかし、それでも老いはやってきます」

「はい、老いはみんな平等にやってきます」

丸山が言葉をはさんだ。

「ですね。そうすると老いは進展でなく、後退じゃないですか？　という疑問が起るわけです。

でも、肉体の衰えも、靈魂を中心に考える…、つまり『靈主体従』の教えからすると、魂の向上につながることもなのだと考えられます。肉体が衰えていくことは、植物でいうなら枯れていくことです。つまり肉体の役目を終えて、次の段階へ進んでいくための準備の状態だと前向きにとらえればいいのではないのでしょうか…、とお答えしています。実際に肉体の衰えとともに、精神的には、それまで見えていなかったこと、感じていなかったことを知ることができます。そうですね、丸山さん」

「はい、その通りです」

「尊師さまは『消極は地獄であり、積極は極楽である』とお示しになり、生活の中で、積極的に物事を受け止め、行動していくことの大切さを説いておられます。老いも積極的に受け止めていただくとよいのではないのでしょうか」

「わたくし、そう心得ております」

丸山が笑いを誘った。

「人間の靈魂の向上には、信仰的に省みる心が大切ですが、時に、反省することを消

極的に考えられる方があります。しかし、省みることは決して萎縮してしまったり、引つ込み思案になったりすることではありません。少し上の方を見続けることです。現実的には、何事も一足飛びに、理想通りにいくものではありません。少し上を見るところというのは、理想を見ながら、今の現実を一步步づつ着実に理想に近づけていくことです。

このことに関して、尊師・出口日出磨先生のお示しをご紹介します。

理想を見つつ現実を離れず、

しかも現実を一步步づつ

向上させねばならぬ。

永遠を仰ぎつつ現在を離れず、

しかも現在を一步步づつ

向上させねばならぬ。

進展するということは、全てをより良い方向に改め、神さまのご意志に添う方向へ向上させようとする本能的な働きです。

本来私たちは神さまから、そうした“向上心”を与えられています。それを具体的に、生活や社会の中に生かすべく活動することが進展主義であり、社会改善の大道となるわけです」

……そうそう、この日出磨先生のお示しは、僕も好きだなあ。

大地は、かつて拝読した『生きがいの探求』の一節を思い出していた。

「進展していく途中には、目の前に高いハードルが立ちはだかることもあります。しかし、それ乗り越えると一気に道が開ける場合も、またよくあることです。さまざまな試練に遭い、壁にぶつかっても、進展するためには、人間にはそれに立ち向かう勇気が必要です」

真行は“修行のしおり”を手にした。

「しおりの進展主義の項目の最後に書いてあります五首の道歌をご覧ください。これまでご説明した内容を、聖師さまはお歌で端的に示されています。

進み行く月日の駒に神ならひ

われは進展主義をとるなり

進むのみただ一心にすすむのみ

積極主義の大本の道

人生は日々に新たに光明に

むかつて改め進むべきなり

逆境に立つ身は大なる順境に

向かへるものと直に進めよ

天地のあめつち一さい万事は完全に

むかふ道程どうていにあるものと知れ

(『大本の道』)

最後のお歌は、天地一切は完全に向かつて進んでいるとお歌ですね。

そして、その進み方は、直線的に進んでいるのではなく、らせん状に、そして相反するものが順序よく行われていくことで進展しているということも教えられています。

例えば、一日のうちでも夜があつて昼がある。呼吸をするにも、吐く息があつて吸う息がある。食事をすれば必ず排泄が伴います。これら相反することが順序よく適度に行われ、〝三步進んで二歩下がる〟ではないですが、一見後退しているようでも、神さまのみ目から見ると、すべてが〝らせん状に〟進展しているのですね。

皆さん、らせん階段を思い浮かべてください。あのクルクル回りながら、上へ登っていく階段です。例えば五階まで上がるとします。登っていくと必ず五階までたどり着けますが、人が登っているところを真上から見た場合、高さは違っていても軌道上の同じ位置にいるように見えることが五回あるわけですね。でも確実に高さは上がっていますね。つまり進んでいないように見えても確かに進んでいるわけです。

そのように、天地の一切万事は、止まっているように見えても、実は常に完全に向かう過程にあるのですよ、と示されているのですね」

……なるほど、らせん階段か。

大地は真行の説明に納得していた。

「神さまが創造されたこの大宇宙は、無限の広がりを持ちながら、わずかな狂いもなく、しかも一刻も休むことなく動いています。そして、私の体も、皆さんの体も、寝ている間でも神さまのご守護をいただいて活動し続けています。

勇めば勇むことが、悔やめば悔やむことが来ます。私たちも進展し続ける全てのものに逆行することなく、常に明るく、素直に、そして前向きに進んでいきたいものです。このお歌のように……」

そう言いながら、真行はホワイトボードに聖師さまのお歌を一首書いた。

一刻もやすみたまはぬ^{あめつち}天地の

神にならひてわれはいそしむ

大地は“修行のしおり”の余白に、道歌を書き写した。

中心はひとつ

真行は、ホワイトボードに道歌を書き終え、ゆつくりと演台前に戻り、大地らがメモを取り終えるのを確認してから話を続けた。

「さて、いよいよ時間も残りわずかとなってきましたので、急いで四つ目の『統一主義』をご説明いたします。

出口日出磨尊師さまは、統一主義が四大主義の中で、もっとも重要なものであると示されています。そのことが『修行のしおり』にありますので、ご覧ください」

真行はそう言うってから、修行者が『しおり』に目を落とすのを見てから読み始めた。

統一は四つの主義の中でいちばん大事なものであります。統一の重要性、これは言わずしてわかると思います。統一がなかったら、すべてめっちゃめっちゃである。すべての生命、生命体、生命力は統一の状態において、はじめて完全に発育して行くことができる。統一がなかったら芽を出すことも発育してゆくこともできない。だから、何よりも万物は統一を願う気持ちがいかに意識的に、また無意識的にいちばん強い。

（『信仰叢話』）

「要するに、全てのものにおいて、もし統一がなかったら、そのものの存在自体がなくなってしまう……というほど、とても大切だということです。ですから、意識するとしなないとにかかわらず、全てのものは自ら統一を願っているというのです」

真行は、力を込めて語った。

「実は全大宇宙そのものが、統一体をなしています。無限に広がっている宇宙ですが、果てしないその空間にある天体の全てが、統一されて動いていることはお分かりだと思います。言うまでもなく、その統一の力、活動力がすなわち神さまです。

大宇宙のほんの一部である銀河系、その中に私たちが住む地球があります。地球は太陽系の中にあるわけですが、太陽を中心に水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星までの惑星が一定の軌道を通じて運行しています。

例えば、軌道を計算することによって、私たちは次の皆既月食は、何年の何月何日に起こるということを知ることができます。それは一定の法則で、地球も月も動いているからです。もしこれがでたらめに動いているとしたら、予測することは困難です。この一定ということが大切で、もし気まぐれに変わったり、不規則に動くようになつてしまうと、大変なことになります。他の天体にも大きな影響を与えるでしょうし、

宇宙そのものの統一もなくなってしまう。

特に地球に住む私たちにとって、地球から太陽までの距離、地球の傾き、月の満ち欠けといった精密な法則に変化が生ずるとどうなるでしょうか？

きっと生命が脅かされ、私たちは生きていくことすら難しくなってしまう。それほど、宇宙全体の完全な統一体の中に、私たちは生かされていると言えるのではないだろうか。

宇宙や天体ばかりでなく、私たちの体やその細胞の一つ一つ、分子や原子といった極めて小さな世界まで、本来は統一されているはず。その統一が狂つてくると病気になることがあります。『しおり』の次のところをご覧ください」

真行が淡々と読み上げた。

①宇宙はすべて中心（主神）きこう 帰向の調和相（神意を中心とする統一体を作ること）

「ここに宇宙というのは、『中心帰向の調和相』である、と示されています。初めて聞かれる方には、ちょっと難しい言葉だと思えますが、その意味は、カッコの中に書いてありますように、神意を中心とする統一体を作ること……ですが、これでもまだ難し

いかもしれせんね。東川さん、いかがですか？」

真行は、受講者の東川^{ひがし}芳^{かおる}に訊いた。

「はい、もうひとつピンときません」

東川は恥ずかしそうに答えた。

…よかった、僕だけじゃなかった。

大地が心の中でつぶやいた。

「そうですね、まったくかまいませんよ。このお示しを例え話で説明すると……例えば、回っているコマと想ってください」

……コマ？

大地は首をかしげた。

「中心軸がしっかりといて、ぶれることなく、まるで止まっているように見えるほど、よく回っているコマを思い浮かべてください。少しもぶれることなく、回っているためには条件が必要ですね。

まず当然ながら、軸は一本ですね。これが二本なら回りようがありませんよね。そして、コマ本体の中心、ど真ん中に軸があるということです。その条件がそろい、遠心力と求心力のバランスが取れ、高速で回転しているので、静止しているようにさえ

見えるのですね」

……なるほど、コマか。

「大宇宙の全ては、その中心が神さま、あるいは神さまのご意志、つまり神意であって、力がそこへ向かって働き、そうするとコマが回ろうとする力も同じように働くわけです。それが求心力と遠心力のバランス：調和が取れている様子、ありさま：つまり、相”になつてゐるということ、あくまでも例えですが、このコマは、中心帰向の調和相”ということになります」

「先生、分かりやすい例えですね」

丸山が思わず声を上げた。大地もつられて頷いた。うなず

「ありがとうございます。これを大本の信仰に例えると、中心はまことの神さまお一柱であります。あつちこつちの神さまを信仰していたら、信仰もぐらついてしまひますね。

また、現界的に大本の教団に例えたら、中心の軸は教主さまです。当然ながら、教主さまはお一人です。二人であるわけがありません。そして教主さまを中心に、信徒が内に向かったご用に励む、するとその活動が外へ向かって広がっていく：ということ

とになると思います。神と人、教主さまと信徒……つまり上下が一致していく大道、ということですよ。

……なるほどなあ、確かにそうだなあ。

大地は心の中で頷いた。

「ここで一つ注意しておきたいのは、神さまがお示しになっているのは、統一主義であって、統制主義ではないということです。統一と統制とは大きな相違があります。統制ということになると、一つの枠にはまってきて、無理矢理に中心に縛られてしまうことになります。そうではなく、統一というのは自らなってくるものなのです。

ですから、一つの家族でも父親が強権を発動して無理矢理統制しようとしても長くは続かないはずです。あくまでもご主人を中心に統一、上下一致でいかないといけません。もちろん最近では、ご主人が父親とは限らないかもしれませんが……、ねえ、丸山さん（笑）」

「その通りでございます」

「丸山さんのお宅は、丸山さんを中心に上下一致、統一されていると思いますが……」

「あははは、さあどうでしょうか」

丸山の発言がさらに笑いを誘った。大地も丸山に笑顔を向けた。

「真面目な話をしますが…、あつ、これまでも真面目にお話をしてきたつもりですが…。
(笑)

皆さま、大本では、夫婦のあり方に関して、夫唱婦随ふしょうふずいの関係であることの大切さを
説かれています」

「そうそう」

丸山が小声で言った。

「『信仰覚書』の中に、このようなお示しがあります。

一個の男と一個の女は同権であるが、夫婦の場合には戸主こしゅとして一家を代表するのは男子である。ゆえに、夫唱婦随でなくてはならぬ。

もし一家に二人の主権を主張するものがあれば、かならずその家は分裂する

(『信仰覚書』第七卷)

夫婦ゲンカが絶えない家庭、奥さんが子供の前でご主人を批判したり、悪口を言っ

ているような家庭は、子供が親を尊敬しなくなります。これは奥さんだけに問題があるわけではなく、批判され、尊敬されない夫にも何か問題があると思います。夫唱婦隨の道を夫婦がともに再認識し、夫は一家の大黒柱であることを自覚し、妻は夫を立てていくように努めることが、統一的な家庭を作り、心豊かな子供を育ていくことにつながるのではないのでしょうか。

現在のように核家族が進み、個人主義的主張が強く叫ばれ、「家」が崩壊していく中で、このような考え方は「古い」と思われがちですが、本当の「家」のあり方、本質を見極める必要があると思います。家庭でも、中心は一つでないといけないのですね。ただし聖師さまは、男女は針と糸との関係で、全てに夫を先にすべきだとおっしゃっています。でも形だけの夫唱婦隨は、差別や弊害につながることもあるので、本来人として、男女は全くの平等、同権であることもお示しになっています。

私たちにとって一番身近な家庭でも、統一はとても大切なことであるわけで、ましてや全てのものにおいて、統一はもつとも必要なことなのですね」

真行は、正面の時計で時間を確認した。

「神さまのもとに、全てのものが和合し、神さまが願われる理想世界の実現のために、

私たち一人一人が、そのご用に奉仕していくことが、統一主義、上下一致の大道の根幹になることをお伝えして、四大主義の講座を終わらせていただきます。ご静聴、ありがとうございます」

真行が深々と頭を下げ、それに合わせて、大地たち受講者もそろって頭を下げた。大地が時間を見ると、予定の午後三時半を少し回っていた。

昆虫の災い

「夕拝まで一時間半ぐらいありますね」

大地が丸山に声を掛けた。

「修行のプログラムは結構忙しいでしょう。でも、この三日目の夕拝前だけは少しゆつたりできるんだよね」

「そうですね」

「ジツと座って話を聞き続けるというのも、なかなかの“修行”だからね」

「はい、僕もそう思っていました」

大地が頷いた。
うなず

「さて、雨宮君はこれからどうするかな？」

「そうですね…」

大地と丸山は談笑しながら、神教殿の南口を出た。

「こんにちは。修行はいかがですか？」

右手、瑞月舎の方から歩いてきた男性が声を掛けてきた。

「あつ、こんにちは。今朝はお世話になりました」

大地が返答した。男性は高熊山参拝で案内してくれた井端雅春だった。

「井端さん、こんにちは」

丸山もあいさつした。

「丸山さん、修行で魂がだいぶ清まりましたか？」

井端が笑顔で丸山に話し掛けた。

年に何回も大道場修行を受講している丸山とは、井端も顔なじみになっていて、冗談が通じ合う仲のようだが、と大地は感じていた。丸山と三日間一緒にいて、丸山を知らない天恩郷の奉仕者（職員）はいないくらい「有名人」らしい……ということを大地も理解し始めていた。

「清まつてきましたよ。なかなか真っ白にはならないけどね。灰色くらいかな」

「そうですか、もうすっかりきれいになっていくかと思っただんですが（笑）」

「なかなかどうして」

丸山が少し出っ張ったお腹をさすりながら、笑顔で答えた。

「今日は作業ですか？」

「はい、大祭前に北丘さんと二人で櫛刈^{かし}りをしています」

井端は後にいた北丘弘泰を見ながら答えた。

「こんにちは」

北丘も丸山とは親しいらしく、気さくにあいさつしを交した。百八十五センチはあるだろうか、巨漢ながらも愛らしい表情が印象的な男性である。

「ご苦労さまです」

「どうも」

「北丘さん、まだ刺されてませんか？」

「はい、大丈夫です」

「井端さんも？」

「まったく刺されていません」

「たいしたもんですなあ」

丸山が感心したような表情で言った。

側^{そば}にいる大地には、三人が何のことを話しているのか、さっぱり分からなかった。

「では丸山さん、失礼します」

井端と北丘が会釈をし、二人は左手の階段を降りていった。その後ろ姿を見送りながら、丸山が感心したような表情でつぶやいた。

「たいしたもんだ」

「???」

大地は首をかしげた。

「丸山さん、今のお話は何のことですか？」

大地が訊いた。

「あはは…、そうだね、雨宮君には何のことか、分からないよね」

「はい」

「実はね……」

ゆっくり歩きだした丸山は、今の会話について語り始めた。

夏場、天恩郷内の草や参道の檜垣かしがきの檜は、勢いよく伸びてくる。苑内の整備を担当している管理課神苑では、八月七日の瑞生大祭の前に、草刈りと檜刈りに追われる。特に猛暑の中、真奈井通りなど主要な参道脇の檜を刈り込んでいく作業は、根気のいる仕事だが、今年もその作業に井端と北丘とが当たっている。井端が先輩で、北丘は

井端よりだいぶ後から奉仕に上がっているが、ペアで作業をするようになって、もう二十年以上になるという。

聞くと会話の中の「刺された…」というのは、“ハチ”のことであつた。

「桎垣の中には、ところどころにハチの巣があるんだね。アシナガバチや黄色い小さなハチが巣を作っているらしい。井端さんは、もう長い間、桎刈りの作業をしてきたんだけど、毎年のようにハチに刺されていたんだね」

「えっ、毎年刺されるって、大丈夫なんですか？」

「スズメバチやクマバチじゃないから大丈夫なのかな？」

「でも、弱い人だと、アナフィラキシーショックになるんじゃないですか？」

「そうらしいね。でも、井端さんは強いんだろうかね、毎年刺されてた…って言うてたからね」

「そうなんですか、痛そう」

「そりゃあ、痛いよね。それで彼は、桎を刈る前には、桎垣の中に殺虫剤をスプレーしてから作業するようにしていたらしい。ところが、それでも刺されるんだって」

「あら…、気の毒ですね」

大地が顔をしかめた

「北丘さんも作業をするようになった当初は、井端さんと同じように、刺されていたらしい」

「北丘さんは体格がいいから、刺される面積も広くて、狙われますね」

「ハチからすれば、大きな標的だ」

丸山が笑った。

「それで彼は、なぜ刺されるんだろうか、と考えたらしい」

「考えた？」

「そう…、考えた。そして、ハチも生き物だから話したら分かるんじゃないか、という結論に達して、ハチとある『契約』を交わしたというんだ」

「契約…？」

「今後二度とあなたたちに殺虫剤をかけたり、殺したりしないと約束するから、あなたたちも刺さないでください…、とね」

「えー、ホントですか？ それで…」

「するとそれ以来、北丘さんはまったく刺されなくなったというんだよ」

「すごい！　でもさっきの北丘さんの服装は、半袖でしたよ。それでも刺されないんですか？」

「そうなんだよ、暑いから彼はいつも半袖で櫛刈りしているそうだ。でも、刺されない。それも櫛刈りの時だけじゃないそうだよ」

「どういうことですか？」

北丘はある時、藪やぶの中で作業していて、気付くと目の前にスズメバチの巣があり、数匹が飛びまわっていた。さすがに今度ばかりは刺されるかもしれないと思ったが、ゆっくりとその場を離れると、幸いにも難をまぬがれた、というのである。

「へえ、すごい」

「それからある時はね、部屋に戻り、顔を洗おうと首に巻いていたタオルを取ると、何とそこから、ブーンと一匹のスズメバチが飛んで出たというんだよ」

「えっ、ということは、しばらくの間、首にスズメバチがいたってことですよ。それで刺されなかったんですか！」

「さすがにその時はビックリしたって言ってたよ」

「すごい話ですね」

「そうだろう」

自分のことではないのに、丸山はちよつと得意そうな顔になっていた。

「それで、井端さんだけどね…」

「毎年、刺されているんですよね」

「いや、正確には、刺されていたんだ」

「えっ」

当初、井端は北丘の“ハチとの契約”の話は知らなかった。だが、体重百二十キロの巨漢の北丘が、しかも半袖で作業しているにもかかわらず、櫛刈り作業で何年もハチに刺されていないということに気付き、その理由を知ることとなった。

…それなら自分もやってみよう、と北丘にならつて、“ハチとの契約”を結んだ。

と言つても、ハチから返事があるわけではないが、とにかく、櫛刈り作業前に殺虫剤をスプレーすることをやめ、“もう決して殺しませんから”と約束した。するとどうだろう…。

「それ以降、ハチに刺されることがなくなつたそうなんだよ。で、さっきの話だよ」

「ああ、だからまだ刺されていませんか？」　って訊かれていたんですね」

「そう、そういうこと。だから、もう七、八年くらいにはなるんじゃないかなあ」

「なんと興味深い話ですね」

「雨宮君、『神言』の中に、『昆虫の災い』^{はうむし}という言葉があるでしょ」

「はい、ありますね」

「“昆虫の災い”というのは、毒虫などの災いという意味で、虫やへび、ムカデなんかに刺されたり、かまれたりすることも、そこには何かしらの原因があるということらしいね。確か、聖師さまは『霊界物語』の中に、生き物を殺さない人は、毒虫が襲つてくることはない……という意味のお歌を残しておられるはずだよ」

丸山が大地に伝えた道歌は、『霊界物語』第十七巻・第十二章の章末に記載された短歌である。

生きもの
生物を屠らぬ人は夏の夜も^よ

毒虫襲ひ来たることなし

「そうなんです」

「だからあの二人は、聖師さまのお歌で示されたみ教えを実践しているということだね」

「なるほど、教えを頭で理解するだけでなく、実践に移しておられるということですね。しかも二人そろって実証されているので、説得力がありますね」

「私もね、わが家の小さな畑でハチを見つけた時には、それまでは刺されたらいけないと避けていたんだけど、この話を聞いてからは二人に習って、積極的にハチに話しかけるようになってね…」

「なんて話しかけられるのですか？」

「朝ならまず、＼おはよう＼とあいさつして、＼お世話になっています。いつも受粉してくれて、ありがとう…＼ってね。よく考えたらそうだよね。ハチのおかげでキュウリやナスが受粉できて実を結び、おいしく頂けるんだから、感謝しないよね」

「なるほど、そうですね。良いお話を聞かせていただきました」

「以上、道場講座・番外編でした（笑）」

「ありがとうございました」

二人とも笑顔になった。

みろく会館二階のテラスを歩きながら、万祥殿の方を向くと、きれいに刈り込まれた真奈井通りの檜垣が目に入ってきた。

大地は、爽やかな気分になっていた。